

人間

地域

共生

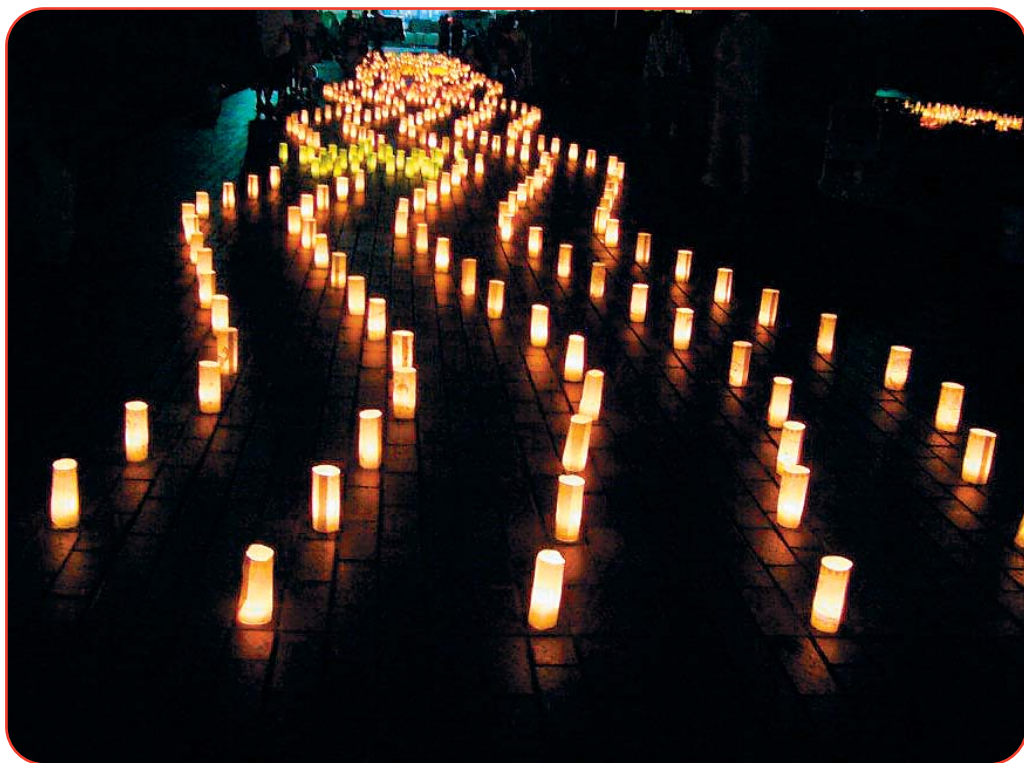
2011年3月

6

人間文化研究所年報

特集 博物館と大学

- ▶ 基調講演
「市民共生の博物館を目指して—九州国立博物館—」
- ▶ シンポジウム
「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」



01 特集 博物館と大学

基調講演

「市民共生の博物館を目指して——九州国立博物館」……………三輪嘉六

シンポジウム

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

……………三輪嘉六・水谷栄太郎・坂本喜樹・山田明・阪井芳貴

博物館と大学の連携について……………水谷栄太郎

高浜市やきものの里から美術館と特別展「ひめゆり

平和への祈り——沖縄戦から65年——……………安藤さおり

韓国の寺院・神仏習合・博物館

——二〇〇九年度、二〇一〇年度の調査から——……………吉田一彦

51 文献紹介

〈幼児教育研究〉2010、第30巻第2号、283-308

幼稚園—小学校 連携教育に対する幼稚園と

小学校教師の認識及び実態比較……………チソンエ

70 書評

福吉勝男 著

現代の公共哲学とヘーゲル……………久田健吉

小川仁志 著

はじめての政治哲学——「正しさ」をめぐる23の問い……………伊藤恭彦

伊藤恭彦 著

貧困の放置は罪なのか

——グローバルな正義とコスモポリタニズム……………小川仁志

菊地夏野 著

ポストコロナリズムとジェンダー……………山本明代

門池啓史 著

日本軍兵士になったアメリカ人たち

——母国と戦った日系二世——……………村井忠政

小林かおり 編

日本のシェイクスピア上演研究の現在……………田中敬子

日沖敦子 著

毛髪で縫った曼荼羅——漂泊僧空念の物語——……………吉田一彦

山田陽子 著

中国人就学生と中国帰国子女……………成田徹男

柴田哲雄・やまだあつし 編著

中国と博覧会——中国2010年上海万国博覧会に至る道——……………山田明

名古屋教育編さん委員会 編

写真で綴る名古屋の教育……………阪井芳貴

93

プロジェクト研究・シンポジウム・講演会報告

地域に根ざす次世代育成支援としての「字字」社連携の試み

——小学校における音楽のアウトリーチ活動報告(二〇〇九年度〜二〇一〇年度)——

……………有賀克明・梶田美佳

シンポジウム「越境文学の現在——中国語文学と

日本語文学を中心に」……………土屋勝彦

「名古屋市立大学憲法・教育法判例研究会」

二〇一〇年活動報告……………菅原真

「トランスナショナル研究会二〇一〇年活動報告」……………菅原真

二〇一〇年度「ドイツ現代文化研究会」活動報告……………土屋勝彦

「名古屋の個性・魅力・歴史と観光戦略ビジョン」

ワークシヨップ……………山田明

ハンガリーのベーチ大学との共同研究コンフレックスとワークシヨップの開催

「東欧・バルカン地域におけるインターカルチュラル圏の形成と変容」……………山本明代

109

人間文化研究所の活動報告

サイエンス・カフェ

マンデー・サロン

116

人間文化研究所年間活動

表紙写真…名古屋博物館の「はくぶつかんのなつまつり」(二〇一〇年八

月三日〜八日)で天の川に見立てた約千本の蠟燭。本学学生が

ボランティアで参加。

特集

博物館と大学



名古屋市立大学人間文化研究所では、二〇〇五年の開設以来「人間・地域・共生」をキーワードに掲げ、さまざまな活動を展開して参りました。その中でも年間最大の企画が講演会・シンポジウムですが、二〇一〇年度は、前年度より始まりました名古屋市立大学と名古屋市博物館との連携事業による新たなまちづくりについて具体的な展望を構築するために、「博物館と大学がつくりだす魅力あるまち——市博物館と市立大学の新しい取り組み——」と題して開催いたしました。特に、「市民と共生する博物館」をモットーに運営を実践されておられる九州国立博物館の館長三輪嘉六氏をお招きし、博物館と市民と大学との連携について講演していただきましたが、大変刺激的なお話を伺うことができました。また、それを受けてのシンポジウムでの意見交換から、市立大学と市博物館との連携による魅力あるまちづくりの可能性を、市民の皆さまとともに検討する機会になったと思っています。そこで今号では、この講演とシンポジウムの誌上再現と関連する寄稿とで、特集を構成することにいたしました。

基調講演

『市民共生の博物館を目指して―九州国立博物館―』

九州国立博物館館長

(みわ・かろく)

三輪 嘉六

三輪館長…みなさんこんにちは。お招きをいただいて、感謝申し上げます。今日私は、博物館が市民とともにあるあり方をお話しするつもりですが、その前にお話を伺いますと、この大学の人間文化研究所の創設六周年と聞きました。関係のみなさんおめでとうございます。実はわたくしどもの博物館も、つい先週ですが、開館して五周年を迎えました。平成一七年の一〇月一六日にオープンした博物館です。ちょうどこの一〇月で五年を迎える、つまり、六年目に



大学と地域連携で

入ったというわけです、その間入館者数はちょうど八〇〇万ちよつとです。一年間に平均しますと約一六〇万人の入館者。で、この一六〇万人の入館者は一体何か、率直に言って市民ということになります。つまり市民の支えがあつて一六〇万人の入館者、あるいは八〇〇万の、入館者を生むことができた、そういう理解です。したがって、私どもの博物館は市民とともにあるというあり方を大きな目標に掲げながら、日常的に展開しておりますけれども、そんな様相の一端を、この場で、被歴をしたいとそんな風に思います。で、博物館の館長が皆さんにお話をするとなりますと、展示がどうの、素晴らしい展示物が、あるいは国宝がどうの、本職はそっちの方なんですけれども、国宝や重要文化財がどうか、そういう話をするのが本来かもしれません。しかし、今日こころは博物館の運営、展開、そういう流れを、今この大学が地元の瑞穂通り

と、そして名古屋市立博物館、つまり、市民と博物館と大学という、三つの組み合わせの中で新しい展開を何か模索したいと、思つてる矢先やに聞いておりますので、何かの参考にしていただいたらと、そのように思っております。

実は博物館では開館の当初からある目標を掲げました。博物館はどうあるべきかというときに、昔からそんなに目標やコンセプトはあんまり掲げませんでした。私どもの博物館として、まず何よりも大事なことは、市民に愛してもらうために、あるいは多くの若い人たちに分かつてもらうためにも、「学校よりおもしろく、教科書より分かりやすい」、こういう目標を立てました。実は、準備室時代から、まだ館が九州に出来る前、東京に準備室がありました、その時点から、これは学校より面白いところを作つていこうという、そんな思いもあつて、展開してみました。ところが実はびっくりしたことがありました。九州のある市、その教育委員会教育長さんから電話がありまして、今度の九州国立博物館の準備室長はとんでもないことをいう、学校教育を誹謗するものだという抗議を受けました。いや、私もこれから大変なところに赴くんだなという思いはありましたが、まあ、

「市民共生の博物館を目指して—九州国立博物館—」

分かっていただきたかったのは、もちろん学校教育も大事、だけど、そうした思いをこめて博物館を作っていきたくい、ある程度ご理解いただいたということです。そして、九州に博物館があるということで、これは当然の論理ですが、「文化は西から九州から」としました。どこでもそうですが、文化は東京からやってくるとか、あるいは、東京から発信されてくるとか、名古屋でも多分そういう思いの方も何人かいるかと思いますが、特に、九州は多分にそういう面が強かった。そうではなくて、九州から文化を、東の方に発信していくと、だから、西から発信する文化をしっかりと築いていくと。名古屋、この地域は、少なくとも、日本列島の、ほぼ真ん中でしょうから、名古屋から発信するというのは四方八方に、発進していくということなのですが、少なくとも九州では、西から、東に向けた、光を考えていくということなのです。そして、もうひとつ大事なことは、「日本文化の形成をアジアの視点から見ると」というコンセプトを掲げております。国立博物館はそれぞれ基本的に各コンセプトを持っていきます。ちょうど、名古屋市博物館もいわゆる、尾張徳川を中心とした、あるいは、尾張の文化を、大きなコンセプトに、当然、持たれ

ているわけです。九州の博物館はですね、九州について少しだけ考えれば分かりますが、例えば弥生時代もそうです、古墳時代もそうです。あるいは、遣唐使でもそうです。中世もそうです。みんな、中国、あるいは、朝鮮半島、あるいは東南アジアからの文化はみんな九州を経由して東の方へ、どんどん広がっていく。簡単にいえばそういう、ケースが多かったんですよ。別にアジアの文化だけではなくてヨーロッパからの文化でもそうだったです。

一六〇〇年代の大航海時代、一番最初の拠点になったのがやっぱり九州だったわけです。そういう点で、日本文化の形成をアジアの視点からしっかりと見ていくという、そういうコンセプトを掲げております。で、実はですね、これ、何でもないことなんです、この、三つのコンセプトあるいは目標をあらゆる場で掲げ、小学校のや大学の間でも町内会の大会でも私たちが一緒に、行動する時もこういうコンセプトをしっかりと出していく。だから、市民の多くの方は、この三つのコンセプトを、皆さんよく御存知です。何でもないことですけれども、私はそれを非常に大事なことだと思っています。だから大体、町の商店街の方も、古くから町を愛している方ももちろ

んのこと、新しくやってくる人たちも、あそここの博物館のコンセプトはこうなんだと学校よりおもしろいことをやろうとしている。あるいは、アジアとの関係をしっかりと見ていくこうとしていることをしっかりと定着させるようにしております。ここ二年くらい前からですか、アジアからの観光客が物凄く多くなっています。もちろん、名古屋でも多分そうだと思いますが、例えば中国から、まあ、最近尖閣列島とかいろいろな問題もあって、多少、鈍っているところもありますが、今年は四月から一月にかけて、六六回のクルーズ船が九州を経由して神戸の方にいきます。ここで約二千数百人の中国の観光客が乗船しているとききますが、その中の大体八〇〇人から一二〇〇人くらいですかね、船が着くたばにお見えになる。これが本年では六六回お見えになる計画です。例えばわたくしの出勤時間帯で見ますと、街中（太宰府天満宮参道）が中国語で溢れている。あるいは、ハンブルグが溢れています。そうすると、もう、商店街の各店では、ハンブルグで、あるいは中国語で呼びあつて名物の梅ヶ枝餅を売っている。博物館はどこですかと、聞かれると、ハンブルグや中国語で応える。そういう流れの中で、商店街の人達も結構この

コンセプトをしつかりと受け止めて
くれているということをまず、理解
してほしいと思います。そして、九
州国立博物館は国立博物館として四
つ目の国立博物館です。東京、奈良、
京都の順番で国立博物館ができます
が、一番最初の東京国立博物館は一
八七二年です。そして、一八九〇年
代に、奈良と京都にできます。この
ように最初の博物館は一九世紀にで
き、二〇世紀には国立博物館は新た
にできませんでした。二一世紀にな
って、九州国立博物館ができた。と
いうとですね、千葉の歴博が、ある
いは大阪の民博も国立博物館だろう
と、そうおっしゃるかもしれませんが
が、それは、同じ国立博物館でも、
共同利用研究機関としての、大学と
同じような組織です。それに対して
この四つの国立博物館は文化財の保
存や活用を中心として展開している
博物館です。それぞれ、コンセプト
を申しますと、九州はさつき申した
ようなコンセプトですが、東京は、
中央にあるということもあって、総
合的に日本の文化を見えています。そ
して、奈良はですね、六世紀の中ご
ろに日本には仏教文化が伝わってき
ますが、その、仏教文化、あるいは
仏教美術、そしてその中核になって
いるのが、奈良の地域。京都はもう、
雅の文化です。平安時代の国風文化

を中心とした、京都としての地域的
な展開。そして九州はさつき申した
ようにアジアとの関係を中心とした
取組み、こういう展開です。そして、
いま四つの博物館が独立行政法人と
して新しく国立文化財機構の中にあ
ります。いま問題となっている政府
の仕分けはお金が出さないけども頑
張れという話です。先般、中国に行
きましたら、来年の展覧会の準備に
まいりました。内モンゴルですが、
壮大な博物館ができています。そこ
で聞いたのが、お金はいくらでも出
す、だから頑張れと言われているよ
うですよ、向こうは、ずいぶん違う
なと思いました。そういう点ではい
まどちらかというと精神力で頑張っ
ておりますが、まあそういう展開で
す。まあこんなところで恨みがまし
い事を申し上げてもしょうがないで
すが。次の話をします。そして、ち
よっと、触れましたように、この博
物館、最初からみんなが作った博物
館という認識です。わたくしはそう
いう位置づけにしたいと思っており
ます。わたくしはそれを常に表面に、
正面に置きたい。つまり、どうい
うことかと言うと、もともと九州では
非常に熱い思いがあって、早くから
九州に国立博物館を作りたいという
動向がありました。九州の人たちに
は、明治三二年からの、要望という

風におっしゃっています。つまり、
明治三二年日本美術史の大先達、岡
倉天心先生が、橋本雅邦などと九州
を訪問します。横山大観はその時に
開催されていた展覧会に出品してい
たと思いますが、その時に、当時の
福岡日日新聞と聞いておりますが、
今の西日本新聞、その記者につか
まて、九州博物館の設立を望むと
意見を述べております。それが、九
州国立博物館の原点だと言う風に地
元の人たちはおっしゃっています。
わたくしは、多少抵抗しております
て、まあ確かに天心先生が書いたも
のにそう書いてあります。でも、天
心先生はそのころ日本全国に博物
館を作りたいと、それは美術教育のた
めにとりう前提です。それで、九州
では二か所、福岡と、つまり遠の朝
廷の大宰府。奈良時代の、地方政治
の一番中心地である大宰府、そして、
もう一か所が鎮西の地の、つまり、
熊本。この二か所に作ることを希望
したわけです。
そういうことで明治時代からの実
は大きな要望だというのが地元の考
え方なんです。今もそうです。だか
ら九州国立博物館ができたときに地
元の議員の先生の中から岡倉天心先
生の銅像を作るべきではないかと言
われまして、まあそういうこともあ
りました。

「市民共生の博物館を目指して—九州国立博物館—」

それにしても、この博物館は私は市民とともにあるというありかたは館活動の大きな原点の一つだと思っておりますが、平成六年に、「新構想博物館の整備に関する調査研究委員会」が文化庁に設置されました。実は以前から九州で国立博物館という運動がありました。この場であえて申し上げれば名古屋でもありました。名古屋のひとはあっさりしているのか、すっとひいてしまったんですが、あの平成六年の頃はまだ九州は燃え立っていたんです。

それでこの調査委員会ができたときにどこに建てようかという議論と、どういう博物館にしようかというそういう議論がはじまるわけです。さて、何が新構想博物館なのか。これは内容を考えたものではないんです。運営を考えた施策でした。つまり、平成六年の頃の大蔵省の考え方はこれから国が一〇〇%出すような施設はありえない。民間の基金を、あるいは地元の負担をというのが当時の考え方です。つまり、この新構想というのは民間の基金を仰ぎ、都道府県からも負担していただく。そういう博物館でなくてはならないというものです。国が五〇%、国というのはこの当時文化庁です。それから県が四〇%、残りの一〇%は市民の寄付でという、そういう発想です。

つまり市民が参画している博物館の原点というのはこの一割の負担というところでもあります。いづれにしても、そういう構想は今までなかったわけ、国立博物館の場合は国の支出が一〇〇%という理念ですから。それを県と市民と国で建てようということでした。具体的に申し上げますと、平成一二年の三月に九州国立博物館設置促進財団という基金をつくるための財団が設置される。これは九州の経済界を中心として設置されます。そこで募金活動をやって、参加事業千社、そして個人で八万人の人が寄附をします。これで、全体の建設費の一割をまかなう、このときに約四〇億あつまつたというところでその中の二五億が博物館建設費に負担される。つまり博物館建設費全体が二五〇億だったわけです。その一割をこの財団が負担したことになります。実はこれを申し上げてお分かりのように、そのこと自体がすでに市民の参加です。だから市民が参加しているという意識はここで明らかに持つてもらったことができたというふうにおもいます。この博物館は私たちがつくった博物館だと皆さんおっしゃるんです。そういう気持ちをおわれわれがいかに大事にしていくかというのがこれからの非常に大事な取り組みだと私は考えて

おります。

とくにそういう思いに至った二つの経験をしております。それを紹介します。ひとつは、まだ準備室が東京にあるころ、工事中の現地をみに行きます。博多の近郊に二日市というところがありますが、ここで電車から降りてタクシードで現場に行きます。ある時タクシードに乗って運転士さんに九博に行ってくださいというと、タクシードの運転士さん、はあっているんです。九博って何ですかって聞いてくる。地元では当時国博と言っていたんです。国立博物館のこと。でも、僕は東博、奈良博、京博、九博なんですよ。だから、九博なんです。で、なかなか最初は意思の疎通がうまくいかなかったんですが、そのうち運転士さんが「いやあ、私はあの博物館に二〇万円寄付したんですよ。」二〇万ですよ。わたしなんかいまだに一銭も寄付しておりませんが、それはなにかといいますと、バブルがはじけてほんとに経済的には大変な時期だけでも、当時会社から言われて寄付したとのこと。その話を聞いてほんとに身の引き締まる思いがしました。そして、もうひとつの経験はのちに紹介しますけれども、博物館はトンネルを抜けると博物館だった。という景観になっております。で、そのトンネルを抜け

たところに、開館した後のことです
が、親子連らしい家族が博物館の窓
のほうを指さしながら「あそこの窓
のあの辺りはうちの寄付だね。」と
おっしゃっていました。そういうのを
聞いたときに、ああこれはもう市民
に支えられている博物館だと痛切
に感じました。だから、それをいか
に大事にしていくか、わたしだけで
はなくスタッフ全員がそれをいかに
大事にしていくかということはこの
五年間続けてきたつもりなんです。

そして、博物館を少しだけ紹介し
ますと、博物館建設に向けての具体
的な動向は平成一二年になって調査
室ができ、その後準備室となるわけ
ですがわたくしは一四年からで、そ
の平成一六年三月に建物が竣工しま
す。私は歴史的な環境を大事にして
きたつもりです。この博物館は歴史
的な環境をいろんな意味で与えられ
ているからその歴史的な環境ととも
にあるそういう博物館として活動し
ていきたいと思っています。大宰府
の街はご存知の方多いと思いますが、
都心福岡市から、西鉄電車でだいた
い二〇分くらいで、そこに、例の菅
原道真公を祀る太宰府天満宮があり
ます。その境内の一隅の山上のほう
にあるわけです。周囲は歴史的環境
にめぐまれて政庁があり、都府楼、
学校院があつて、そして観世音寺が

あつて、裏の一帯が大野城という、
すばらしい歴史的な環境となつてい
ます。この環境を博物館としても大
事にしていこう、取り込んでいこう。
そんな目標を考えております。そし
て、世界的にも大規模ないわゆる防
塁である水城がありますがこれらの
周辺は住宅地が、また緑の空間もあ
ります。当然市はマチの一つの行政
的な展開として最近マチぐるみ博物
館を目指す。あるいは歴史的な環境、
あるいは文化的な環境、歴史的な風
土そういうものをどうするかという
のは当局の大きな課題になつてい
るはずです。だから、それと博物館が
一緒になつて対応するようなあり方
を今後模索していく。私たちのめざ
すのは、やがて博物館が真の文化的
景観のひとつになることと思つてお
ります。そんな形で博物館をつくつ
ていきたい。そういう思いがでした。

博物館と天満宮の比高差が約二〇メ
ートルありますが、それをエスカレ
ーターであがり動く歩道でトンネル
を抜けるようになっていきます。そして
トンネルを抜けると、この博物館だ
ったという形です。この博物館がさ
つと目の前に表れますが敷地が一六
万、建物面積が延約三万の規模です。
建物の写真をご覧になって是非、理
解していただきたいことがあります。
本職は、文化財学、考古学で、博物

館学であります、かつて大学での
博物館学の講座ではガラス張りの博
物館ってのはありえない。とんでも
ない話だつていうことを講義したこ
とがありまして、どういう皮肉か私
はいま現実に、ガラス張りの博物館
に対応するということになるのです
が、このガラス張りは、ある面では、
美しさを出す反面、文化財の保存の
面で、問題が多いだろうとお思いの
みなさん多いと思います。でも最近
は、いわゆるUVカット等対処の方
法がさまざまな形であります。ガラ
スも二重にしてあつたりして安心安
全な面で、十分対応出来るだけの、
内容と構成と思つております。それ
にしても、このガラス張りは、周辺
の緑を映して綺麗にみえます。しか
し、問題点が無いわけではありませ
ん。ご想像通りですが鳥がぶつかる
被害があります。可哀そうですが、
一般的に、そういうことがあつた時
に、つい隠したがる。そうではなく
て、ここは自然保護の人たちと一緒
になつて、むしろ、積極的にその現
象をリサーチする。ボランティアの
人たちも一緒に加わつて、どの種類
の鳥が何時ごろに落ちたとかです、
そういうデータをここ四年間ずーつ
ととっています。環境を考えるボラ
ンティアの人たちの仕事です。鳥が
ぶつからない対策を考えるなど、色

「市民共生の博物館を目指して—九州国立博物館—」

んなことをやってます。なかなか学習効果があがらないといったところでしょうか。でも、初期段階から見ると随分少なくなりました。三六五日とっていいでしょう、そういうデータをとって、鳥の遺体も回収して冷凍保存して、というような調査を、ボランティアの人たちがやっている。そこで、専門家などの指導を受けながら色んな形でリサーチし、一歩踏み出しているということです。次に建設工事について少し話させて下さい。この博物館、みんなで作った博物館ということを活動の基盤にしていきたいと思ってきました。これは建物の本体が大体できたころの記念写真の一つです。この工事に参加した全ての人たちが写っています。つまり、私達はこれをみんなで作った博物館のシンボルの一つにしております。博物館がまだ出来上がる前にまだ東京上野の博物館の中に準備室があったときに、開館を目指して、また九州国立博物館のPRを兼ねた展覧会をやってみよう、しかし何にも物（文化財）が無い。博物館って物が無いと展覧会にならないのは、よくご存じのとおりです。でも、無ければ無いなりに何かをやるうということでした。「はじめの一步」という展覧会を開きました。「はじめの一步」小さな部屋での展覧会でしたが、

壁いっぱい記念写真を伸ばした展覧会でした。もちろんいくつかの資料も並べました。ものすごくうれしかったのは、そう、たったこれ一枚のためといってよいと思いますが、九州から大勢の方が見に来た。これからも館のありかた、これをどういう風にしっかりと出していくかというのは、原点に戻って、展開していく初心に戻って博物館を考えることも大事と思っています。いずれにしてもこの記念写真はみんなで作ったということを強調した意義のある一枚の写真です。そして、市民と共にある博物館をどう作るかは、最初からのテーマだったわけですが、それから工事中からしっかりと市民と共にあるありかたを考えなければならぬ。出来てからでは遅い。そういう背景があるのは、博物館を支えようという市民の方たちは、博物館が出来る前からボランティアみたいな組織が出来て、世界中の博物館を見て回っている。その熱心さに私たちも背中を押されてきたということもあります。まず工事の段階から市民の問題をしっかりと考えることが大事だと思ってきました。そのためには、工事関係者としてしっかりした打ち合わせをして、敷地工事の中で出てくる土を全部この中で納めるような工法を取り入れてきた。土砂の切り

盛りを敷地の中で済ますという、何でもないようなことですが、これを工事の関係者としてしっかり話し合ってたわけです。ダンプカーが工期の二年間、土を満載して街中を走りまわるとしたら、いくら誘致活動によつて生まれた博物館であつても、それは市民の方にとっても嫌になると思います。騒音、埃、まったくダンプカーが走らないという訳ではないのですが、最初からそういう取り組み方をしっかりと考える。また、実行することが大切と考えてきました。また、建物の躯体はPC板を使っている、プレキャストコンクリート板（PC板）で構築してあります。つまり、何かというと、躯体工事に関しコンクリートミキサー車をガラガラと回すということが無い工法の採用ということになります。議論を重ねて街中をダンプカーやコンクリートミキサー車が二四時間走りまわるところを避ける。せっかく市民の人たちの誘致活動が実った博物館ですので、一生懸命になっている市民の活動に水を差さないというような思いもあつて、そうした対応をしたということです。もう一つちょっとご紹介したいのは、博物館全体として環境に配慮しているということをいいたいです。例えばエントランスホール天井には、間伐材を使っております

「市民共生の博物館を目指して—九州国立博物館—」

と思います。先般、北朝鮮による砲撃の問題であるとか、尖閣諸島の問題で日本政府は危機管理がなっていないという議論があったみたいですが、まあそれはともかくとして、博物館の危機管理をどうするかということ是非常に大きな課題です。で、わたくしたちが危機管理に最も神経質になっているのは、例の阪神淡路大震災を経験したからです。阪神淡路大震災は、文化庁時代に経験をして、文化財レスキューを日本で最初に設定をして、実行してみました。その時の経験は社会的には人命救助あるいはライフラインの確保が第一。文化財も大きな被害を受けましたが優先順位は後の方でした。ライフラインの確保がある程度できた三〇日後に文化財レスキューを立ち上げ、活動を一〇〇日間やりました。文化財が、無残な形で、ブルドーザーの歯の下に、あるいは燃え、燃える中で放置されている。実に、情けない思いをしました。それから、さらに五年後、台湾の集集大地震がありました。台湾中部地域です。わたくしもそこにもレスキューに参りましたけども、阪神淡路とちよつと違います。村が一つ埋没をしたり、各所で壊滅的な被害状態がみられ、たとえば近代美術館ですが、林淵美術館など実に無残な状態だったです。博物

館の梁が折れてそこでは何人かの方が亡くなったわけですが、もうレスキューさえできない。そういう状態を見てきたわけです。そんな経験はぜひ免震をやりたいという思いにつながりました。阪神淡路大震災の直後にですね、上野の西洋美術館では免震装置を一部だけ設置しました。しかし、いまだに各地の美術館や博物館はまだまだこれからなんです。名古屋市博もまだそうです。そんなこともあつて最初から、ぜひとりかかってみたいと思つた危機管理の一つです。博物館の本体を、お菓子の最中の皮みたいな屋根を柱が支えているのが博物館の躯体構造です。そしてこの本体が、しっかりと、免震装置で守られているわけです。本体を架柱がだいたい二五〇本ほどありますが、それに三種類の、つまりすべり支柱、積層ゴム、ダンパーという免震装置をつけております。つまり安心安全のためです。見る人にとつても安心。文化財にとつても安心。これからの博物館、美術館では絶対的に必要な装置だと思つています。当時これを設置するのに財政関係ともずいぶん折衝しながら、やつたんですがなかなかうんと言つてもらえなかった。九州なんか地震はない。今は東海地区に予算を一生懸命出している。九州は地震はない。まあそ

う言われました当時。それでは地震のある証拠を持つて来いとまで言われまして、わたしは日本書紀なんか一生懸命読みましたよ。実は奈良時代に、筑紫の大地震というのがわかつております。それを持つて行つて、こういう風に書いてあります。奈良時代にすでにこんな大地震がありました。いま、そんなことがあつたことを思い起こします。結局こうして認めてもらうわけです。そんな経緯のなか、ほんとにうれしかったのは、また被災された方には不謹慎な言い方ですが、ちょうど開館する半年前の三月、西方沖地震が福岡でありました。警固断層が動いて、福岡市内は大変大きな被害。建物こそ倒れなかったんですが、マンションの中はぐちゃぐちゃでした。わたくしも被害者の一人ではあつたわけですが、実は、すぐ博物館どうなつてるかという頭があつたから、連絡をとつて、様子を聞いたらもう全くなんでもない。チェックもしたら〇・五ミリくらいのズレはありましたけども、全く大丈夫だった。そのころ展示の準備に入っていましたので危なかったわけですが、とにかく無事でほんとにうれしかったです。やつて良かったなという思いだったです。すよ。今わたくしは非常に自慢げに話してるつもりです。で、問題はで

すね、そういう場所を、実は市民にも見てもらえるようにしている。通常、こういう場所は縁の下の底の方にあつて、誰でも見る、というわけにはなかなかいかない。あるいは、こういうものがこういうふうになつてますよ、ということさえ知らしていない。だけど、そういうところをしっかりと市民の方にも見てもらう。見たいとおっしゃる方がいたら案内して見てもらう。そんな取組みもやっております。つまり安心安全、何が安心でどこが安全なのかということとを、しっかりと市民の人たちにも理解してもらえような在り方、そういうことは非常に大事だと。そんな風に思っております。勿論、展示室でも高さ七メートルくらいの石造展示物がございいますが、これらも安全を図るために念のために免震装置を備えたりしております。

それから博物館の大きな特色は、博物館科学の組織を持っているということです。これは博物館で生じる様々なリスクを、この博物館科学で処理していくということでもあります。手短にちよつと申し上げますと、いろいろな博物館で最もこれまで欠けていたもの、人文系の博物館は現在二五〇〇館ぐらいあると言われておりますが、サイエンスを組織化しているところは殆どありません。つ

まりそれは保存科学のことですが、これを最初からしっかりと設置しよう、ということと、館体制の中に組織的に設けました。そういう中で収蔵庫そのものについての管理についてもここで取り扱っており、非常に積極的に対応しています。つまり、先ほど来、建物がこういう環境にあり、安心安全の場であるということを話してきました。それでは文化財にとってさらに安心安全は何かというと、それは保存科学的な面からみた収蔵庫に対する考え方といえましょう。

当館の場合は全部で一一の庫が集合して収蔵庫が構成されております。面積にして、約五万平方メートルです。収蔵庫の内壁は調湿のために木張りとなっております。木張りの材料はヒノキ材が使っておりますが、ヒノキの断面でみると赤い部分（芯）があります。そこは使わない。周りの白い白太の部位を使うわけです。こういう環境の中で日本の文化財が千年、あるいは千二三百年、ずっと守られてきたという、それに学んだやり方です。そして、収蔵庫ができました。私は世界一の収蔵庫だと思つています。温度や湿度の管理も十分に対応できるなど、将に文化財を環境で守ることを主張できる収蔵庫になつていとおもいます。ということではいまここでも皆さんに自慢を

しておりますが、これからはそういう部分を市民にしっかりと見てもらえるようにしていこうと考えました。収蔵庫の厚い壁の一部をくりぬいて、窓（一・五メートル×二・五メートル位）を設けております。こんな収蔵庫日本にありません。収蔵庫は、家庭でいったら金庫に相当しますが、金庫に窓が開けてあつて、いつも札束がこんなに入つてますというような、そういう状態でもあるわけです。すくなくとも、私はそういうことをしたいと思つてきました。これは何かと言いますと、文化財がどういう形で保存されているか、あるいはどういう理屈で保存されているのか、それを是非みて理解して欲しい。この窓は当初いろいろな反対もありました。だけど、一方では、ああそうか、収蔵庫つてのはこうなっているんだ、ということの理解を深めるのに役立ち、関心をもつ多くの方たちが、おみえになります。結果として文化財はこうして保存されているということを深く理解していただいております。実はそうしたことをしっかりと調整していくことが保存科学の大事な取組みです。歴史や美術史や考古学の研究者ではできない仕事です。保存科学は博物館活動全体から見ると、非常に地味な部門かも知れません。しかしそういう背景がしつ

「市民共生の博物館を目指して—九州国立博物館—」

かりあって、初めて収蔵庫に穴をあけることができました。つまりそれによって生ずるリスクを保存科学がカバーしていく。そういう相関的な関係をもって、思い切ったこういうことができたわけです。これを、市民や子どもたちに見てもらおう。わたくしたちは、これをバックヤードツアーといっておりますが、展覧会と同じように、ここは人気があります。このことは実は何でもないので、取り組みですが、日本の博物館の百年以上の歴史からいったら、これまでは、考えられなかったことです。よ。しかし、これをただ単に覗き見主義で出すのではなくて、日本の文化財がどうやって保存されているかということ、こうしたことを通じてわかってもらうという取組みだと私は思っております。そして、私どもの博物館の場合は環境によって文化財を守る、博物館資料を守るということを、強く主張しております。文化財はもちろん人がしっかりと守るということですが、その人が守ることの基礎は、いい環境である。我々も、変な環境に入ると、風邪を引いたり、コンディション崩したりするのと同じように文化財もそうです。これまで保存されてきた環境が大きく変わるとすぐ、調子を崩す、壊れる、カビが生える、虫がつく、とい

う状態になります。居心地の良い環境によって、資料をしっかりと保存していこうと。市民の人たちと一緒にあって、そういう対応しようということをやっています。その一つがIPM (Integrated pest management) (総合的害虫管理) です。今まで文化財を保存していくのに、多くの博物館は、燻蒸をやってきました。特に、虫やカビを処理する。実は、博物館で一番見えない部分の大きな仕事なんです。近頃話題になった高松塚古墳のクロカビ問題も同様のことといえます。つまり、文化財の生物被害については重要な問題で博物館の学芸員の今までの大きな仕事だったといえます。つまり、燻蒸に臭化メチルを使うわけですがこれは文化財の材質を傷めないため非常に使いやすい薬剤の一つです。ところが、もう一九九七年の、モントリオール議定書締約国会議で、先進国は、地球環境にやさしく、つまり地球温暖化の要因となるそういう薬を使わない。臭化メチルは、地球環境にやさしくないから、先進国ではやめようということになりました。そのかわりに何をやるかという、その一つがIPMでいこうということであつたわけです。それは人の手によって、虫やカビを除去しようと。だから当館にお

見えになるといたるところに、ゴキブリホイホイが置いてあります。ハエトリモチみたいなのが置いてあります。靴の裏でべたべたして、虫を持ち込まない。あるいは、カビを持ち込まない。そうしたことを、ボランティアの人たちの協力の下にやる。実は日本の文化財の保存は、そういうことを、長年にわたってやってきております。曝涼行事といえます。日本の文化財の特徴の一つは伝世品です。特に、紙・木・漆という有機質の文化財は、世界で最も古いものが、最もたくさん今日まで伝わってきております。最も古いものといえばエジプト、ギリシャ、ローマや中国が、あるだろうと言うかもしれませんが、違います。それは出土品であり、伝世品ではありません。日本の有機質の伝世品は七世紀、八世紀以降のものが当時の状態を保って今日まで伝わっております。それはもう、世界で日本だけです。ヨーロッパ辺りだと主としてルネサンス期以降といっても過言ではないでしょう。そんな古い時代のモノがたたくさん伝わっているのは、それは何故かという、どこの家でも昔は曝涼ということをやりました。いわゆる虫干しをです。「目どろし、風どろし」といいますが、日本の文化財が今日まで保存されてきた要因の一つです。

東大寺だって法隆寺だってそうですし、一番の典型は正倉院でしょう。正倉院展がこの一〇月に行われるのは、まさに、その曝涼行事の名残ります。そうしたことをもう一度博物館でも見直していこうと。だから、人の手によって、薬剤を使わないで、地球環境にやさしい、そういう博物館活動のありかたを、例えば、文化財保存機能の一つとしてしっかり出していく。こういう取組みを、そしてボランティアの人たちや市民の支えによって行っている。それから、文化財の修理機能も保存科学の機能の中にもつてます。博物館の中に文化財の修理施設をもって、展開をしています。多分、日本で一番大きな絵の涅槃図（佐賀・高伝寺所蔵）など、こうした作品についての修理のお手伝いもやっています。伝統的な技術を駆使しながら、またそこに、現在の保存科学的な手法も加えながら、実施しております。また修理のための紙を、それも対象となる文化財構造と同じ紙を梳いて、それを用いるような努力もしております。対馬の宗家文書なんかでは、修理のための新しい技術の開発やその応用などをやっております。こうした個々の文化財の修理内容はともかく問題は、修理作業をしつかり市民にみってもらう。子どもたちにも見ってもらう。そうし

たことの大事さを感じております。昔は、修理とかは、秘密みたいなところがあつてなかなか見せてこなかった。でも、それらをわかりやすく子どもたちの学習にも取り入れていく。実際には修理の場合は、中に入っている直接修理を見るところはできませんけれども、窓を通して外から十分その仕組みをみる事ができるという対応をしております。また、文化財の科学的な調査もいろんな形でやっております。CTスキャン、三次元計測など最新の先進的な技術を使っているわけですが、全部廊下がガラス張りになって、中で何をやっているかが見えるようになっていっている。いわゆるバックヤードツアーとして子どもたちや大人の見学者が、ボランティアに案内されて行つて見る。こういう取組みをやっております。つまり保存科学などという一見難しそうに見えるところも市民に積極的に解放して博物館と市民の連携の試みをしているわけです。また、当館では大きなエントランスホールを有しておりますが、ここでは館の展覧会などに関連するような催し物を常にやっております。あるいは、「あじっば」という場は子ども向けの、あるいは教育向けの場として、その活動は各方面から注目されています。博物館というのは、

大人が子どもを連れてくる場所であつた時代もありますが、今、子どもが大人を連れてくるような場所。そうあつてほしい。子どもが親を連れてくる場所であつてほしい。そのそういう取組み方をこの「あじっば」で様々なワークショップを通じて發揮していきたいと思っています。ここではアジアの諸民族の生活体験、それから日本との違い。共通するようなどころとかをこういう場所ですっかり見てほしい。あるいは、ここでは外国からの研修生がワークショップに参加するということもあります。実は、この「あじっば」とよんでいるのは、アジアの原っぱをもじった意味ですが、ここは異文化を知る場でもあります。例えば日本にも影絵がありますが、例えば同じ影絵でも、東南アジア各地の影絵はこう違ふと、異文化の体験をいろいろな形で、やりながら、一方では文化の共通性や多様性を知るといふような、そのような目標を持って開いている人気の場です。ここはわかりやすい、楽しみやすい、そういう博物館を目指していることは再三述べてきましたが、そんな中で絵本もたくさん出しています。これまでに一〇冊くらい出してありますが、売れ行きいいか悪いかは別として。ほんとに楽しんで、また孫に買って帰ろうという

「市民共生の博物館を目指して—九州国立博物館—」

人もいる。それからこの絵本について江戸時代の朱印船貿易の絵巻物、それはベトナムとの交貿を描いたものですが、これを子ども向けにわかりやすい絵本にする。でもせっかく絵本にしたから、ベトナム語にも訳しベトナムに送る。そして、ベトナムからの反応がある。嬉しい、面白い、よかったという反応でベトナムと新しい交流ができていく。また交流の輪もひろがる。目指すところは市民が主導になり、やっていく。当館のスタッフももちろんアイデアを出して対応して、それに市民の人たちが加わって、輪を広げる。そんなイメージをもっています。今、例えば、タイとの間で一月にタイの国立博物館との間で展覧会をやります。それに日本からのボランティアや市民の人たちも加わって、タイに行くと、小さな日本フェアをやる。もちろんタイの人たちと一緒に。しかもそれで終わるのではなくて、このタイでの展覧会を帰国展として行い、その展覧会にタイの市民の人たちも加わってもらって、ボランティアや市民の人たちと一緒に新しい交流を拡げる。そういう展開を一つの手掛かりに新しい交流をしていくということを大事にしたいと思っています。博物館と学校は本日のテーマでもあります。地域の学校（大学、短大）

とのつながりを少しだけ触れましよう。地元にある短期大学だっと思えますが、音楽課程の学生さんたちが月二回の金曜日にカフェコンサートを行う。これも開館間もなくから四年から五年くらい続いています。最初ははずかしそうに、おどおどしていた。もう本当に、頭たれつばなしの演奏会。今はどうですか、堂々たる、もう素晴らしい演奏をやっております。そういうことで市民ともつながり、学校としても新しい展開が期待できるわけです。各大学が博物館を使って、また博物館が大学を使って、いろんなものをやったりしています。キャンパスメンバーとして各大学のメンバー参加校が博物館に対して何をしていくか、というような取組みは今後に期待されるものがあるような気がします。また、市の、町の商店街などの応援があります。年に四回の特別展、これまでにもう二一回ほどやっておりますがその都度街路にバナー（旗）を掲げたりしての応援があります。例のこの間のサッカーの南アフリカ大会でもサムライブルーで応援がありました。町ぐるみで、博物館も応援し、遠く離れた南アフリカにエールを送る。これは四年前に日比野克彦さんが、そういう取組み方を町の人たちと一緒にしてすごい盛り上がり、後遺症が

絶えなかった。また南アフリカ大会を機に華やかな展開ができました。まあ、こういう町ぐるみという一例をちょっとだけ紹介しました。あるいは、てくてくぶらり旅という名前がついておりますが、市民の中の、あるいはボランティアの方たちが同好会にちかいんですが、歩く会という：積極的に参加し、博物館を一つの拠点として楽しむような取組み方をしている。これまで度々取り上げてきたボランティアは二年間を一つの区切りとしています。今三五〇名くらいですが、応募はものすごく多い数です。阪神淡路大震災以来ボランティアのいろんなありかたが社会的に議論されてきたのですが、たぶん、普通のサラリーマンとして、生活を送ったことを想定するとサラリーマンとしての活動時間は約八万時間になります。就職をして、そして定年にむかう。六〇定年かあるいは六五定年の余生。八〇歳といくつ、あるいはもうちょっと時間がある。働いていた時よりも余暇の時間がある。それが約八万時間あるんです。だから人生後半の時間を、ボランティアに有効に使おう。博物館としてボランティアの人たちと何を一緒にやっていくのか、あるいは博物館として何をやってもらうのか。まあその二つの取組みの中で本当に市民参

加を博物館よりもボランティアの人を中心に形成しています。普通の市民のかたたちもいろいろな形で支えているわけです。障害をもつ人に対する対応、これも当たり前みたいに考えております。

そんなか、ボランティアの人たちからの提案には重要ないくつかのことがあります。あの阿修羅展は、七四万人の人が訪れもうほんとにすごい混雑になっていました。大勢の方がおみえになるあの混雑の中で、体の不自由な方に見せるのは本当にかわいそうじゃないかと。ボランティアの人達の提案で、障害を持つ方たちにゆつくりと見てもらう日を一日設けようじゃないかと。ゆつくりそういう方たちに見てもらおう、これらが実施できたのはボランティアの方たちの力や手があつたからです。そういう目線を常にわたくしたちも大事にしていきたい、我々がこういうことをお願いするということだけではなくて、ボランティアの人たちの目線も、大事にしていこう。こういうところから受ける我々へのひとつの教訓、つまり一緒に行動していく大切さを知るわけです。

当館では博物館のコンセプトである交流は主要なテーマで、それを実行するところが文化交流展示室となっています。このいわゆる常設展示

ですが、三六五日やっている展示室をもっとも大事な場所としております。ここには約八〇〇点の展示物があります。でも、常に新鮮さを出していくためにも、その八〇〇点を原則一年で全部入れ替えようということです。八〇〇点を一年で入れ替えるのは単純にできるだろうと思いかもしませんが、月に一〇〇点から五〇点の入れ替えをしなければならぬ。これは大変な作業です。でも、それをしっかりとやっていく。そういう常設展の対応の仕方をしております。いうまでもなく、これは常に新鮮さを市民に提示していくという姿勢みたいなものでもあります。

展示に関連して手に触れ、見て、嗅いでみるなど五感で触れる感ずる展示にも取組んでおります。いわゆるハンズオンの関連といえましょう。それも大人が見てもおかしくはない、子どもたちにもしっかりとということに注意しております。非常に目線を低くしたりですね。先にも触れましたが、障害をもつ人達に対するやさしさは博物館として大きな努力を払う決意をしております。まだまだ状況に応じた対応に終始しているのが現実ですが一歩ずつでも進めていきたいと思います。例えば、車椅子で見やすい。土器が展示してありますが、展示台の隅がわざわざカット



「市民共生の博物館を目指して—九州国立博物館—」

してある。決しておしゃれでカッとしてあるわけじゃない。車椅子で座った時に隅が邪魔にならない。たったこれだけの配慮で車椅子の人たちにとつては喜んで頂ける。そういうことの大事さを、認識し続けたいと思います。

それから、ここで紹介しておきたいことがあります。開館して半年後ぐらいのことですがインフォメーションからの連絡で、犬を連れた人が、お見えになっているんですが、入れているのでしょうか、と連絡があったんです。すぐ盲導犬だと思いました。お断りしてずっとついて行き、一緒にいて、様子を拝見させて頂きました。そしたら、六〇年配の夫婦で、奥さんがほとんど目が見えない。わずかに光を感じる程度。ご主人が、実に丁寧に案内されていました。ちょっと申し遅れましたが、当館というわけか、早くから白い杖をついた方たちがすごく多い。博物館でそんなことを考えられますか。博物館は一般論ですが大体モノを見に来るところです。そういう中で、失礼ですけども、目が不自由と思われる白い杖をついた方たちの来客が非常に多い。一体これ何かなというのはずっと考えてきました。そんなある日、まあこういうことに遭遇したわけですから。一時間ほど本当に熱心にご覧に

なりました。失礼ですが、なぜお見えになったんですか、という風に思いました。聞いてみました。そうしたら、こう仰いました。健常者と同じ空気になんたい。同じ風に当たりたい。たつたそれだけです。わたくしは、我々のやっていると、本当にすべての人に楽しんでもらえることをやっているかどうかを、そのときつくづくできてくるかどうかを、感じました。つまり、その方は、いわば五感に触れながら見たいということだと思っています。わたし達はあえてすべての人が楽しめるために、というタイトルをつけておりますが、本当に大事な経験をさせていただきたと感じております。後に、福祉関係の方の会合に積極的に出さしてもらって、いろいろ伺った中で、まあ館長そういうことをそんなに心配しなくていい。いま目の不自由な方は多くは、少なくとも二〇代ぐらいまではみんな目が本当によく見えた方で、後天的な方がいま非常に多い、と聞きました。だから、そのことを理解して展示をやりなさいといわれた。つまり、色も、形もわかる。一方では、わたくしたちはこれまでそういう勉強を本当にやっていたという思いをしたわけです。五感で楽しむためには何をやるか。それに市民の人たちが一緒になってそう

いうことをどう作っていくか。いまそういうことを、みんなが努力をしている最中だと思います。

最後に博物館に対する思いを話しておきたいと思っています。平成一六年三月に建物が竣工したときに定礎をくみました。そのときの内閣総理大臣が、小泉純一郎です。そして、文化庁長官が河合隼人。福岡県知事が麻生優。どの人に書いてもらったかということですが。わたくしはこの字を、地元の中学二年生にお願いしました。地元の教育委員会にお願いをして、募集をして、採用したわけですが。実はその心はなにかというところ、いつまでも子どもたちのために、それから、市民とともにある博物館を作っていく、そういう目指すところを定礎の二文字に託し、それをわたくしたちが常に見る場所に置いておこう。そういう思いで設定した定礎の二文字です。

『市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして』



二〇一〇年一月二七日(土)
パネリスト…三輪嘉六氏・水谷孝太郎氏・坂本喜樹氏・山田明氏
司会…阪井芳貴

阪井教授…では自己紹介を兼ねてさきほどの三輪先生のお話を伺ってお感じになったこと、それからそれぞれの方の立場で今日の博物館の問題、あるいは地域の連携についていろいろ

るな取り組みをお考えになっていると思いますが、それぞれのお立場から少しずつお話を順番に伺いたいと思います。そのあとにみなさんにそれを受けてまたご意見を頂ければと思います。では水谷さんよろしくお願いします。

水谷副館長…名古屋市博物館副館長の水谷と申します。自己紹介ということですが、私は博物館が開館した昭和五二年の四月に博物館の考古学の学芸員として採用されました。三輪先生のお話を、開館の頃からの歴史を思い出しながら伺っていました。我慢になるかどうかわかりませんが、私は名古屋市の学芸員の中で一番多く転勤しています。博物館の後、文



化課というところで、埋蔵文化財の調査をし、その後また博物館に戻って広報普及活動に関わりました。そして、中村公園の中にある名古屋市秀吉清正記念館で、そこは職員二名という大変小さな博物館ですが、勤務しました。それから、名古屋市美術館にも二年いまして、今、おそらく終点と思いますが、博物館の副館長をしております。博物館の歴史といいますが流れの中で、多少空白のときはありましたが、開館以来のことを思い出しますと、開館の頃、「博物館前ハッスル商店街」と特に商店街の名前まで変えていただいたりして、一緒にやってきたという思い出があります。三輪先生のお話を伺っていた中で印象に残りましたのは、「今は当然ですが・・・」とおっしゃっておられましたが、館の目標とコンセプトを非常に明確にしておられることです。博物館が何をしようとしているのか、どういう情報を出すのかということについて明確にしているだけでなく、いつもそれを標榜すると言っておられます。それを、内に向かっても言い続ける。外に向かっても言い続ける。そうすることで、組織として常にチェックをしてゆく。また、それを新たに再生産してゆくことをしていращやるのだなあと受け止めました。それは、本

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

当に見習うべきことであって、ともすれば、当館は開館以来三〇年以上経ちますけれど、そういったことを忘れがちあるいは見失いがちになるのではと自戒の念を込めまして思った次第です。それから、今のお話の中で、「みんなで作った博物館」というお話がありました。それは、おそらくみんなのためのみんなで運営する博物館という意味かと思います。そういったことを伺って思ったのは、やはり目線を増やすということとは、大変重要なんだなということです。つまり、博物館の中の人間だけで考える、判断していくというのではなくて、やっぱりいろんな人の立場を理解し、いろんな人の意見があるいは見方を取り入れながら、その中で当然できること出来ないことがあると思うんですけど、常にそういうことに目と耳を向けながら考えていくことが大切であると思います。名古屋市博物館について具体的に起こったことは、目線を増やすという観点から考えますと、大学とか商店街あるいは近所の住民の人たちと関わりを持ち、話し合いを重ねながらいろいろな人の意見を聞いてゆくということだと思います。それを継続してゆくということです。そうじゃないのかなと思います。そういったことについては、この間、できるだけ努めてきた

この思いはありますが、まだまだこれからもっと頑張っていかななくてはという風に感じました。後、今の博物館の状況ですけれども、行財政改革の中で、博物館の場合は人と予算についてはだんだん絞られていくことが一般的な流れです。我々もその渦中にいますが、そんな時には、それをマイナスの要素と受け止めるのではなく、逆境に委縮することなく、また、負のスパイラルに陥るのではなく、このピンチを変わってゆくためのチャンスという風に考えた方がよいのではないかと思っています。今改めて博物館がなぜ必要なのか、何をするのか、そういった存在の意義や価値が問われているという気がしています。今まで博物館の中にいて、これは当然だとか当たり前のことだと思っていたことが、今は通用しない時代になってきているということも感じています。やはりこれからは、三輪先生がおっしゃられた「みんなのための博物館」を目指す必要を切実に感じた次第です。

坂本青年部長…続きまして、私は瑞穂通商店街、地元の商店街なのですが、その商店街で青年部長を一四年前から努めており、今は壮年になりました坂本と申します。名古屋市内には商店街が一〇五ほどあります。

我が瑞穂通商店街は他の商店街の幹部の方から「瑞穂通さんっていいねえ、地下鉄の駅は近いし、博物館や名市大があつて一緒にイベントもたくさんやっているし・・・」と云われています。確かに色々なイベントを打つてはいますが、現実には閉店する店もばちばち出てきています。組合員数は最盛期には五〇数店あったのですが、今年は四〇店になりまして減少しております。そのような商店街が全国的にある中で大須近辺は元氣ですが、最盛期に比べるとちよつと衰退しかけているかな、という状況であります。本題に戻りますが、博物館と市立大学がある街ということで、この地区は瑞穂区の汐路学区になるのですが、博物館、名市大の他にも図書館もあり、大学や高校もたくさんありまして、市内有数の文教地区であり、居住希望者が多い街なのです。また、地下鉄や市バスの交通の便も良く、分譲マンション



ンも多くて、ちょうど名市大の山の畑の真ん前にも分譲マンションがあります。完成前に完売したそうです。そのくらい人気がある居住エリアなんです。先ほど三輪先生がタクシーに乗られて九博に行って下さい、と言われて運転手に分からないと言われたとの事です。例えば名鉄やJRの最寄り駅の金山からタクシーに乗ってこの瑞穂通付近にくる場合にタクシーの運転手さんにどう行き先を告げるかと言いますと、地下鉄の最寄り駅桜山とは皆さんあまり言わないんですよ。「市大病院へ行って下さい」もう少し南の人ですと、「博物館へ行って下さい」と言う方がほとんどです。何故か桜山とは言わないんです。桜山は昭和区の名地名だからかも知れません。この地域に住んでいる人にとっては市大病院、博物館というのはランドマークなんです。桜山というのはあくまでも駅名であってランドマークを告げないとタクシーの運転手には伝わりにくいのです。私も金山や錦三からタクシーに乗る時には市大病院あるいは博物館と言いますよ。私の経験談で冗談じゃなくて本当にあった話ですが、まだ私が若い頃、ずいぶん前の事です。錦三から夜にタクシーに乗って運転手さんに「市大病院まで」と言ったんですよ。そして、いつし

か寝てしまつて、着いたら本当に市大病院の玄関の車寄せに着いていました。笑。救急車でなくて良かったのですが。そんなこともありましたが、今も行先は「桜山」とは言わないで「市大病院」か「博物館」と言います。この地域のシンボルとして自慢したい施設だと思っています。先ほど水谷副館長が言われたように名古屋市博物館は昭和五三年一〇月に開館しました。私はまだ高校二年生の時でした。三三年経ったわけですが、今の博物館の敷地、前に何があつたかご存知の方いますか。実は市大病院があつたのです。商店街との繋がりとしましては翌年から博物館の駐車場をお借りして地元千秋葉神社という神社があるので、その氏子さんたちがラジオ体操や盆踊り大会を始めました。その当時はいわゆる夜店というものが一軒もなく子供達の思い出作りのために何か商店街で出来る事はないかと考えていたそうです。それから少し時を経るのですが、昭和六〇年頃になりますね、西暦では一九八五年頃になりますが、盆踊り大会に協賛するという形で商店街の有志が「かき氷」と「ラムネ」の夜店を始めたのを博物館茶屋の嚆矢とするといいます。なぜ、伝聞形なのかと申しますと、その当時私は名古屋を離れ

ていまして、東京や大阪、神戸に住んでいましたので、詳しくは知らないのですが、当時夜店をやっていた有志の方から聞いた話からです。先ほど一四年前から青年部長を務めていると申し上げましたが、その四年前の平成四年に正式に「博物館茶屋」と命名しました。当初から長らく博物館の前の歩道上で夜店を営業していたのですが、平成一八年から徐々に博物館の敷地に侵入をし始めまして、じわじわと侵食と言いますか・・・言葉は悪いのですが、侵入して行つたんですね。じわじわと歩道上から敷地内に入らせていただきました。敷地内といいますのは、プロムナードといまして、商店街のアーケードから博物館の正面玄関まで屋根付の通路があるのですが、その下に夜店の一部を並べ出したのが平成一八年なんです。翌年には敷地内の夜店も次第に増え、平成二〇年にはほぼ全部の夜店が侵入致しました。博物館にとつてはいよいよ来たなという感じでしょうか・・・。当時の総務課長さんがとても理解がある方だったのだと感謝しております。こんなところが商店街と博物館の関係です。また、名市大との関係も深く、わたしども商売をやっておりますので、学生さんにお買い物していただきます。特にファストフード店、コンビニ

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」



山田教授…名古屋市立大学の人間文化研究科、人文社会学部の山田と申します。専門に研究しているのは地域政策とか地方財政の分野ですが、まちづくりにも関心があります。まちづくりの調査研究を共同で進めるとともに、学部の実地調査実習という講義を担当しています。

二エンスストア、下宿を決めるときに不動産屋などはよく利用していたいています。先ほどの博物館茶屋という夏祭りにも名古屋市大の医学部、薬学部、看護学部の学生さんが瑞穂保健所と共同で健康相談コーナーというのを設けてお年寄りを中心に大変にぎわっていました。以上が商店街と博物館、名古屋市大との繋がりで、当初はそれほど無く、ただ点と点で物理的に近いというだけでしたが、徐々に連携と言いますか、共同で色々なことをやってきています。以上です。

商店街の青年部長さんからお話がありました。一〇年くらい前に瑞穂通り商店街、博物館前商店街を調査しました。それが縁で商店街の人とも知り合いになり、お餅を買いに行ったりしています。大学近くの滝子商店街も調査しましたが、最近寂れてしまい残念に思っています。ここは旧制第八高等学校があったところで、かつては大学とのつながりもありました。数年前に学生と滝子商店街を調査して、「商店街をどうしようてんがい」という調査報告書を作成したこともあります。桜山の地下鉄からの学生の出入りが多くなってきた、桜山あるいは博物館前商店街との連携が強まってきたように感じています。

最近「観光まちづくり」に関心を持ちまして、この教室で金曜日にJR東海の須田寛相談役をお迎えして「名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光」という総合科目を行っています。また、今年度の社会調査実習も「名古屋の歴史まちづくりと観光」というテーマで調査を進めています。このような活動が名古屋市から認められたかどうかわかりませんが、現在「名古屋市観光戦略研究会」座長を務めています。先日、このような「名古屋市観光戦略研究会報告書」という冊子できました。

今まで名古屋というのは、観光にあまり目が向けられてきませんでした。もののづくりが盛んで、別に観光を意識しなくても、この地域は十分に活性化していました。しかし、もののづくりだけではダメというようになってきました。ここ二、三年の話ですが、名古屋の歴史観光と都市観光という二つのキーワードで、長期的な観光戦略ビジョンが発表されるはず。いま名古屋市をめぐっているいろと動きがありますので、遅れがちになっています。

今日も「観光まちづくり」という視点から、私なりに考えていることをお話したいと思っています。先ほどの三輪館長さんのご講演から多くの示唆を得ました。博物館のホームページや館長さんの論文などを読んでいますが、今日の話を含めて、本当に勉強になりました。たんに博物館だけでなく、研究の面でも参考になることが多くありました。私は公共事業を研究していますが、ハコモノ批判などもやってきました。今日の話はハコモノのあり方についても興味深いものがありました。ハードの面でも、博物館は耐震などきめ細かな手法で建設されています。ソフトの面でも、博物館が本当に有効に利用されていることが、よく理解でき

ました。最初だけでなく、その後も館長さんのリーダーシップで市民参加で運営されているようで、今日のタイトル「市民共生の博物館を目指して」にぴったりの感じでした。市民共生という言葉、共に生きるという言葉ですが、型どおりのアリバイづくりの共生ではなく、本当に生きた共生が実践されていることが伝わってきました。五年間で八〇〇万人の入場者はすごいです。二〇〇五年の開館ですが、愛知県ではこの年に万博が開催され二二〇〇万人余の入場者で「成功物語」が語られています。博物館で八〇〇万人という方が驚きです。どうして、こんなに多くの入場者を集められたかが、私なりに納得できました。

いろいろと話したいことがあります。いろいろ話したいことがありますが、名古屋市博物館について観光の視点から話します。これまで名古屋市博物館を観光資源として考えてきませんでした。本来、博物館というものは、先ほど館長さんが言われたように文化財を保存し、それを将来につないでいく場所だと思っています。そういう本来の役割とともに、多くの人に来てもらい楽しんでもらうために、観光的な要素なり、集客施設としての博物館という要素を取り入れていく必要があるんじゃないかと。

いま名古屋の「歴史観光」が注目

を集めています。有名な名古屋城や熱田神宮などとともに、こういう博物館も観光資源として重視する必要があります。博物館をまちづくりや商店街と有機的に結びつけ、連携を深めることが大切なことがよくわかりました。それと博物館が多目的に利用されていること、博物館を固定したイメージでとらえないことも示唆的でした。カフェなどでのコンサートなど、発想が柔軟であることも理解できました。

もう一つ、最近よく話題となる「見える化」という点でも興味深いものがありました。保存とか耐震など、普通は見せないところまで見えるようにする、それにより博物館を身近に感じることなどです。共生を具体化するために、自分たちの博物館であるという意識を高める活動なども参考になります。

館長さんのお話で、博物館のあり方だけではなく、わたしの研究分野である公共事業、施設の建設・運営についても多くの示唆を得ることができて勉強になりました。

阪井教授…どうもありがとうございます。では、三輪先生このお三方のコメントに何かありましたら。

三輪館長…ありがとうございます。

さつきですね、山田先生がちよっと触れられた、博物館と観光という問題、私どももつい先々週、国際フォーラムを行いました。つまり、タイとアメリカ、中国、韓国からお呼びして、博物館は観光の対象になりうるかどうかという課題です。まああのー、観光についてはもう言うまでも無い話ですが、中国の古典に従えば、「国の光を観る」ということだと思っています。まさにその国の、あるいはその地域のアイデンティティをしっかりとみんなに見てもらって理解してもらって、楽しんでもらって、覚えてもらおうと、そういう取り組みをやっているのが一般論ですが博物館だと思っています。

このことと関連しますが、今日実は別に質問をいただいております、「博物館がある意義とは何だと思えますか」という質問を会場の方の中から、いただいております。まあそれへの答えでもありますが、博物館は





シンポジウム

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

基本的には国や地域、例えば名古屋市の博物館だったら名古屋の正にアイデンティティを示していく場ですよ。文化財や各種の資料を介して何物にも侵されないというアイデンティティをしつかり表現していく場所。国立博物館は多くの場合は、国の持つて、国のアイデンティティをしつかり表現していく、そういうわが街があつてわが地域があつてそこをベースに次の文化が創造されていく、また基礎になる博物館は、そういう場所だと思います。公式的には言えばそういうことですが、実はそういう固い言い方だけで来てしまったから市民は、また多くの人たちは博物館っていうのは難しい場所だね、あるいは、勉強してからでないと分からないとこだね、そんな話だったのではないのでしょうか。たしかに、私も名古屋で三年間高校時代を過ごしておりますけども、そういう若い頃から、文化財の世界に入つた頃から博物館の関係の人たちがよく言つたのは、博物館っていうのは来たい人だけが来たらいいんだ、見たい人だけが見たらいい、見てわからない奴が来ることないよって、先輩からずい分ひどいことを言われた時代があります。何となく分かる部分はあるんですけど、そうではなくて今はもう見たくない人も来てくださ

い、まず楽しんでください、というのがスタンスだと思います。で、先ほどの観光もまさにそうですね、観光でくる多くの方たちが本当に熱心に取り組んで来ているかて言うところ、まあ必ずしもそうではない面もあるでしょう。ことによると、便所が整備できているからそういう利便性も含めてですね、あるいは駐車場が広いからちよいどいいとか、理由があると思うんですが、本質的には、この頃やつぱり博物館にも観光客がどんどん増えることを期待されているようです。しかし、観光面で考えるとインフラの整備がなされていないように思います。個々の来館はともかく博物館に観光客が大勢来ても駐車場が十分満足いくだけ整備されていない、車でのアクセスでも同様です。もともと博物館、観光ということで作られていないですから、そういうアクセスが整備されていないですよ。私は博物館もこれから十分観光の材料になる、あるいは地域おこしの本当の拠点になっていく。そのように思っております。先ほどの話の中で少しだけ触れさせてもらったんですが博物館はその地域の文化的景観になるというそういう思いです。それを、坂本さんはランドマークと表現されました。やつぱり、私達はまだ五年という経験しかありま

せん。この五年間をはじめの一步という言い方をしています。大きな将来の目的に向けたはじめの一步がやつとこの五年間でとにかく終わつたんだと思つています。つまり、将来に向けてのそういうランドマークづくり、地域の文化的景観になっていく、まだその過程だと思つています。水谷さんがちよつとおっしゃつていましたように、博物館と商店街と大学というまあ、三つのテーマの中で言えば、例えば大学のシンポジウムだつてもつと大学じゃなくなつたて内容によっては博物館でやつたていい、あるいは、博物館の展示室の中でちよつとしたパーティーがあつたていいじゃないかと私は思います。学芸の人、嫌がるかもしれないけれども、でも、差し障りのない場所には必ずありますから、博物館が広く開かれた場として、そういう場をどう作っていくか重要なことだと思います。一昨年私どもの博物館では、麻生内閣の時に日中韓首脳会談を博物館でやりました。首脳会談としては世界で初めてです。韓国の李明博大統領もすごく喜んでいて、中国の温家宝首相も大変感動していただきました。麻生さんはあんまり感動しなかった。ただし、その日は博物館の関係者は本当に隅っこに追いやられて、警備、メディア、マスコミ、外交事



どそれはもうそれで、随分喜んでいただいた。そういう取り組み方が博物館っていうのはできるところですよ。だって素材はいっぱいあるんですから。ただ一番問題点はそうことによって生ずるリスクがあります。マイナス面も必ずある。例えば保存上のリスクだとかいくつかあります。それをどう処理していくか。私どもの場合はその対応が保存科学だと思うんです。つまり、修理をやったり、文化財の保存についての健康診断をしたりという、そういう保存科学的な対応。だから、あえて申し上げれば、そんな体制づくりの中で解決されることのいくつかがあるのではないかと考えますが。水谷さんところはそういうことに入られるとすれば事務的な姿勢も大変でしょうけど、保存科学の体制を例えば組織として迎える、そんなことも場合によっては大事なかと、考えましたけど。お三方の話のしつかりした解答にはなっていないんですけど、ちょっと印象だけ申し上げました。

阪井教授…どうもありがとうございます。話題の流れはまずは博物館がどうあるべきか、どういうことを目指すのかということに移りかけていると思うんですけど。水谷さん、その辺、今の話ちよつとスケールが

務に場を提供するわけですが。でも日中韓首脳会談は特別展の会場であったわけで、それは各国の博物館にも大きな刺激を与えた。あの、その話をベトナムの共産党書記の方がその後おみえになってお話ししたら、「素晴らしい。ベトナムの国立博物館では是非やってみたい」、そうおっしゃってました。つまり、いろいろな取り組み方は場と工夫によって機能していくのではないか。つまり博物館というのはこうだという定形化を古典的に考え過ぎてしまっているのではないかと思うことがあります。ちよつと話が変わりますが、例えば歯医者さんの学会の打ち上げのパーティーをエントランスホールを使ってやりました。これは博多の街のコンベンションセンターか何かの国際会議場で学会をやるわけですが、その後、当館のエントランスホールを使って、慰労会みたいなパーティーだったんですけど、まあ一応正式な晩餐会をやっています。あの外国からの人も居るわけで場所の提供はもちろんです。じゃあせっかく歯医者さんの、お医者さんの集まりだから、ケース三つぐらい使って入れ歯や医

関するちよつとした展覧会やろうってことになって、江戸時代からずつと義歯なんて結構ありまして。で、ほんのちよつとしたコーナーですけ

大きいので、名古屋市博でどうなるかということは難しいかと思いますが、何か。

水谷副館長…はい、今のお話で博物館が何のためにあるのかということについては、基本的に三輪先生のおっしゃられた通りだと思いますけれども、名古屋市博物館に即して申し上げるとすると、やはり、その名古屋という土地、このあたりに住んでいる人たちが自分の住んでいる所がどういう土地なのか、ここにどんな価値があるのか、これまで担ってきた、あるいは作り上げてきた歴史とか文化をこれからどう生かしてゆくのかということを考える素材を提供してゆくことだと思います。できれば、一緒になってそれを考える機会を作っていく。これは街づくりとも絡みますし、結局は、その歴史から何を学ぶのか歴史学は何ができるのかということとも繋がると思うのですけれど、ただ単に過去のことを調べるだけではなくて、その成果を次にどう生かしてゆくのかということが大切だと思います。それを実践するために博物館がどう行動するのかが問われているのかなと。先ほどモノを保存することが大切というお話がありましたけれど、何のために残すのが当然問われ、そこから活用



シンポジウム

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

という発想が生まれます。名古屋市博物館としては、やはり基本的に名古屋という街のこれからを考える情報を提供し、発信するという役割を担うべきだと考えます。今、連携について考えているわけですけれど、できれば、今日のような機会を通じて博物館だけではなくいろいろな立場の人が集まって話し合い考えてゆくことが大切なんじゃないかと思ったりもしました。もうひとつは、先ほどの三輪先生のお話の中で、博物館を多目的に多面的に活用するということが言われましたが、確かにおっしゃる通りだと思います。博物館人が自分たちでもすれば博物館というものはこういうものなのか、こうあるべきだという固定的な考えで自己規制してしまう傾向は、確かにあります。例えば、モノを大切に保存し、伝えてゆくことについて目を奪われてしまつて、もつといろいろな可能性があるんじゃないかということに目が向かなかつたことはあるかなと思います。このことについては、この間、商店街や市立大学の皆さんとお話をする中で、「あ、そうか。」と気付くこともありました。例えば阪井先生がお話されました「ナイトミュージアム」についても、以前なら「博物館を夜開くなんてとんでもない。ましてや不十分な明かりでみ

せるなんて。」ととても考えられない企画でした。しかし、事務系の職員や学生さんたちと一緒になつてやつてゆくうちに、これまで気づかなかつたことを教えられたり、夜間に開館することの意味、限られた照明で何を伝えるかということも一緒になつて考えることによって、一般の人の発想に触れその要望やニーズを感じ取れることもありました。観光のことについては、先ほどお名前が挙がりました須田先生が産業観光という新しい考えを提唱され、その活動が広がり、定着もしたと思います。産業観光ということで言うと、これまでの博物館は、所蔵品の中に産業遺産とか資料はどういうものがあるか、それをどう展示するかという範囲で考えてきました。しかし、これからはもう少し発想を広げて、博物館を単独の事業体としてとらえるのではなく、周辺の地域と連携・連動する存在と考える必要を感じます。地域をどうアピールしてゆくか、其処に人をどうやって集めるか……。遠方や海外からのお客さんに目を向けるばかりでなくて、もつと身近な人たちがちよつと今日は桜山のあたりに行つてみようかなと思うような地域の魅力をどういう風に作つてゆくのかが、観光ということとは外れるかもしれませんが、これからの課

題と想っています。博物館の弱点としてよく言われるのが、地域も含めて人を引きつける魅力が足りないということですが、まだまだ人が来てくれるための魅力に欠けるということなんです。このことも商店街や大学と一緒になつて考えることによって、地域の魅力を発信できるのではないかと考えています。まあ、病院に行くのは、ご遠慮したいと言われるかもしれませんが、アンケートを見ていてなるほどと思ったのですが、大学病院が近くにあるということは、そこに入院している方が、大勢おられるんですね。その方たちは、病気ですから自由に歩くことは出来ないでしょうが、時間は十分あります。こういった方たちが、大学病院と博物館が話し合つて、博物館見学する機会を作ることには出来ないだろうかと思つたりします。いろんな声を聴くことによって、様々な可能性が見えてくると、私は感じています。

阪井教授…ありがとうございます。そのいろんな見方という点では地域の方々からの視点がとても重要だと思うのですが、今までその商店街の方々と博物館とは「なつまつり」だけにしかほとんど機会がないのかもしれないけども、今日の三輪さんのお話をうかがつて今後そのな



か可能性みたいなものは感じられませんでした。すでしょうか。

坂本青年部長…今、阪井先生が言われた「なつまつり」ですが、私も主にそれについて話したのですが実はもっと博物館とはかかわっておりまして、駐車場だけでなく建物の中にも侵入しております。「卑弥呼ファミリーコンサート」と銘打った催し物で、商店街の有志と地域のお客さん、名市大の学生さんらで組織する男女別の素人集団のコーラス部があります。あと地元の小中学校のコーラス部や吹奏楽部も参加したコンサートを博物館の講堂をお借りして二回開催しました。先ほど三輪先生が九博でエントランスホールで催し物をやったと言われましたが、私たちも博物館のエントランスホールで卑弥呼ファミリーコンサートのクリスマスパーティーを昨年の一二月に開催しました。次に六〇年にたった一回しか開催されない「お鋏まつり」というお祭りが東海地方に伝わっているのをご存知でしょうか。女装したり動物の格好をしたりした仮装行列なんです。五穀豊穡を感謝して江戸時代から続くお祭りで、作り物を担いだり引つ張ったりして町中を練り歩くものです。今回は商店街前の幹線道路を一車線規制して練り歩きました。

た。作り物の製作は博物館の地下をお借りしました。また、博物館の催事とタイアップした催し物として、「街角ミュージアム」というものを行いました。博物館では昔の名古屋の街角を描いた絵葉書の展覧会をやっている、商店街のいくつかの店舗をスタンブラリー形式で回ってもらいました。各商店には昔の写真や時計とかアイロンとか・・・とにかく各商店に伝わる古い物を展示しました。博物館の収蔵品を持ち出した訳ではありません。商店街を回遊して、各商店でスタンプを押してもらって博物館へ戻ると展示している古い絵葉書のレプリカを二枚もらえるのです。

これは結構盛況でしてメディアに取り上げて戴きました。博物館へのアクセスは非常に良くて地下鉄桜山駅四番出入り口から歩いて三分、走れば一分程度で到達します。しかし、逆に考えれば商店街を歩いてもらえない事になりますので、もう一度博物館から出でいただいて商店街を回遊してもらい、運が良ければ商品を買ってもらえる・・・という魂胆がこちらサイドにはあったのですが・・・この様にとにかく博物館と商店街が一体となった行事もやっております。先ほど山田先生が博物館を観光施設と捉えたらと言われましたが、私も以前から同じことを思っていました。

商店街は観光地である博物館の門前町という感覚でいこうという事だと思えます。その点、九博さんは太宰府天満宮という大観光地があるのでとても羨ましいです。観光地的な視線でこの博物館地区、名市大を含めて瑞穂区北部に多くの方が来ていただければと期待しています。商店街が主体になるのか博物館が主体になるのか分かりませんが、今流行の独自のゆるキャラを作って、四番出入口から博物館へ至る寺社で言ったら表参道にあたる所に土産物屋を出店ということを考えていても面白いと思います。以上です。

阪井教授…ありがとうございます。今うかがうとけっこう商店街さんは博物館と連携しながらいろいろなことでやられてきたんだなというのはわかったのですが、その点我々大学人、学生も教員もなかなかそこに入り込めていなかったな、そういうのがあったんだという思いをもつ学生も多いと思いますけど、山田先生、その辺大学側の取り組みといいますか、地域との連携を密にする何かそのやりかたというのはないのですか。

山田教授…そうですね。先ほど話したように第八高等学校との関わりのマスコットに見られるように、ここ



シンポジウム

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

滝子という地域は大学との交流がかなり前からあったところです。ある時期から大学の中でことが済んでしまうようになり、学生が商店街を利用しなくなり、その存在も知らないようになっていきました。

講義の中でも、大学の回りを歩くと、空き店舗の多い商店街の現実などを見ることができると説明しています。また、社会調査実習という講義では、実際に商店街を調査して、ヒアリングやアンケートで調査を実施しています。学生は調査を通じて地域、住民との交流を深めていくようになりました。大学としても地域との連携という形で積極的に働きかけるようになりつつあります。先日、大学祭がここでありましたが、十数年前はじつに寂しかったのですが、商店街や地域の多くの人たちが足を運ぶようになり様変わりしました。商店街の人たちが出店して、学生との交流を深めています。名古屋市博物館と学生との連携も拡大しつつあります。

もう一度、この地域を足もとからチェックして、大学と地域の関係を問い直すことが求められていると考えます。この地域は大学と大学病院、博物館があり、周辺には桜で有名な山崎川、名古屋グランパスの本拠地である瑞穂競技場などがあります。

すこし広い角度から見ると、この地域には豊富な資源があります。問題は資源をどう有効に使うか、相互に連携させるかです。

九博は「トンネルを抜けると博物館」という説明でしたが、名古屋市博物館は地下鉄を降りるとすぐに博物館に着きます。博物館と商店街の連携をどう築くかが課題では。九博の取り組みに学びながら、名古屋市博物館と地域、商店街、そして大学との連携がより拡大していくことを期待しています。

阪井教授…ありがとうございます。大学と地域の関わりはこれからだということですが、大学と博物館についても先ほどの三輪先生のスライドの中にもまあ不安もあったとのことでしたし、九博の場合は・・・？

三輪館長…キャンパスメンバー。

阪井教授…キャンパスメンバーですか、名古屋市も、名古屋市博物館との連携では、大学パートナーシップという形で本年度から始まったばかりなのですが、大学生を博物館に足を運ばせる、さらには、いろいろな形で運営やら企画やらボランティアなり、いろいろなことに関わらせる、その、アイデアとか、その工夫とか、

そのあたりは三輪さんはどういうふうにされていったのでしょうか。

三輪館長…大学は博物館にとってほんとに大事な場、しかし博物館にとつて結びつきがこれまで本当に乏しかったところでもあります。信じられないくらい乏しかった。実は私たちの責任でもあると思います。私が勤務しております博物館は、太宰府市にあります、大学が八つあります。それぞれに町での歴史はあまりないですけど。一緒になってやるには、何が大事かと最初に感じたのは学校の先生を教育することが一番大事だなと思いました。このことは小学校や中学校も同じです。小中高を含む全てのいわゆる学校教育の中で、博物館にどのくらい先生方が関心を持っているか、そのことがあまりにも少ないことにびっくりしました。

博学連携、博物館と学校がいかに連携するかというのもまた教育で、成果はそういう意味では本当にこれからだと思います。やっぱり学生さんたち一人一人の博物館信者をつくるというか、まあそういう立場で接しながら、いろいろな機会を与えながら、作りながらというのが今の答えでしかないんですけど。学生さんの持っている難しさとは、ずっと専門的にそういうところに興味と関心を



持って入っていかれる学生さんとはともかくとして、四年間で素晴らしい思い出を作っていくとか、それへのお手伝いとしては博物館が何をすべきかなど対応できたら一つの前進かも知れません。実はそんなことを考えてる矢先にですね、この大学が、素晴らしいレポートを出されました。それは、先生の指導の下に昨年の成果が出ておりますが、私も関心をもちながらも講演では言及できなかったんですが、わたくし共の教育普及担当は、学生さんの目線の素晴らしさを指摘しております。我々の気がつかない、個々に何をとは申しませんが、気がつかない目線がいっぱいあるんですね。そういう目線を、博物館や商店街がどういう風に反応しているか、あるいは飛び込んでくるのを受け止めているかというのは大事なことです。私も博物館でもぜひ応用させてもらいたいという風な、まとめ方がいくつかしてありまして、ここで具体例を出せないんで、申し訳ないですけど。だから何よりもそういう方向にこれから専門としてやってこう、あるいは将来の職業としても、例えば博物館と町づくりとか、そういうことを考えていこうという学生さんが増えていると聞いています。何も博物館を中心に考えていなくても、町おこし、地域おこしの

中で博物館をどのように活用するかというような視点も大事でないでしょうか。むしろ幾つかのリサーチを色々な方面からしてもらう、それを博物館や商店街がどう生かすかっていうことも必要でしょう。また一方で、学生さんたちが研究中心にリサーチしたことを博物館や商店街で生かすことの現実としてはなかなか難しい部分もありますけど、それは現実離れたような、そんな部分もいっぱいある。でも、仮にそうであっても、それに博物館や商店街がどう飛び込んでいくか、一部でもいい、それはリサーチした学生さんたちにとつては次の大きな力になるということでもあると思いますね。私は、まず学生さんたちのやったリサーチを博物館や商店街が信じて、そこに教える得るあるいは活用してという取り組み方が大事だなという気がします。リサーチをただ単にリサーチで見過ごすのではなく少しでも、ほんのちよつとしたことでもいいから生かしていくという、そんな取り組み方も必要かなと、報告書を見て感じました。

阪井教授…はい。ありがとうございます。ありがとうございました。なんか過分なお言葉をいただいて励まされましたけれども、もう時間も押してきたんですけど、学

生にちよつと発言をしてもらう前に、今年の、私どもの現代社会学科という学科の二年生の取り組みですが、博物館さんと、連携しているんなことをやっている中のほんのちよつとだけパワーポイントを使ってご紹介したいと思うのですけどね。社会調査実習と言う科目ですのでアクションリサーチと言う方法といいますが、自分たちで動いてとにかくにかやつてみてそこからこう問題を洗い出して、反省して、分析し、それをまた実行に移してというそういう繰り返し、循環によつて、解決方法を考えていくような、そういうアプローチの仕方です。いかにして若者を、高校生、大学生を博物館へ足を向けさせるのか、そういう実験をしてみようというのが今年の取り組みでございます。まずやったのが博物館ツアーです。学生が名古屋市博物館の企画展、特別展に学生を自ら連れていくというそういうツアーを作ってみて、で、これは去年のあの先ほど三輪先生がおっしゃっていた昨年のチームの報告書の中にあつたのですけども、博物館に行くきっかけがない、きっかけがあれば何か行けるのではないかという、そういう一つの答えがあつたものですから、きっかけづくりを自ら作ってみようかということと博物館ツアーと言うのをや



シンポジウム

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

りました。で、残念ながらですね、学生の間の動員力というのはまあやっぱり問題で、そういう意味での参加者というのはまあそんなに多くはないのです、実際は。ですが、そこに参加した学生はやっぱり、こう何となく行ってみたという、友達が呼び掛けてくれたんで行ってみたという、そういうことで一度行くきっかけができて、それによって「ああこういうところだったのか。博物館って意外に面白いんじゃないの。」というそういうことを気付いたというのがやっぱり成果だと思うんですね。ただまあ、参加人数が少なかったのでもこれをどう増やすかというのが今後の課題、それからまあ今年一番大きなイベントだったのが「なつまつり」です。八月の第一土曜、日曜にこれは毎年博物館さんと瑞穂通商店街さんが共催という形でやられているものですが、そこに我々も何かの形で関わろうということで、実際の企画に自分たちが、ボランティアという形で参加することで、ただ見に行くのではなくて何か企画を作ること、博物館というものを再認識していく、そういうきっかけづくりができるのではないかとということで呼びかけました。そうしたら、ボランティアとして四〇名ほどの学生が参加してくれました。他大学の学生か

らも、九名参加が得られました。それによってこれも昨年のチームの提言、先ほどからも少し話題が出ておりましたけども、夜、博物館を開館してはどうか、これはなぜかといいますと、大学の四時間目が終わるのが四時一〇分です。で、博物館の閉館時間は五時ですね。いくら近いといっても、四時間目が終わってから博物館へ行ったのではまあ二〇分ぐらいしか見られない。土日にはなかなか学校に來ないということで、もうちょっと開館時間を遅らせていただけないか、そういう提案がありました。けれどそれは博物館運営としてはなかなか難しいことなので、この「なつまつり」という特別な非日常の時間を使って、一度やってみようということ、博物館さんの方で受けていただいて、二日間、それも七時半から八時半という一時間ずつ、二日間で合計二時間、たった二時間ですが、開けてもらいました。二階の常設展で今ご覧のように、昼間の常設展の開館と同じようにやるのでは面白くないので、真っ暗にして所々に灯りをつけるという形で、昔の人の生活の中で、闇、暗がりというのがどういふものか、その中で、障子の絵だとか襖の絵だとか仏像だとか、そういうものがどういふ風に見えたんだろうか、ということを実験して

みよう、そういうことをやりましたところ、二日間、たった二時間でずが一〇〇〇人、一千人の方がいらしたんですね。これはもう、ものすごい画期的なことですよ。もちろん我々がPRしたということではなくて、博物館の「なつまつり」という場があつてということではありますけれども、今までにない形で、博物館の利用、その場に來られた方も、「ああ、こういうことだったのか。じゃあ昼間もつと見える、ちゃんと見えるときにもう一遍来よう」というそういう声をたくさんいただきました、これはやっぱり学生の発想と云いますか、熱い提案によって実現、もちろん博物館さんのご協力があつてのことですけれども、そういう試みができてとても面白かったし、これを持っていけば、あるいはなつまつりの時だけではなくて、まあ、年に数回そういうことができればいいななんて思っているんですけども。

このナイトミュージアムの中に更に学生は、クイズラリーというのを設定しまして、子ども、小中学生がたくさん来るものですから、ただ見るだけでは面白くないので、その中で何が見えるのかということ、クイズを出して、そのクイズに答えてもらって、ささやかな景品、うちの大学と博物館さんのクリアファイル



と名古屋市の伝統野菜の種を差し上げるという、本当にささやかなプレゼントですけれども、そういうかたちで、学生と市民の方、そして博物館とのつながりがたくさんできたのではないかと思っています。こういう、本当にささやかなものですし、これも学生の提案ですけれども、来場した子どもたちに、一緒に遊ぼうというところで、ゴム鉄砲を作ったりですね、シャボン玉で遊んだりとかそういうこともやって、博物館という場が、非日常になって、博物館本来の姿ではないですけれども、遊べる空間としての可能性を示すことができたのではないかなと思っています。こういったものすべて学生の発案で実行できたものです。これは毎年、昔からやっている博物館の学芸員さんが、汗を流してやっている天の川という約一〇〇〇個のろうそくを使って火を灯してですね、この界隈の幼稚園や小学校の生徒が、ろうそくに被せるフードに絵を描いてくれて、それを並べて天の川を作る。これは常設展二階から下を眺めた図なんですけどね。こういう、博物館の使い方を、また、別の角度をですね、中から外をという。これは名古屋市博物館にはきれいな日本庭園があって、この横ですけれども、その空間をなかなかどういう訳か活用でき

ていないように我々には思えてですね。せっかくそういう素敵な空間があるので、外も庭も含めて遊べる、あるいは博物館を見直す、再認識する、そういう空間づくりというものにも、これも学生が何人かボランティアで参加しましたけれども、色んなかたちで、学生と博物館、そして地域の方々のご協力を得て、何か新しいものをつくれる、そこがとっても面白い空間ができるのではないかな。参加した学生ボランティアの四〇人の学生に聞きましたら、また来年もやりたい、あるいは別の機会に博物館の展示を見たい、博物館にも来たい、そういう答えが、多数ですね、ですから、こういう場をつくる、こういうきつかけをつくる、あるいは自らそれを考える、それによってこう、博物館と大学そして地域のつながりというものをつくることができるとは、もう時間がないので、この平和教育の方ははしります。これからですね、今出ているように、もつと商店街に学生が足を運べるようなことも含めたですね、せっかくこの瑞穂区というのは、大学もあり、博物館もあり、商店街もそこに展開しているという、そういう地の利、ロ

ケーションを利用しない手はない、それをもって新しい街づくりができないかというその一步を踏み出した所でございます。では学生の方から誰が発言するのですか。今年の取り組みについて、今考えていること、実践してみようかということですが。

日比君…今年の阪井班の活動についてですけど、先程発表でもあったんですけど、ツアーでは自分たちの力の至らなさもあって、あまり人を集めることができなかったです。なので、これからツアーに代わる、もつとより学生側に博物館の魅力を伝えていって、より大きなイベントを私たちで企画して実行していって、名古屋博物館に連れていき、もつとより多くの学生に博物館に関わってもらって、より連携を強化していければいいなと考えてます。あと、個人的な意見ですが、これまで、活動を通して、博物館と商店街の方との連携は、今日、色々な方々の話を聞かせていただいて、コンサートを名古屋博物館の講堂で行われたりと、二者の連携はかなり強化されていてすごいなと思ったんですけど、まだまだ学生がその輪に加わりきれてない部分があるというか、私も阪井班の一員として「なつまつり」にボラ



シンポジウム

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

て、その三者が協力した時にすごい子供たちが博物館に魅力を感じて、さらに、その商店街の人々だけでなく私たち学生と関わりを持つてすごい楽しんでいる様子を見て、三者が協力することですごい大きなメリットが生まれると感じたんで、これからはもっと私たち学生が積極的に博物館の方や商店街の方の意見をうかがう機会を、話し合いの機会などをもてる、で、私たち学生からでしか気づけないような視点もあると思うので、そういうものも博物館の人や商店街の人にどんどん発信していくって、もし良ければ、それを私たちの意見を探り入れてもらって、新たな企画というか、今後の方針に生かしてもらえれば有り難いと思います。また、「なつまつり」、博物館前の「なつまつり」だけじゃなくて、私たち学生が市立大学と市博物館と地域連携に魅力ある街づくりを目指すという事で、また三者が合同で、人を招いて街と博物館を活気づけるようなイベントをもっとできれば、すごい有意義だと思うので、そういうのを実行できればいいなと個人的には思います。うまくまとめきれないですけども、今日話を聞いて思った、私が思ったのは以上です。

阪井教授…はい、ありがとうございます

ました。バックヤードツアーのお話がありましたけれども、実は昨日決まったことなんですね。名古屋市博物館のご協力を得て、学生のツアーの新しいかたちとして、バックヤードツアーを今後企画することになりまして。とっても素敵だなと思うて、先ほどのようなかたちになるのかはよく分かりませんが。これもまた新しい試みで、また何かそこからできるものがあればなと思うし、そういうものがまた地域の方々に同じようなかたちで、そういう機会が提供できるような。それを大学との連携、そして商店街に呼び掛けとか、そういうことがあると面白いかなあと思っています。

ではわずかな時間しかありませんが、今日ご来場の方々から、質問とかご意見とか何かございましたら手を挙げていただいてご発言いただければと思います。今日は博物館、美術館関係の方とか、あるいは商店街の方もいらしてると聞いておりますが。うちではこういうのやつてるとよとか、何か、何でもいいですけど何かありませんか。三輪先生に質問でもいいですし。

女性A…博物館は私も学芸員資格を持っていたと思うんですけど、博物館の中のボランティアを募っていただ

いたら、いいかなと思うんですが、よろしく願います。アメリカのように。

阪井教授…はい、ありがとうございます。これはあの博物館さんの方ですか。

水谷副館長…博物館でボランティアをお願いしていることは、常設展の解説ですとか、あるいは他に、先ほど話題になった「なつまつり」などいろいろな教育普及事業の中で可能なことをお願いしています。例えば、これからですと、年明けに小学校三年生が昔のくらしと今のくらしを展示を見て体験もするという催しを行います。これは市内の九割以上の小学校が見に来て下さる事業なのですが、小学生の団体の受け入れのお手伝いなどをお願いしております。すみませんが、今度いつボランティアの募集があるかお約束できない状態なんですけど、機会がありましたら宜しくお願いします。

阪井教授…はい、ありがとうございます。他に何か。

男性A…すみません。先ほど三輪館長にご挨拶させていただいたんですけども若松と申します。あの、つい



六月ぐらいまでは福岡におりまして、今は高浜市のかわら美術館のイベントの運営をやっておるんですけども、ホールの特性上ですね、館の特性上、どうしても特別展をやりながらですね、やはり同じように、コンサートボランティアの合唱とかですね、それから陶芸教室、あの、全く別の系統のお客さん、あるいはお子さん含めて、色んなイベントあるいは陶芸体験等含めてやっとなるんですけど、特別展等のいわゆる美術館、美術館的なテーマになるとですね、アンケート調査になるとですね、そのコンサートでお琴がうるさいとか、全然違う人がやってきただとか、子どもと一緒に見ると、まあ、それ

を注意するために、どうしても監視のお姉さんが注意するんですけど、それがうるさいだとか、色々多目的に館をうまく利用しているかと思うんですけど、そういう苦情が出てつていうような。僕は、今の段階では無視しているんですけど。その点が、うまくその大きな、空間を使つて、ほんと空間を分けられればいいんですけど、どうしてもその、難しい。館の設備状況がありましてできないんですけど。それと、本来どちらかというと瓦の博物館に近い要素があつて、あくまでも、市民ホールの美術館を模しているとは思つてい

るんですけども、小学校低学年ぐらいまでの子供つていうものがですね、どうしても、博物館、とくに美術館なんかは矛盾する対象じゃないかなというのはいみなさん一般的には思われてると思うんですね。私は逆にそれを、矛盾していない親子で、先日ハンス・フィッシャーと絵本の展示会なんかかなり親子、あるいはおばあちゃんとお母さんとお子さんつていう三世代を連れてくるようなかたちで展示会をやってきたんですけども。その辺の博物館等を含めて小さな子供に対してどう対象として、ターゲットとしてとらえているかつていうのを教えて頂きたいんです。

水谷副館長…それでは、名古屋市博物館の事例などを紹介したいと思えます。今おっしゃられた通りで、子どもさんたちが展示室で見学する時に、一般のお客様とどう共存するかということが課題となっています。私どもの館だけではなくて他の博物館・美術館が、子どもたちにも展示を楽しんでもらいたい、或いは子ども向けの展示解説を展示室でしようとする場合、子どもたちの団体が入りますとかワークショップなどの子ども向けの事業をしますということ、を、他のお客様にお伝えするようにしています。そして、時間限定の事

業であることも説明し、協力をお願いしています。最終的には、子どもたちに博物館や美術館の楽しさを伝えるという教育的な配慮の下で行っていることをお伝えしてご理解いただくといいのが今の状況です。一般向けの催しで、コンサートのような音の出るものなどは、お客様の理解を頂くことが、避けて通れない課題となります。声や音の出るコンサートなどは、短時間のものはエントランスホールで行い、ある程度時間をかけて行うような催しは、講堂で行うというようにしています。催しの種類によって開催する場所の住み分けをしているというのが現状です。

男性A…ああ、はい。ただ、展示そのものを子供をターゲットにするつていうようなことは意識されているわけじゃないですね、普段。

水谷副館長…通常、主として子ども向けの展示として開催しているのは、先ほど少し申し上げました、小学校三年生を対象にした、昔のくらしと今のくらしを比較する展示と昔のくらしを体験する体験教室です。体験教室は、学校団体が利用する平日は、一般に開放していませんが、土・日・祝日は一般の方にも利用いただいています。それから、一般対

「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

象の展覧会でも、子どもさん向けに、例えばクイズラリーをしたり、解説パンフレットを作ったりすることもあります。

男性A…ありがとうございます。

阪井教授…予定している終了時間の五分前になりましたので、まだまだいろいろご意見やらご質問とかあるかと思いますが、最後に、いままでのいろいろな話から三輪さんもう一言何かありませんか。

三輪館長…私先ほど学生さんが館と協同しながら新しいイベント等を含めた展開への参画、あるいは商店街との連携で、話をされていたんですが。さっき阪井先生から示された、あの、このプレゼンテーションの中にもありましたように、ひとつだけちよつと申し上げたいと思うことがあります。催しものについてですが、本当に大事だと思いますが、たとえば学生さんが参加するときにそこに少しだけ知的なものが何か欲しい。あるとまた市民なり商店街なりも違ったかたちで盛り上がるかもしれない。という印象をなんとなく感じます。特別根拠があることではないですが。

つまりどういうことかという、

先ほど、たとえば天の川の話がありました。夜見ると非常にきれいで美しい、誰が見ても光と闇の中で、また幻想的なものでもある。まあ博物館のテーマの一つとしてやるとするならば、もう一味そこに何か知的なもの。市民のみなさんが、ああそうかと思うようなそういう知的なものを取り入れたい。たとえば、いま、簡単にそういうデータはとれると思うんですが、大化の改新のときの天の川。鎌倉幕府を開いたときの天の川。関ヶ原合戦のときの天の川。これ、割合簡単にデータが取れますから。たとえばそういうのをネットでちよつとだけ出す。テレビ画面でもなんでもいいです。もうそれだけで学生らしい取組み方じゃないですか。場合によると、博物館らしい支援になるかもしれない。

難しいことを分かり易くさせるのも博物館の大事な取組み。博物館の持っている調査や研究の成果をいかに市民に還元していくかっていうところが、まあ展示であつたり、イベントのような表現であつたりすることだと思えます。楽しい催しものの中にも、少しそういうちよつとした好奇心、知的と言えるかどうかは知らないけれど、あるいは思いつきに近いかもしれませんが取り込んでいく。ということ、ファンも増えていく

んじゃないか、そんな気がします。

いずれにしても、わたくしは博物館で行うどのような催しものであつても、どのような展覧会であつても、常にユーザーがわくわくドキドキするような、そういう取り組み方が、博物館の発展にもつながるだろうし、地域と大学が連携する上でもそういう部分が本当に必要だなと、そんな印象を持ってこのシンポジウムに参加させて頂きました。ありがとうございます。

阪井教授…ありがとうございます。本当に、いまのお言葉で、このシンポジウムは総括できると思いますね。まだまだ我々の場合には本当に始まったばかりの取り組みで、これからなんですけれども、今日はたくさんさんのヒントを頂いたと思います。いろいろな見方が必要なんだと、いろいろな立場、いろいろな人たちの協力が必要なんだということを改めて痛感致しました。

まだまだご発言されたいと思う方はいっぱいいらっしゃると思いますし、壇上にいるみなさんもまだまだ物足りないと思っておられるかもしれないですが、予定の時間になりましたので、今日はここで終了させて頂きます。本当に今日は、たくさんのご来聴ありがとうございました。

博物館と大学の連携について

名古屋市博物館

(みずたに・えいたろう)

水谷 栄太郎

一. はじめに

名古屋市立大学から連携の話しを頂いた時、研究者や学生と交流・協働することによって、博物館が新しい展開をする可能性が開けるかもしれないと思いました。三十余年前に博物館が開館して以来、博物館も随分フレキシブルになり、その活動領域や内容を拡張してきました。しかし、その交流範囲は博物館界とその周辺の限られた範囲に限定されがちでした。また、博物館の利用者は伸び悩み、平成一三年以降低落傾向に転じていました。

こうした状況の中で、博物館の職員が、市役所とか博物館の世界から足を踏み出し色々な団体や市民と交わることによって、博物館に求められていることや私たちに見えていなかったことが見えてくるのではないかと考えたのが生まれました。名古屋

市博物館では、数年前から交流と連携の拡大の手始めとして地元の商店街と協働して「博物館のなつまつり」を開催してきました。こうした活動を通じて、博物館が地域の住民として認知されるようになったと感じています。

名古屋市立大学との連携はまだ始まったばかりです。それを継続し、両者にとつてより実りのあるものにするためにはどうすればよいのかを、考えてみようと思います。

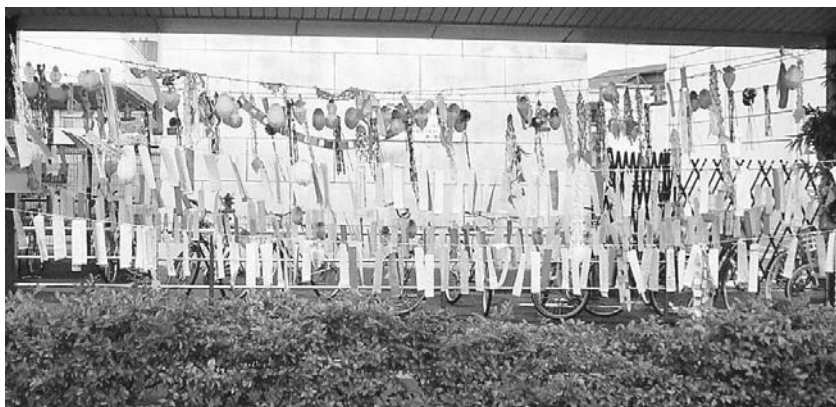
二. 連携の経緯と成果

地方の博物館と大学は、研究と教育を行うとともに地域に貢献するという使命を持っています。しかし、研究の目的、教育の対象と内容は異なっています。その異なる点が、相互を補完する効果を生み、地域貢献に繋がる可能性があるかもしれないと期待しています。



平成二〇年一月から名古屋市博物館と名古屋市立大学とは、数回にわたり連携事業について打ち合わせを行いました。その折、最初に感じたのは、お互いに相手のことを知らないということでした。次に、お互いに相手に期待していること、求めていることが漠然としていて感じました。しかし、これまで余りお付き合いのなかった者同士が新しいことを始めようとするのですから、これは至極当然のことです。話し合いを重ねることで少しずつ理解も進み、事業の姿が見えてきました。打ち合わせを始めてから平成二一年度の事

業・授業開始まで余り時間がなかった。新しく連携事業を立ち上げるよりもお互いの既存事業に協力し合うことから始めることにしました。具体的には、人文社会学部現代社会学科阪井ゼミが、「社会調査実習」で博物館に関する調査を実施し、名古屋市博物館の行うアンケート調査に助言と協力をしました。また、学生



が、博物館の「なつまつり」などにもボランティアとして参加しました。この成果は「名古屋市博物館に若者を呼び込む方法」大学生の理想の博物館像」としてまとめられました。その提言もさることながら、博物館にとつての収穫は、博物館を利用することの少ない大学生に博物館について知ってもらい、関心を持つてもらう機会を得られたことです。また、職員が継続して大学生と関わることで若者の考えの一端を知ることでもできました。

平成二二年度から名古屋市博物館が、大学との連携事業を促進するためパートナーシップ事業を発足させ、名古屋市立大学も加入しました。この制度の創設により、学生が観覧料を負担することなく博物館の展覧会を見られるようになり、大学の事業の一環としての博物館利用がしやすくなりました。個人としての学生の博物館利用も少しずつですが、増えてきています。「夏まつり」では、学生が常設展示室でのナイトミュージアムの企画・運営に関わるなど前年よりも踏み込んだ連携を行いました。阪井ゼミが中心となり他大学の学生も含めより広範囲の参加者を得られたこと、参加者の九割がまた参加したいと答えてくれたことが、この事業の大きな収穫でした。このように

手探りをしながらですが、関係者の地道な努力によって、連携事業がその姿を現しつつあります。名古屋市博物館と名古屋市立大学関係者の初期の会合で、「焦らず、無理をせず、着実に出来ることから始めましょう。」ということを話し合いました。今後は連携事業を継続し、より深化させるとともにその領域を広げることを目指したいと考えています。

三. 他の事例紹介

他地域での博物館と大学の連携事業の事例として、三重県と三重大学、福井大学と福井県内の博物館の二つの事例を紹介します。

三重県は平成二六年の開館に向けて、「ともに考え、活動し、成長する博物館」という理念の下、「協創」と「連携」による活動を行う新博物館の整備を進めています。三重県と三重大学は、大杉谷等での動植物共同調査、地域歴史資料の目録作り、三重大学研究者収集資料の受贈・保存、三重大学演習林での自然科学教室の開催など調査研究・収集保存・活用発信活動など多方面にわたって連携・協力事業を行ってきました。新博物館の整備を契機とし、その「連携」をさらに進めるため、平成二一年三月

に三重県知事と三重大学学長が、『新県立博物館』にかかる連携に関する協定』を締結しました。この協定の趣旨は、「新県立博物館基本計画」（以下「基本計画」）の実現を通じての三重県の文化振興に向けて連携・協力するということです。

協定は、三重県と三重大学が

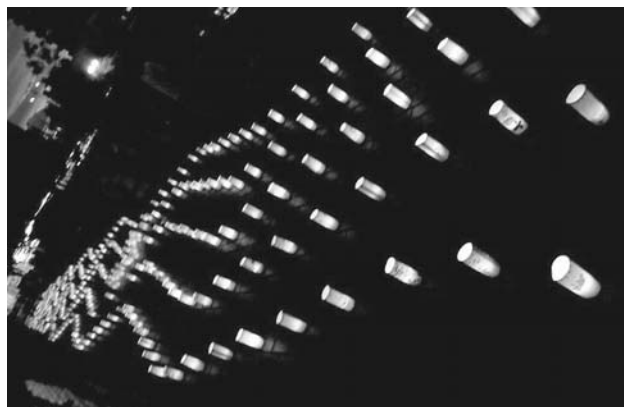
- ① 「基本計画」における重要なパートナーとして、相互に連携協力する。
 - ② 両者が連携協力・連携調整の窓口を設置し、連携協力体制を構築する。
 - ③ 両者が、双方の有する知的資産と自然・文化資産の新県立博物館における活用方法について協議する。
 - ④ 両者が「基本計画」にある調査研究、収集保存、活用発信活動、博物館の運営等に関する諸課題を検討し、新県立博物館整備計画の具体化に向けた相互連携の取り組みを推進する。
 - ⑤ その他、双方の発展に関する事項について協力する。
- という内容です。

この協定に基づいて、平成二一年四月から三重大学の博学連携推進室と三重県の新博物館整備推進室が毎月一回連携協議を行い、同年一〇月から一二月に、「三重県・三重大学連携『文化力形成と地域活性化』連続フォーラム」を三回開催しました。博物館・大学・行政関係者等を講師・パネラーに迎えたフォーラムの各回

のテーマは、「文化力・地域の活性化と大学の役割」、「博物館と大学の連携により進める人づくり」、「文化力と地域活性化を拓く博学連携」でした。

平成二二年度からは新県立博物館の展示計画に合わせて、「御師屋敷の復元研究」（人文系）、「伊勢湾・熊野灘の展示設計に関する調査・研究」（自然系）と「祓川流域研究（祓川ハンドブックの作成と展示設計への展開）」（総合系）の共同研究が始まりました。いずれも具体的な成果につながる連携事業です。三重県の新博物館は、「みんなでつくる」をモットーに子どもも含め各界のいろいろな人の意見を聞きながら開館準備を進めています。その取り組みは、博物館や大学にとって社会との関わりを考える上で良き参考事例となります。

福井大学教育地域科学部で博物館学を担当する宇野文男教授は、学生をさまざまな博物館へ「送り込んで」展覧会の企画から開催までを体験させています。現場主義で、学生たちに責任を持たせて実習を行わせ、学生の専攻を生かすよう配慮もしています。先生の講演記録や実習レポートからは、単なる「お客さん」ではない実習生の姿が見えてきます。また、平成一八年度から主に県内の博物館活動を紹介する公開講座を開催しています。この講座は、博物館の



理解者と利用者を増やすため毎年テーマを決め学芸員や現場のスタッフを招いてトークショーを行うという催しです。福井大学では、企画力や実践力を持ち地域の文化を支える指導的人材の育成を目標にしているとのことですが、このような人づくりも地方の博物館や大学が果たすべき大切な役割だと思っています。博物館と大学が連携する場合、両者のニーズと事情に精通しコーディネートできる人物の存在が重要です。福井県でこのような博学連携が、実現し継続できているのは、国立民族学博物館に長年在職され、研究者と博物館人

との人脈を持つ宇野教授の存在によるところが大きいと言えます。

四、博物館と大学の連携について

今、博物館と大学はその存在意義を問われ、目に見えるわかりやすい成果を求められています。博学連携はそうした状況から生まれてきたという一面も否めません。しかし、連携はあくまでも手段であって、目的ではありません。連携を実のあるものにするためには、まず相手のことをよく理解することです。両者を結び付けるキーパーソンの存在は必要不可欠ですが、福井県のような事例は稀なことですから、焦らず話し合いを続けて相互理解を深めることから始めることになります。相手は何を求めているのか、何をしようとしているのか、共通の目標は何なのか、お互いの長所と短所は何なのか等々、知るべきこと話し合うべきことは多々あります。例えば、両者の役割分担や補完機能については、こんなことがあるでしょう。大学での研究を博物館で実践・検証するといったことも考えられます。博物館という場と資料を学生の教育に生かすことも一案でしょう。また、大学では教員が

交代するとそれまで収集した資料やデータが廃棄・死蔵されたりすることがあると耳にしましたが、そんな場合には博物館の資料収集・保管機能を生かすことができます。

話し合いを通して連携することの意義とメリットを両者が認識することも重要です。お互いに固有の業務や事業がありますが、連携はそれに加わる新たな事業を生み出すことになりがちです。そんな時、連携のメリットが認識されていないとこれ以上の負担は無理ということで、連携事業から腰が引けてしまいます。博物館と大学は連携事業を考える場合、教育・地域貢献という視点から判断する必要があるでしょう。

連携事業を企画するときに大切なことは、その内容がお互いにメリットのある互恵的なものであることです。互いの組織のミッションに合致した内容であれば、余計な仕事が増えたという負担感も軽減され、連携による事業の質の向上にも繋がることでしょう。

連携を進める方法として、組織整備が先か実践先行かという問題があります。協定を結び、組織を整えて臨むという方法もありますが、名古屋市博物館では、まずは話し合いを重ね、両組織内に理解者を増やしなから、着実に実績を重ね、継続して

ゆくことが大切と考えています。

連携という理念は美しいのですが、その実践には幾多の困難が伴うことが予想されます。その障害を取り除きながら、様々な可能性を求めて、理念の実現に努めてゆきたいものです。

この文章を書くあたり、福井大学宇野文男教授、三重県生活・文化部新博物館推進室井戸畑真之室長、小川隆之主幹から貴重なご教示と資料の提供をいただきました。末尾ながら記して厚くお礼申しあげます。

高浜市やきものの里かわら美術館と 特別展「ひめゆり平和への祈り―沖縄戦から65年―」

高浜市やきものの里かわら美術館学芸員

(あんど・さおり)
安藤さおり

はじめに

高浜市やきものの里かわら美術館では、二〇一〇年四月三日(土)から五月一六日(日)の会期で、特別展「ひめゆり 平和への祈り―沖縄戦から65年―」(以下、ひめゆり展とする)を開催しました。この展覧会では、当研究所の所長である阪井芳貴先生に広報等のご協力を賜り、そうしたご縁から、会期中にはマンデーサロンで展覧会のご紹介をさせていただきますました。そして今回はかわら美術館の紹介と、ひめゆり展の回顧録を書く機会をいただいたものです。

高浜市と高浜市やきものの里 かわら美術館

愛知県高浜市は、三河平野の南西部に位置する、人口四万五千ほどの

小さなまちです。高浜周辺で江戸時代の中ごろから始まった瓦生産は、豊富に採れた良質の粘土と、知多湾に面した海運の良さという地の利を活かし、ちようど同じ頃に大都市で瓦の使用が爆発的に増えたことと相まって、大発展を遂げました。三州瓦と呼ばれるこの地の瓦は、現在では生産量日本一を誇り、その全国シェアは六割を占めます。

こうした歴史を持つ高浜市に一九九五年に開館したのが「高浜市やきものの里かわら美術館」です。日本で唯一の「かわら」をテーマにした美術館で、メインエントランスの前では、日本一の大きさという地元の鬼板師(鬼瓦を専門に作る職人)たちの手による巨大ないぶしの鯉瓦がお客様を迎えます。併設された陶芸創作室ではやきものを作る体験ができるほか、ホールやスタジオ、講会議室などの貸しスペースも備えた複合施設で、地域の芸術文化活動の拠点として親しまれています。



収蔵品は、日本の各時代の瓦類をはじめ、世界の瓦類や、やきもの資料、瓦ややきものに関連した美術品(絵画、版画、浮世絵、書、写真)など、総数およそ二二〇〇点です。(二〇〇九年度末現在)

常設展では、これらの収蔵品の中から、かわら美術館の核である瓦とやきものを取り上げ、「瓦文様とやきものの美」と題して紹介しています。瓦は紀元前一四世紀頃のギリシャと、紀元前一世紀頃の中国で生まれたと言われています。日本へは多くの文物と同じように、中国から朝鮮半島を経て伝わったとされており、『日

本書紀』の中に「崇峻天皇元年（五八八）に飛鳥寺を建てるにあたって、朝鮮半島の百濟から四人の瓦博士（かわらのはかせ）が渡来した」という内容の記述が残されています。常設展では、こうした瓦の歴史の流れと軒先を彩った文様の変遷を中心に紹介しています。

それ以外の収蔵品は年に数回、テーマを設けて行う企画展の中で紹介をしています。

一方、特別展では瓦にとられず、幅広い分野をテーマに取り上げた展覧会を行っています。特に、「イタリヤ・ポロニーニャ国際絵本原画展」をはじめとする絵本原画の展覧会と、「やきものの里」に因んだ陶芸作品の展覧会は、かわら美術館恒例として多くのお客様が楽しみにしてくださっています。

特別展「ひめゆり 平和への祈り — 沖縄戦から65年 —」

そしてもう一つ、これまでの特別展で多く取り上げているテーマが「命」や「平和」です。これまでも、二〇〇二年度「無言館コレクション」から戦没画学生「いのちの絵」展、二〇〇四年度「60億の肖像 田沼武能写真展」、二〇〇七年度「原爆の図



丸木位里・俊展」といった展覧会を開催してきました。そういった流れの中に、昨春の「ひめゆり 平和への祈り— 沖縄戦から65年 —」があります。この展覧会は、ひめゆり平和祈念資料館と朝日新聞社の企画によるもので、当館の後、長野県立歴史館、四日市市立博物館、水戸市立博物館、大阪人権博物館を巡回しました。

以下は広報用のチラシに掲載した展覧会紹介文です。

「1945年、沖縄では軍民混在の地上戦がくりひろげられました。鉄の暴風と呼ばれる砲爆撃が約90日間もつづき、20万人以上が命を失いました。沖縄師範学校女子部・沖縄県立



第一高等女学校の教師・生徒240人は、その過酷な戦場に学業半ばで動員され、沖縄陸軍病院の壕で負傷兵の看護に当たります。彼女たちは戦後、ひめゆり学徒隊と呼ばれました。沖縄戦末期、沖縄本島南端に追いつめられた彼女たちの半数以上が、砲煙弾雨の中で亡くなりました。

二度と戦争を起こしてはならないという思いから、ひめゆり同窓会は、1989年、ひめゆり平和祈念資料館を設立しました。それから20年、生き残った生徒たちは自らの戦争体験を語ることで、戦争のむごさと平和の大切さを訴えつづけています。

戦後65年、ひめゆり学徒生存者は80歳を越えました。生存者の思いを伝



える最後の機会ともいえるこの節目の年に、平和への祈りを込めて、ひめゆりからのメッセージを届けます。」

展示は、二〇〇八年末に沖縄本島南端の荒崎海岸の岩場で発見された、学徒の一人が持っていたと思われる校章の紹介をプロローグとし、動員前の学園生活を紹介した第一章、動員されてから終戦までの第二章、終戦後から資料館建設、そして現在までを紹介した第三章という構成でした。遺品や砲弾の破片などの実物資料を織り交ぜながら、ひめゆり学徒隊からみた沖縄戦の実相を伝えるとともに、生き残った者の思いや伝えることへの意思にもスポットが当てられました。紹介文にもあるように、生存者たちがみな八〇歳を越えた今、

この展覧会を通して命と平和を大切にしたいという自らの思いを次世代に継承していくことが大きな目的の一つからです。

かわら美術館での会期中には、のべ九〇四名のお客様が来館され、館内に設置した来館者アンケートと、ひめゆりへおくるメッセージカードに多くの感想を残してくださいました。展覧会ごとに集計するアンケートは平均三〇%前後の回収率ですが、本展では六〇%以上の回収率（五五三枚）となり、メッセージも五三八通が寄せられるなど、お客様からの反響が非常に大きな展覧会でした。年代では高齢者の方が多いのも特徴で



したが、一方で子どもにぜひ見せたいという親子での来館者が多かった印象もあります。展示室内に大型スクリーンを設置して上映した、米軍による沖縄戦の記録フィルムと生存者の証言を交えた一時間ほどの映像も、休日には人だかりができるほどの状況でした。

この展覧会に合わせて、ひめゆり学徒生存者でひめゆり平和祈念資料館館長の宮良ルリさんにお越しいただき、講演会を開催しました。四月二九日（木・祝）は広く一般の方に向けて、四月三〇日（金）は高浜市内の小中学生に向けて、それぞれご自身の沖縄戦体験をお話いただきました。



特に四月三〇日の小中学生向けの講演会は、若い世代へ伝えたいという生存者の方々の思いを受けて企画したものです。学校としては新学期が始まったばかりの忙しい時期の開催でしたが、市教育委員会と学校からの協力を得て、会場近隣の学校の小学校六年生と中学二年生あわせて約六百名に、宮良さんのお話を聞いてもらう機会を設けることができました。用語や地名などが難しかったり、耳を覆いたくなるような生々しい内容もありましたが、宮良さんの体験を通した平和への願いや、命を大切にしたいという願いや、そして自分で考えて物事を判断できるようになって欲しいというお話に、子どもたちは真剣な眼差しで聞き入っていました。

さらに、担当学芸員による展示説明会を会期中に三回行い、合計一五六名のお客様が参加してくださいました。多くの学徒が亡くなった壕の傍らに建つひめゆり平和祈念資料館では、生存者の方が毎日交代で展示室に立ち、ご自身の体験を来館者にお話されています。一方、かわら美術館での展覧会では、沖縄という場から離れて、沖縄戦どころか、戦争そのものを知らない者がお話することになります。何をどのようにお客様に伝えればいいのか、相当悩み

考えました。展示は「生存者から見た沖縄戦と戦後の歩み」です。それを通して、ひめゆりからのメッセージを伝え、次世代へと継承していくことが、この展覧会の大きな目的です。そこで私は、生存者の方々の思いを伝えるメッセージに徹することになりました。私自身が沖縄を訪れて、ひめゆり平和祈念資料館や病院壕、ガマで見たこと、そこであかがった生存者の方々のお話や思いを、できるだけそのままの言葉で目の前のお客様に伝えるよう努めました。実際に体験していないことを「分かる」ということは難しいですが、戦争とはどんなものであるのかという実相を「知る」ことは出来ます。体



験者の数だけある実相を一つでも多く知ることから始め、そこで感じた自分自身の思いを、周りの大切な人に伝えて欲しい。展示説明会の最後には、私自身の思いもお話させていただきます。

美術館は展示というメディアを通して、メッセージを発信することができる場所です。地方の小さな美術館から、これからは様々な形で発信し続けたいと考えています。

高浜市やきもの里かわら美術館

利用案内

■開館時間

午前九時から午後五時（観覧券の販売は午後四時三〇分まで）

■休館日

月曜日（祝日の場合は翌平日）、
一二月二八日～一月一日

■観覧料

高校生以上 二〇〇円
中学生以下 無料

（特別展開催時は別料金）

■問い合わせ

〒四四四―一三二五

愛知県高浜市青木町九丁目六番地
一八

TEL 〇五六六―五二―三三六六
FAX 〇五六六―五二―八一〇〇

韓国の寺院・神仏習合・博物館 —二〇〇九年度、二〇一〇年度の調査から—

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(よしだ・かずひこ)
吉田 一彦

韓国の調査

(ただし九日は移動のみ)と、二〇一〇年十一月二日～七日に実施した。まず、調査対象地を以下に列記しておこう。

二〇〇九年八月

五日 宋山里古墳群、国立公州博物館、国立扶余博物館

六日 扶蘇山、定林寺址、軍守里廢寺、王興寺址、国立全州博物館

七日 弥勒寺址、皇南塚古墳公園、雁鴨池、月城

八日 石窟庵、仏国寺、四天王寺址、善徳女王陵、四面石仏像、栢栗寺、芬皇寺、皇龍寺址、国立慶州博物館

二〇一〇年十一月
二日 雙溪寺

三日 華嚴寺、実相寺百丈庵、実相寺、咸陽徳田里磨崖如来立像、泉隱寺

四日 泉隱寺、燕谷寺、雙溪寺、国立晋州博物館

五日 玉泉寺、晋州城、国立晋州博物館、護国寺、海印寺

六日 海印寺、白蓮庵、願堂庵
七日 国立中央博物館

韓国の国立博物館

韓国には国立の博物館が数多い。その中で、国立中央博物館、国立公州博物館、国立扶余博物館、国立全州博物館、国立慶州博物館、国立晋州博物館を見学することができた。ソウルの国立中央博物館は、韓国の国立博物館の中心になるもので、現在の施設は二〇〇五年にリニューアルオープンしたもの。世界で六番目、アジア最大規模の博物館で、東館(常設展示館)、西館(企画展示室、図書館、子ども博物館、公演場(龍)、石造物庭園(野外展示館)などからなる。二〇一〇年末までは常設展示館と子ども博物館は無料である。私たちが訪れた時は、特別展「高麗仏画大展」が開催されていた。というか、この特別展を見学することが今回韓国を訪れた主要な目的の一つであった。これは日本、ヨーロッパ、アメリカなど世界各地に所蔵されている高麗仏画を一堂に集めて展示したもので、独特の色づかいや複雑な衣の文様など、高麗時代における仏画の発展がよく理解できる充実した展覧会であった。

日本の古代史・中世史や仏教史・宗教史を考究する際、日本一国の範囲の中で考えるのではなく、アジア東部、さらには広くアジアに考察の範囲を広げ、その中で日本の歴史や文化を考察することが重要になる。私たちは、科学研究費の補助を受けた共同研究「東アジアにおける仏教と神信仰との融合から見た日本古代中世の神仏習合に関する研究」(基盤研究(B)、研究代表者吉田一彦、課題番号二一三二〇〇二四、平成二一(二五年度)を実施するにあたり、二〇〇九年度および二〇一〇年度に韓国の寺院、寺院址などの調査を行ない、その中でいくつかの博物館を訪れた。以下、その概要を記しておきたい(法量および成立年等は、現地説明板、パンフレット等による)。調査は二〇〇九年八月五日～九日

国立慶州博物館は、新羅の古都慶州にある韓国を代表する博物館の一つで、本館、第一別館（特別展示室）、第二別館（雁鴨池館）、新館、野外庭園（野外展示）などからなる。これも二〇一〇年末まで入館無料であった。私たちが訪れた時は、特別展「四天王寺」が開催されていた。四天王寺は、『三国史記』巻七、文武王十九年（六七九）条に「四天王寺成る」と見える寺院で、新羅の文武王によって建立された寺院である。四天王寺址は、善徳女王陵がある慶州の狼山の麓にあり、私たちは発掘調査中の寺址を訪れたところだったので、現地を思い浮かべながら展示を見学することができた。同寺は、東西に二つの木塔を持つ双塔一金堂の様式の伽藍配置であった。これは新羅の新しい様式の伽藍配置と考えられる。塔の基壇の部分からは多数の緑釉塑造像^{りよくゆうそ}が出土した。レリーフで描かれたそれらの像が四天王像なのか、神将像なのか、それとも神像なのかは議論のあるところで、私たちの神仏習合研究にとっても重要な遺跡、遺物になるものと考えられる。日本では、藤原京に建立された薬師寺が双塔式伽藍配置（いわゆる薬師寺式伽藍配置）をとっているが、これは新羅の新様式を取り入れた伽藍配置であろうと考えている。飛鳥の寺院

と百済の寺院との関係については、別稿で論じたので参照されたい¹⁾。この特別展では、出土した緑釉塑造像^{りよくゆうそ}がずらりと並び、また「四天王寺」「卍」「消災」などの銘を持つ瓦が展示されていて、得るところが大きかった。国立扶余博物館は百済の歴史、文化を伝える展示が充実しており、日本の古代史を考える上でも多くの重要な知見を与えてくれる。国立公州博物館、国立全州博物館は、地域の文化財を展示するが、場所柄、やはり百済の文物の展示が充実している。国立公州博物館では、著名な武寧王陵の石室が移設されて展示されており、実物の持つ迫力に圧倒された。私たちは、直前に宋山里古墳群の武寧王陵を見学し、同地の模型館にて石室や墓誌石のレプリカを見学していたが、博物館では実物を見学することができた。二階の仏教関係の展示では、銘文に「七世父母」の文言を持つ千仏碑像を見ることができ、これも私には大きな収穫であった。

一方、国立晋州博物館の展示は独自の特色を持っていて、注目される。同博は、朝鮮半島の南端近くの晋州城の中にあるが、ここは豊臣秀吉による文禄慶長の役（韓国では壬辰倭乱）に関する展示が常設展の中心に据えられていた。日本語のパネル、図録や、日本語による案内も充実しており、多数の日本人に見学してほしいとのことであった。今後の日韓の友好関係を考える上で、歴史を十分に認識しておくことは重要であり、多くの日本人が、そして名古屋の人が見学するに適した博物館になっている。

韓国の国立博物館は、施設、展示ともに充実しており、また各地に造立されている。それらは観光という側面でも大きな役割を果たしており、韓国国内から、また国外から多数の人々が訪れていた。印象的なのは、小中高校生が親子同伴で、あるいは学校単位で多数見学に来ており、子どもの姿が目立つことであった。

筆者は、ここ数年、調査で中国を訪れているが、中国でも博物館は年々発展してきている。中核になる博物館は「博物院」と呼ばれている。筆者が見学したのは山西博物院、河南博物院の二つであるが、どちらも最新式の立派な施設の中に重要な文物がずらりと展示されており、何日いても飽きないと思わせる展示内容であった。

日本では、国立博物館は東京、奈良、京都、九州の四つしかなく、他に大阪の国立民族学博物館、千葉の国立歴史民俗博物館があるが、北海道、東北、中部、中国、四国には存在していない。その分、県立、市立

などの公立博物館があり、立派な施設と研究者を擁している機関もいくつかある。しかし、公立博物館の中には予算削減の問題や指定管理者制度の問題などをかかえている館もある。新しい国立博物館を作り、あわせて国立公立博物館の有機的、連携的發展を推進していくことは、日本の博物館の将来を構想する上で、大きな課題になっていると私には思われる。

百済の寺院址

扶余には百済の歴史や文化を伝える遺蹟が多数あり、寺院址も多数ある。今回は、それらのうち、定林寺址、軍守里廢寺、王興寺址および定林寺址博物館を、李タウン氏（圓光

大学校、考古学）の説明をうかがいながら見学することができた。定林寺址は百済を代表する寺院址で、近年まで五層石塔と石仏坐像（高麗時代）の二つがあるばかりであったが、最近石仏を安置する堂が建設され、博物館が併設された。五層石塔（八〇三・三センチメートル）は百済時代の石塔で、六六〇年以前の成立であり、第一層には百済を滅ぼした唐の蘇定方による「大唐平百済国碑銘」（顕慶五年（六六〇）八月一日）が刻まれている。定林寺址は、発掘調

査が行なわれ、門、塔、金堂、講堂が南北に直列に並ぶ様式の伽藍配置であること、金堂の基壇が二重基壇になっていて上成基壇と下成基壇の両者に礎石が配されていることなどが判明している。百済の寺院は、定林寺も、軍守里廢寺も、王興寺も、この直列式の伽藍配置（日本でいう四天王寺式伽藍配置）になっており、これが一般的な伽藍配置であった。日本の多くの七世紀建立寺院の伽藍配置は、これら百済の寺院の影響を受けたものと考えられる。なお、定林寺址では、現在、再発掘調査が行なわれている。併設される博物館は施設が新しく、出土遺物や関係史料の展示が充実していて、多くの知見を与えてくれた。

王興寺は、『三国史記』卷二十七、法王二年（六〇〇）春正月条に「王興寺を創る。僧三十人を度せしむ」と、また武王三十五（六三四）年春二月条に「王興寺成る。その寺水に臨み、彩飾は壮麗にして、王つねづね船に乗りて寺に入り、行香す」と見える寺院である。その址は、百済の王宮（泗泚宮）があったと推定される扶蘇山地区から見て、ちょうど白馬江（錦江）をはさんだ対岸にあたる蔚城山麓の寺院址がそれに当たると考えられている。ここからは「王興」銘の瓦が発見されている。ここ

の寺院址は、発掘調査によって、門、塔、金堂、講堂が南北に直列に並ぶ伽藍配置であることが判明した。私たちが訪れたときは講堂址の発掘作業が行なわれていた。

日本でも話題になったが、王興寺では、二〇〇七年、塔の心礎の南端に作られた長方形の舍利孔から舍利容器が発見された。舍利容器は、青銅製の舍利盒の中に銀製の舍利壺を入れ、その中に金製の舍利瓶を入れ、という三重の構造になっており、舍利盒には、「丁酉年二月十五日、百済王昌、亡き王子の為に利を立つ。本、舍利二枚なれど、葬時に神化して三と為る」という銘文が刻まれていた。ここから、同寺が、丁酉年（五七七）に、百済の昌王によって、亡くなった王子のために建立された寺院であったことが判明した。『三国史記』卷二十七には、昌王は威徳王で、聖王の「元子」（王の嫡子のこと）だとある。この調査の成果をうけて、王興寺と日本の飛鳥寺の関連性を説く見解が提起されている。^②

益山の弥勒寺も百済を代表する寺院である。その址は敷地が大変広大で、発掘調査の結果、塔と金堂の組み合わせが三つあるという一寺三院（三院一寺）の巨大な伽藍であったことが判明した。東塔、西塔は石塔、中央の塔が木塔で、中央の金堂の北



弥勒寺西塔 解体修理状況

側に講堂があるという伽藍配置をとっていた。同寺址には西塔が残っているが、その解体修理が行なわれ、二〇〇九年、第一層の心柱上面中央に舍利孔が見つかり、中から舍利容器が発見された。これは、金銅製舍利壺（外壺）の中に金製舍利壺（内壺）を納め、その中にガラス製舍利瓶を納めたものであった。ガラス製舍利瓶は破片状態になっていたが、白色舍利一顆と宝珠十一顆（宝珠はガラス瓶の外側か）が納められていたことが確認された。さらに、おもて面と裏面とに合計一九三文字の銘文が刻まれる金板の舍利奉安記が発見され、「己亥年正月廿九日」の日付

が記されていた。この「己亥年」は六三九年の可能性が高いという。この銘文の読解は日本でも開始されているが、銘文を記した金板は飛鳥の古代寺院との関係で興味深く、今後の研究の進展が期待される。弥勒寺址には遺物展示館があり、出土遺物などを見学できるとともに、解体修理中の西塔を上部から見学することができた。

新羅の寺院址と寺院

慶州では、著名な皇龍寺址を踏査することができた。同寺については、『三国史記』巻四、真興王十四年（五五三）春二月条に「王所司に命じて新宮を月城の東に築く。黄龍その地に見ゆる。王之を疑ひ改めて仏寺となす。号して皇龍と曰ふ」とあつて創建の開始が記され、同三十五年（五七四）春三月条に「皇龍寺の丈六像鑄成す」とあつて丈六像の完成が記され、同卷五、善徳王十四年（六四五）三月条に「創めて皇龍寺の塔を造る。慈蔵の請ふところに従ふなり」とあつて塔の完成が記されている。この塔は、『三国遺事』卷三などによるなら、木塔の九層塔であった。皇龍寺址ははなはだ広大であり、これが巨大な寺院であったことが知られる。

発掘調査によると、同寺は、当初は門、塔、金堂が南北に並ぶ伽藍配置であった。その後、重建によって塔の規模が大きく改められて九層塔になり、その北側にやはり規模を大きくした中金堂、およびそれよりも一回り小さい東金堂、西金堂の三つの金堂が南向きに配置された。そして中金堂の北側に講堂が配置されて、それにとりつくように回廊がめぐらされて一塔三金堂の伽藍配置になった寺院である。同址からは大量の遺物が出土しているが、それらは国立慶州博物館の皇龍寺室に展示されている。「皇龍」「皇寺」の銘のある瓦、再建時の「刹柱本記」、仏像、螺髻片、鵝尾など注目される遺物が数多い。

その隣にある芬皇寺は、『三国史記』卷三、善徳女王三年（六三四）春正月条に「芬皇寺成る」と記される寺院である。この寺は、入唐留学して、同十二年（六四三）三月条に「入唐求法高僧慈蔵還る」とその帰国が記される慈蔵が住持したことで知られている。同寺には三層石塔が現存している。これは安山岩を割って磚のように造って用いた模磚塔であるが、今日まで複数回の大きな修復が行なわれて当初の姿が大きく変じられてしまっているらしく、もとは七層あるいは九層の石塔であったという。同寺は、これまでの調査により、塔

の北側に三つの金堂が「品」字型に配置される一塔三金堂の伽藍配置であったことが知られている。

慶州の東北地区の小金剛山という小さな山には栢栗寺がある。そこに登っていく途中に大きな四面石仏像がある。これは『三国遺事』巻三の記述から掘仏寺の仏像だったものと考えられている。各面に仏像の浮彫があるが、西面の阿弥陀三尊立像は特に大きな像に彫り出され、頭部が石の上面より上に出ている。



掘仏寺址 四面石仏

栢栗寺は現在も活動する現役の寺院で、私たちが訪れた時には、女性信徒たちが水仕事をしていた。現在は、中心となる大雄殿があり、その

左手上方に三聖閣がある。一九一四年までこの寺にあったという「異次頓殉教碑（六面石幢）」（一〇六・〇センチメートル）や、やはりかつてこの寺にあったという金銅薬師如来立像（一七九・〇センチメートル）は、現在、国立慶州博物館に移管、展示されている。

慶州では、また、世界文化遺産に登録されている、雁鴨池・臨海殿址の遺跡を見学した。これは三国を統一して統一新羅を築いた文武王によって造立された池および宮殿（東宮の建物）の遺跡で、発掘調査が行なわれ、建物が復元整備されている。



雁鴨池 復元された建物の正崩し勾欄

遺物は三万余点あり、そのうちの重要遺物七〇〇余点が国立慶州博物館の雁鴨池館で展示されている。遺物の中には、金銅仏立像、金銅三尊板仏、金銅菩薩板仏、金銅化仏などの仏像、仏具があり、ここから東宮内に内仏堂が存在したことが推定されている。木簡も出土している。さらに注目されるのは、殿舎に用いられた勾欄が出土していることで、これが正崩し勾欄まんじくす こうらんになっている。新羅では、後述の実相寺百丈庵の三層石塔や石燈にこの正崩し勾欄の意匠が用いられている。日本では、法隆寺、法起寺など、斑鳩の寺院の建築に正崩し勾欄が用いられていることが注目されてきたが、この意匠は新羅の建築文化、仏教文化と共通するところがある。法隆寺の当初の若草伽藍（斑鳩寺）は百済の寺院の強い影響を受けたものであったと考えられるが、再建法隆寺については、今後、新羅の文物の影響を考慮に入れて考察していく必要があるだろう。

智異山華嚴寺

韓国には山岳寺院が多い。いや、寺院は人里離れた地にあるのがむしろ一般的で、多くの寺院が山にあるというべきかもしれない。私たちは、

二〇一〇年度、韓国の山岳寺院のうち、智異山の華嚴寺、実相寺、泉隱寺、燕谷寺、雙磎寺、そして蓮華山の玉泉寺、さらに藏經版殿および八万大藏經が世界文化遺産に登録されている伽倻山の海印寺を踏査した。泉隱寺と海印寺では宿泊（テンプルステイ）もさせていただき、早朝の礼仏に参加した。調査には池美玲氏（禅理研究院、美術史）に同行していただき、韓国の絵画などについて御教示いただいた。

智異山は、小白山脈の南端にある山々の総称で、広い範囲に多くの峰があり、全羅南道、全羅北道、慶尚南道の三道にまたがっている。智異山地域は智異山国立公園に指定されているが、これは韓国最初の国立公園指定であり、また韓国で最大面積の国立公園であるという。智異山地域には、これまで多数の寺院が建立されてきた。

全羅南道求礼郡馬山面には、智異山を代表する寺院、華嚴寺がある。この寺は、伝承ではインドの僧である縁起祖師によって創建され、義湘によって重建されたというが、縁起（煙気）創建説は後世の書物になって見える説で、歴史的事実を伝えるものとは言いがたい。他方、『三国遺事』巻四は、華嚴寺は義湘の華嚴經流布活動の一つとして建立された寺院だ

とする。この説の妥当性については今後なお検討していく必要があるが、一つの有力説になっている。

現在の華嚴寺は、一柱門、金剛門、天王門と進んで寺内に入ると、正面に普濟樓（その背後が華嚴）がある。これを越えると正面が大雄殿である。その前の石段下には、東西に東五層石塔（六一九センチメートル）、西五層石塔（六四〇センチメートル）の二つの石塔がある。どちらも統一新羅時代末期のもので、西五層石塔には、十二神将、八部衆、四天王のレリーフが見られる。この石塔からは、一九九五年、解体修理の際に、青銅製仏像型、緑色瑠璃舍利瓶、舍利二十二顆、青磁双耳壺、無垢淨光大陀羅尼經などが発見されている。大雄殿は同寺を再建した碧巖によって建立されたもので、一六四九年の建築である。西五層石塔の西側の石段上には覺皇殿がある。こちらは一七〇二年の建築で、韓国現存最大の木造建築であるという。大きな屋根は組物などで支えられ、活柱が用いられている。堂内にも多くの柱が用いられており、梁や天井には絵画や文様が描かれている。殿前には石燈（六四〇センチメートル）があるが、これは韓国最大の石燈なのだという。その向かって右手の圓通殿前に獅子塔（三三一・二センチメートル）が

ある。どちらも統一新羅時代のものである。大雄殿にも覺皇殿にもまた他の殿にも、堂内には仏像が安置されているが、その後方には仏画が安置されている。これを幀画あるいは仏後幀画という。この仏像と仏後幀画の組み合わせが韓国の寺院の莊嚴の大きな特色になっている。幀画は、また仏像なしに単独で安置される場合も少なくない。大雄殿の東西には、冥府殿、影殿、圓通殿、羅漢殿が建ち並んでいる。

覺皇殿の背後の「孝台」と呼ばれる小さい丘を少し登っていくと、著名な四獅子三層石塔（二八九・七センチメートル）がある。これは統一新羅時代の九世紀頃のものであるという。この塔は、基壇上に四体の獅子を造って、これが四隅で三層石塔を支える造形になっているが、四獅子の中央には出家者の像があり、伏蓮台の上に立ち、胸前で合掌している。これが僧なのか尼なのかは難解であるが、出家者であることは間違いないだろう。この場所には、もう一つ独特の供養石燈がある。これには、蓮台に片膝立てて坐し、左手で茶碗のようなものを持つ人物が石燈下部に造像されている。伝承では、縁起祖師が母に茶を供養する場面を描いているとするが、像の意味についてはなお検討の要があるだろう。

実相寺と泉隠寺

実相寺に行くには、泉隠寺に入っていくゲートを通り、さらにその道を山奥へとどんどん北上していく。

動物注意の標識が多数あり、川が美しい。私たちはまず実相寺百丈庵を見学した。ここには統一新羅時代の三層石塔と石燈がある。三層石塔（五〇センチメートル）には、レリーフで華麗な装飾が多数ほどこされている。第一層には門扉、菩薩像、四天王像、童子像、第二層、第三層には奏樂天人が造られており、各層に卍崩し勾欄が造られている。四天王の中には童子をともなっているものがあり、めずらしい意匠になっている。



実相寺百丈庵 三層石塔と石燈



実相寺百丈庵 三層石塔 部分

る。尾蓋石の下側には、第一層、第二層のものには仰蓮が、第三層のものには三尊仏が造られている。石燈（二五〇センチメートル）も、また華麗な造りで、やはり蓮華上台石に卍崩し勾欄が造られている。

実相寺は智異山地域の北部、全羅北道南原郡山内面にある。同寺は、統一新羅の興徳王三年（八二八）、洪陟による創建と伝えられ、境内地からは統一新羅時代後期の銅鏡が発見されている。天王門を入ると左右に三層石塔（どちらも八四〇センチメートル）があり、正面が中心殿舎の普光殿である。殿前には石燈（五〇センチメートル）がある。いずれも統一新羅時代のものであるという。



実相寺 藥師如来坐像

普光殿の向かって右手には藥師殿があるのだが、現在修復中で、その主尊の藥師如来坐像（二六九センチメートル）は仮設建物の中に安置されていた。これはどうしたる体軀の鉄仏で、両手の先を失っているが、近年、後補されたという。同寺創建後まもなくの仏像で、統一新羅時代のものであるという。同寺には、他に冥府殿、極樂殿、七星閣などがある。石造物としては、証覺大師凝寥塔碑、秀澈和尚陵伽宝月塔（二四二センチメートル）がある。証覺大師凝寥とは同寺の祖師の洪陟のことで、秀澈（八九三年没）は第二祖である。証覺大師凝寥塔碑は、碑身石を失い、亀趺と螭首のみが残存している。後者の塔は八角円堂形の僧塔（浮屠）で、門扉、四天王像、宝輿、舍利盒、奏樂天人像、獅子像などがレリーフで造られている。

私たちは、次に咸陽徳田里の磨崖如来立像（像高五八〇センチメートル、台座六六センチメートル）を見学した。これは自然の岩に浮彫で造られた磨崖仏で、框座の上に蓮華の台座を造り、その上に如来立像を造形して、周囲に舟型光背を描いている。高麗時代のものだという。現在は小規模な大雄殿が造立され、古潭寺の寺号を称している。

泉隠寺は、天王門を入り、普済楼を越え進むと、正面が中心殿舎の極楽宝殿である。その後ろには、応身堂、八相殿、観音殿があり、観音殿の向かって左手には三聖殿がある。また、極楽宝殿の向かって右手には冥府殿がある。この寺はもと甘露寺



泉隠寺 極楽宝殿

といい、新羅の興徳王三年（八二八）に徳雲祖師によって建立されたと伝えられている。説話では、この寺の泉は水が甘くて病氣平癒に効果があり、そこに蛇が住んでいた。しかし、蛇が殺されると泉が枯れてしまい、その後、寺は多くの火災によって衰亡していった。それが一六七六年、および一七七三年に再建され、翌一七七四年に泉隠寺と改号されたという。私たちは、この寺の太古堂に宿泊させていただき、午前四時から極楽宝殿で行なわれた礼仏に参加した。太鼓（法鼓）の合図で皆が殿内に集まると、経文がハングル、そして漢文で読まれ、五体投地礼がなされ、最後に般若心経が読経された。極楽宝殿の仏後幀画は、阿弥陀如来を中尊とし、観音菩薩、勢至菩薩をはじめ菩薩・天・沙門などが多数描かれるもので、一七七六年の作成である。また、一柱門の額に書かれた「智異山泉隠寺」の書は、当寺を再建し、書の名人として知られた李匡師の書であるという。

燕谷寺と雙溪寺

燕谷寺は、智異山地域の南西部、求礼郡土旨面にある。その創建については不明の部分が多いが、統一新



燕谷寺 東浮屠

羅時代に成立した寺院と推定されている。一柱門を入って少し進むと、左手に統一新羅時代の三層石塔（六〇〇センチメートル）がある。一九六七年、これが修補された時、上層石の中から銅造如来立像（二三・五センチメートル）が発見されたという。さらに長い石段を進んでいくと、正面に大寂光殿がある。これが中心殿舎で、その向かって右手に冥府殿、三聖殿がある。大寂光殿の後ろの山を登っていくと、東浮屠（三〇〇センチメートル）および東浮屠塔碑（一二〇センチメートル）がある。東浮屠は、八角円形型のもので、華麗な装飾が美しく、門扉、宝輿、四天王像、迦陵頻伽像、八部衆像、獅子像などがレリーフされている。統一新羅時代のものだという。東浮屠塔碑は、碑身石を失い、亀趺と螭首のみが残存している。さらに北に登っていくと、北浮屠（三〇〇センチメートル）がある。こちらにも、門扉、宝輿、四天王像、迦陵頻伽像、八部衆像、などがレリーフされている。

高麗時代初期のものだという。どちらも誰の僧塔かわからないので、東浮屠、北浮屠と呼ばれている。他に未見であるが、西浮屠もあるという。

雙磎寺は智異山地域の南麓、慶尚南道河東郡花開面にあり、三神山雙磎寺という。この寺は、七二三年、三法の創建といい、当初は玉泉寺と号したが、八四〇年慧昭（真鑑禪師）によって雙谿寺（雙磎寺）と改号されたという。一柱門、金剛門、天王門を通って寺内に入ると、八詠楼が見えてくる。大きな建物で、一六四一年の建築である。慧昭（真鑑禪師）は、八〇四年に入唐して嵩山少林寺、終南山、魚山などで学び、八三〇年に帰国、八五〇年に雙磎寺で死去したという。彼は中国魚山の梵唄を新羅に伝え、その音階は八声であったという。雙磎寺は韓国仏教音楽の発祥地として知られており、八詠楼はその象徴的建物となっている。現在は仏教音楽CDなど土産物類が販売されている。八詠楼の裏面は金剛戒壇になっているが、これは旧戒壇で、新しい戒壇が建設されたため、今は殿舎が閉ざされている。

それを越えると、正面が大雄殿である。その殿前階段下には、著名な「真鑑禪師大空塔碑」（総高三六三センチメートル、碑身二一三センチメートル）がある。これは統一新羅

時代末期の学者である崔致遠の撰文によって、慧昭（真鑑禪師）の事蹟が記されたもので、光啓三年（八八七）七月の建立である。殿前階段上には、東側に五層石塔、西側に石燈がある。大雄殿は、一七世紀後期一八世紀初頃の建築で、四隅の軒を活柱で支えている。堂内は、天井、柱上部、梁などにびっしりと絵画、文様が描かれており、豪壮である。大雄殿の東には説禅堂、冥府殿、西には寂黙堂、羅漢殿があり、説禅堂と冥府殿との間の東よりには磨崖仏がある。これは大きな岩塊の前面を深く彫り出して仏龕とし、その中に如来坐像を浮彫にしたものである。如来像は頭部が大きく造形されており、手を拱手のようにして法衣の中に納めている。説明板にはブツダよりもむしろ僧に見える説明されているが、たしかに特異な像になっている。大雄殿の北側には、屋外に新しい金剛戒壇が造られており、雄大である。その向かって左手には華嚴



雙磎寺 磨崖仏

殿、三聖閣がある。華嚴殿には、經典の版木が一七四三点収蔵されている。また、宝物館が併設されており、同寺の文化財を見学することができる。

蓮華山玉泉寺

ここで智異山を離れ、朝鮮半島南端近くの慶尚南道固城郡の玉泉寺を見学した。同寺は、蓮華山道立公園の中にある寺院で、横に川が流れ、山が美しい。一柱門、天王門を通って寺内に入ると、滋芳楼があり、それを越えると大雄殿がある。一六五七年の再建であるという。堂内には阿弥陀三尊坐像の仏像が安置されているが、同行の池氏によると、仏後幀画は薬師如来を中尊とする画になっている。天井には鶴などが描かれている。大雄殿の東には探真堂、八相殿、西には寂黙堂、冥府殿がある。大雄殿の北側には羅漢殿があり、その向かって左手の、冥府殿の後ろに当たるところに、山靈閣、独聖閣、祖師殿、七星閣がある。羅漢殿の向かって右手には水の湧く泉があり、玉泉閣の名がつけられている。ここには、関羽（関帝）そしてその左右に関平、周倉を描いたとおぼしき幀画が安置されている。その右手には金堂がある。

同寺には、宝蔵閣と名付けられた宝物館がある。ここには、高麗時代の「壬子年銘飯子」（一二五二年）、



玉泉寺 山靈閣内の山神



玉泉寺 山靈閣と独聖閣

所蔵の文書、經典の版木など同寺の宝物が多数展示されており、充実している。幀画では、地藏菩薩幀画（一七四四年）、冥府十王幀画（一七四四年）とともに神衆幀画（一七八一年）があつて注目される。

伽倻山海印寺

伽倻山海印寺は韓国を代表する山岳寺院である。伽倻山は小白山脈の中にある山で、慶尚北道と慶尚南道にまたがっており、一帯が国立公園に指定されている。その南西麓の慶尚南道陝川郡伽倻面に海印寺がある。同寺は、順応およびその弟子の利貞によつて統一新羅の哀莊王三年（八〇二）に創建されたといひ、また九三〇年には希朗によつて重修がなされたという。一柱門、鳳凰門、解脱門と進んで九光楼を越え、正面が中心殿舎の大寂光殿である。堂内には、中尊の毘盧遮那仏坐像を中心に仏像そして幀画が安置され、天井、柱上部、梁には絵画、文様が極彩色で描かれている。大寂光殿の後ろに位置するのが著名な蔵経版殿で、ここに八万大蔵経（大蔵経の版木）が収められている。蔵経版殿は一四八八年の成立であるという。また、近年、大毘盧殿が造立され、堂内には

木造の同型双仏である毘盧遮那仏坐像二軀が安置されている。この像は像内の墨書に「中和三年」の文言があつたことから、中和三年（八八三）の造立であることが判明し、韓国現存最古の木像として注目されている。

私たちは、海印寺では清白堂に宿泊させていただき、大寂光殿で午後六時三〇分から行なわれた礼仏と、午前三時四〇分から行なわれた礼仏に参加した。同寺では、海印寺僧伽大学前学長の宗黙先生の御自坊に招待され、煎茶、抹茶をいただいた。日本に留学して文学博士の学位を取得された先生は日本語が堪能で、いろいろなお話をうかがうことができた。中でも、海印寺は律院、禪院、講院（僧伽大学）、念仏院の四者から構成されており、律院の僧は、今も戒律を守って午後には食事をしないというお話は特に印象深かった。

海印寺では、また白蓮庵、願堂庵を見学した。白蓮庵は一柱門から山道を東の方に登ったところにある修行場で、満天に輝く星がとても美しかった。願堂庵は西に登ったところにある庵で、統一新羅時代の多層石塔（二三八センチメートル）と石燈（二〇〇センチメートル）がある。前者は、塔身に十枚の尾蓋だけを積み重ねた個性豊かな多層塔である。海印寺の宝物館である聖宝博物館には、

大寂光殿出土の金銅如来立像二軀（統一新羅時代）、順応、利貞、崔致遠、義天、碧巖、龍城などの影像、大藏經の版木、七星図（一八九〇年）、甘露図（一二三三年）、阿弥陀極樂絵上図（一八九三年）、神衆図（一七七〇年）、地獄十王図（一九〇四年）、山神図（一九二二年）、祖師図（一八九二年）、那畔尊者像（二九センチメートル）などの展示があり、得るところが大きかった。

寺院の中の神

韓国の寺院には、さまざまな神がまつられている。もっとも一般的なのは山神で、多くの寺院に山神閣（山靈閣）が設置されて、虎のかたわらにいる山神の画像、もしくはその彫刻と画像の両者が安置されている。他の殿堂の一角に山神像が安置される場合も少なくない。また、七星閣では北斗七星がまつられる。独聖閣では那畔尊者がまつられるが、彼は阿羅漢果を得たが、一人天台山にて弥勒の出世を待つという尊者である。これら三閣が一つに統合される場合もあり、その時は三聖閣、三聖殿の名称が用いられることがある。さらに神衆壇で帝釈天および護法の神がまつられることがある。



海印寺 局司壇



海印寺 局司壇内の局司大神

今回の調査では、栢栗寺、泉隠寺、燕谷寺、雙溪寺で三聖殿（三聖閣）を見学することができた。玉泉寺では、山靈閣、独聖閣、七星閣がそれ

ぞれ独立して建ち並んでいたのが印象的であり、実相寺の七星閣や、海印寺の独聖閣もやはり独立してあった。また、玉泉寺宝蔵閣に展示されていた神衆幀画は神々を描いた幀画として強く脳裏に焼きついている。そうした中、私が最も注目したのは、海印寺の局司壇である。これは、同寺の鳳凰門の右手前方にある殿堂で、中に「局司大神」の画像がまつられていた。この神は女性の姿で描かれ、童子二人をともなっていた。この壇は、海印寺の伽藍地を守護する土地伽藍神をまつるとともに、山を司る山神をまつる壇であって、局司大神は正見母主であるという。

〔注〕

- 〔1〕 拙稿「仏教の伝来と流通」（新アジア仏教史Ⅱ 日本―『日本仏教の礎』 佼成出版社、二〇一〇年）。
- 〔2〕 鈴木靖民編『古代東アジアの王権と仏教―王興寺から飛鳥寺へ―』 勉誠出版、二〇一〇年。
- 〔3〕 瀬間正之「百済弥勒寺『金製舍利奉安記』」（青木周平先生追悼論文集刊行会編『青木周平先生追悼 古代文芸論集』 おうふう、二〇〇九年）。同「新出百済仏教関係資料の再照明」『上代文学』一〇四、二〇一〇年。有働智英「益山弥勒寺跡出土『金製舍利奉安記』について」『注釋史と考證』一、二〇〇九年。

文献紹介

＜海外文献紹介＞

私は二〇〇九年度から、一見真理子研究官（国立教育政策研究所国際研究協力部総括研究官）を代表とする科学研究費による共同研究に参加している。研究主題は「生涯発達能力を育む幼小連携のあり方に関する国際比較研究」であり、研究の目的は中国、台湾、韓国およびアメリカを対象として、幼小連携教育の実態調査と発展課題を明らかにすることにある。参加メンバーは松尾知明国研総括研究官、穴戸健夫愛知県立大学名誉教授、翁麗芳台北教育大学教授、霍力岩北京師範大学教授らである。そして、私の担当は韓国における幼小連携教育の調査研究である。

ここではそのために収集した基本文献の内、最新のものを選んで、翻訳／紹介する。使用した文献は韓国

幼児教育学会の機関誌である『幼児教育研究』に収録された、チソンエ論文である。執筆者であるチソンエ中央大学校教授は、この分野では早くから精力的に研究活動をされている第一人者である。韓国では幼小連携教育について関心は見せているものの、特筆するほど積極的に取り組まれているほどでは無く、しばらくは様子見といったところである。

こうした状況の中でこのチソンエ論文は、韓国における幼小連携教育研究の概要を知る上で、貴重な一編であるといつてよい。この論文を通して、韓国における幼小連携教育の現状を理解し、チソンエ教授との共同研究への発展を願って、本論考の紹介文とするものである。

（丹羽孝：2011.1.18）



＜幼児教育研究…2010、第30巻第2号、283-308＞

幼稚園—小学校 連携教育に対する幼稚園と小学校教師の認識及び実態比較

チソンエ (Chi,Sung-Ae: 中央大学校教授)

《要約》

本研究は幼稚園と小学校教師たちを対象として、幼稚園—小学校連携

教育に対する認識と実態を比較分析することに、その目的がある。研究対象者は幼稚園教師二五名、小学校

教師一九四名、総四一九名で、研究道具として質問紙を開発して、研究資料を収集した。収集された資料は χ^2 二乗検定とt検定によって分析した。研究結果、幼稚園—小学校連携教育に対する認識は、幼稚園教師と小学校教師間に有意な差異があることがわかった。幼稚園—小学校連携教育実態でも幼稚園と小学校間に有意な差異があることが明らかになった。

キーワード：生態学的転移 (ecological transition)

幼稚園—小学校連携教育 (Kindergarten-elementary school linkage education)

1. 序論

幼稚園を卒業して小学校へ入学するまでに経験する生態学的転移は、幼児が適応するべき課題に対面することになる。このような生態学的転移は、幼児の発達と同行する「適応の連続性」から、適応の問題が一時的な問題ではなく全生涯に持続的に影響を与え、上級学校

での学校適応と学業成就だけではなく、青少年期及び成人期の行動にまで影響を与える (LoCasale-Crouch, Mashburn, Downer, & Pianta, 2008 ; Rimm-Kaufman, & Pianta, 2001)。幼稚園から小学校への生態学的転移に伴う幼児の経験は、幼児期以後の全人発達に影響を与えると同じような観点は、幼稚園と小学校連携教育の必然性を後押ししているように思われる。

しかし教育の究極的な目標は人間の全人的な発達の追求だといえるので、幼稚園と小学校は教育風土、教育課程運営、教育方法、教育環境等いろいろな側面において差異がある (ハンセン, 2009)。特に幼稚園と小学校低学年は Piaget の認知発達によれば、満二歳から七歳までの発達段階に含まれるにもかかわらず、現行学校制度と行政的な理由によって分離運営されている機関において教育を受けているために、連携教育を計画して実行するには制限がある。幼稚園卒業後、幼児の小学校への進学は国民の憲法的義務で、定式的な公教育へ導入されるということである。だから政府がこれに対する準備段階として、さらには幼児たちの全人的で連続的な発達を支持するという側面から、また小学校の究極的な教育目標に到達するために、

組織的に幼稚園と小学校間連携教育体制を確立しなければならない。このような次元から教育科学技術部は、二〇〇八年度から入学基準日を現在の三月一日から一月一日に変更する、弾力的な入学年齢運営方法を導入して、小学校適用の問題に対備しようとしているようである (教育科学技術部, 2008)。これは年ごとに新学期になれば、幼児たちの小学校入学に関する問題が社会的課題となつてきたからである。しかしこのような入学年齢の弾力的な運営という断片的な制度の変化が、今小学校へ入学する児童の適応問題を解決して、小学校教育を効率的に運営するようにする代案策だと見なすには問題がある。また、国家水準の二〇〇七年改定幼稚園教育課程 (教育科学技術部, 2007) も、幼稚園と初等学校連携教育を重点方向として焦点をあわせて、幼稚園教育課程を運営するよう提示する等、幼稚園と初等学校連携教育の重要性を認定して、多角的な実践方案を模索しているが、未だ第一線の現場教師たちは幼稚園―小学校連携教育の難しさを訴えている (チソンエ, 2008)。

この間多様な側面から、幼稚園と小学校間の連携教育に関する研究が遂行されてきた。幼稚園と小学校連携教育に関する研究は、幼稚園と小

学校それぞれの立場から相手方教育機関の変化を追求する研究が主流だった (チュボンガン、イオクイム, 2005)。これらの研究は教育環境及び教育活動運営の側面から、小学校での変化を要求 (キムチャンボク, 1992 ; パクチャンオク, 1994 ; イテギョン, 1990) しようとする反面、教育制度及び行政的側面から幼稚園での変化 (キムチェボク, 1994 ; キムチャンボク, 2001 ; キムチャンボク, 2001) の必要性を強調しようとした。

この他に教育領域または教科目を中心に、幼稚園と小学校の連携教育方案を模索する研究で、幼稚園教育現場での役割遊びと小学校教育現場の役割遊び活動の実態を比較分析して、役割遊びを幼稚園と小学校で連携して適用することができる方案を提示した研究 (チソンエ, チョンヒョンジュ, イェンソン, パクユヨン, 2007) もある。それだけではなくて、一九八六年以後発表された幼稚園―小学校連携教育に関連した論文を対象に論文編数、研究主題と研究方法に焦点を置いた比較分析研究 (チソンエ, チョンデヒョン, イスンイム, ジョウンジョン, パクユヨン, ホンヒョニンイ, 2007) もまたおこなわれている。さらに幼稚園の幼児たちを対象にして友だち関係と教師―幼児関係、そして多重知能特性を把握して、同

一対象幼児たちが小学校に入学した後、彼らを追跡して幼児の小学校適応を分析したチヨデヒョンとチソンエ（2006）は、幼児の社会性及び知的特性が小学校一学年適応と関係があることを報告したものである。

このような研究は幼児の小学校適応理解及び幼稚園と小学校連携教育方案に対する教育的示唆点を提供しているが、多様な側面から幼稚園と小学校で実施している幼稚園―小学校連携教育の実態の差異点を提示し、同時に幼稚園と小学校連携教育に対する幼稚園と小学校教師たちの認識の差異を示していないという制限点がある。幼稚園と小学校連携教育に対する幼稚園と小学校教師たちの認識と、幼稚園で実施している幼稚園―小学校連携教育の実態についての情報は、効率的な幼稚園幼稚園と小学校連携教育を計画して実践する上での基礎となるので、幼稚園―小学校連携教育の深化のためには基本的な遂行されるべき分野である。このような重要性に立脚して最近、幼児の小学校準備度に対する幼児教育機関教師と学父母及び小学校教師間の認識を比較した研究（チソンエ、チヨデヒョン、ジョンヒュウン、アンチソン、パクウンヨン、2006）と幼稚園―小学校連携教育に対する教師と学父母の認識を比較した研究（チ

ヤンヨンスク、ユスンヨン、2002）がある。しかし、これらの研究（チヤンヨンスク、ユスンヨン、2002；チソンエ他、2006）は、幼稚園―小学校連携教育に対する幼稚園教師と小学校教師たちの認識と実態を体系的で組織的に明らかにしていない。この他に幼稚園―小学校連携教育に対する我が国とアメリカの幼稚園教師と小学校教師の認識を比較した研究において、ファンヘジョン（2009）はアメリカと我が国小学校教師間の幼稚園―小学校連携教育に対する認識では差異がないが、我が国とアメリカの幼稚園教師たちの間には、幼稚園―小学校連携教育に対する認識が有意差があることを発表した。しかしファンヘジョン（2006）の研究は幼稚園―小学校連携教育に対する、我が国とアメリカの教師たちの認識についての情報は提供されているが、我が国幼稚園と小学校で提供されている幼稚園―小学校連携教育に対する実態を分析していないことに問題がある。

幼稚園と小学校連携教育体制を確立するためには、教育の質は教師の質を越えることはできないので、教育現場の《場》である幼稚園教師と小学校教師の連携教育に対する認識と実態を比較分析してみる必要がある。又、幼稚園―小学校連携教育は

幼稚園教師だけではなく、小学校教師も考慮しなければならない教育的課題なので、共通に関心を持って連携教育の方案を模索しなければならない。このような連携教育体系が構築されるとき、幼稚園から小学校への転移に伴う児童の不応問題をも最小化して、幼児教育と小学校の効果を同時に極大化することができるだろう。PiantaとKraft-Sayre（2003）そしてSmolkin（2002）も、成功的な幼稚園―小学校連携教育を計画するためには「家族―学校連携」、「幼児―学校連携」、「地域社会及び現場機関連携」側面に区分して幼稚園教師、小学校教師、学父母、地域社会の人たち、行政官、社会福祉関係者等が包含された地域別「連携教育委員会」を構成して、体系的で組織的な連携教育を計画しなければならないと強調していた。言い換えれば、幼稚園―小学校連携教育は幼稚園でだけ計画して運営することではなく、幼稚園と小学校が相互連携して、連続性と系列性を維持するよう計画して運営するべきものだということである。

従って、本研究は幼稚園だけではなく小学校教師たちの幼稚園―小学校連携教育に対する認識調査と同時に、幼稚園と小学校で行われている連携教育実態を比較して、幼稚園―小学校連携教育体制構築に基礎情報

を提供することを目的とした。これに本研究では幼稚園と小学校連携教育関連文献分析を基礎として研究道具である設問紙を開発して、次の幼稚園と小学校教師たちを対象に、連携教育に対する認識と実態把握のための調査を実施した。

このような目的のために、次の研究問題を設定した。

第一、幼稚園―小学校連携教育理解及び必要性に対する認識は、幼稚園教師と小学校教師間にどのような差異があるのだろうか？

第二、幼稚園及び小学校教育課程に対する認識は、幼稚園教師と小学校教師間にどのような差異があるのだろうか？

第三、幼稚園―小学校連携教育方法に対する認識は、幼稚園教師と小学校教師間にどのような差異があるのだろうか？

第四、幼稚園―小学校連携教育活動実態は、幼稚園と小学校間にどのような差異があるのだろうか？

第五、幼稚園―小学校連携教育関連父母教育実態は、幼稚園と小学校間にどのような差異があるのだろうか？

II. 研究方法

一．研究対象

研究対象は年と農漁村地域に区分して、公・私立幼稚園と小学校を抽出して、票集した三〇四カ所の幼稚園と三〇〇カ所の小学校に勤務している三〇四名の幼稚園教師と、三〇〇名の小学校教師を対象に、幼稚園と小学校連携教育に対する実態と認識を徴させるために、設問紙を配布した。研究対象の抽出は制限抽出による群落票集を利用して、一時的に地域を都市と農漁村に区分した後、地域別に小学校および幼稚園を区分して抽出した。しかし、私立小学校は大部分都市都市に偏在していて、国公立にくらべて学校数比率が低いので、これを根拠に抽出した。幼稚園教師たちを対象に三四〇部の設問紙を配布して、二五一部（八三％）を回収したが、表記が落ちていたり、重複表記によって研究資料として活用できない設問紙二六部を除外して、最終研究資料として活用した設問紙は二二五部（七四％）だった。また小学校教師を対象として三〇〇部の設問紙を配布して、二二〇部（七三％）を回収したが、表記が抜けていたり、重複表記によって研究資料と

して活用できない設問紙二六部を除外して、最終研究資料として活用した設問紙は一九四部（六五％）だった。従って最終研究対象幼稚園教師は二二五名で、小学校教師は一九四名、総四一九名だった。研究対象背景分布は表1に提示した如くである。

研究対象幼稚園教師は二三五名で、大都市に六二・二％、そして農漁村に三七・八％が勤務していて、国立幼稚園に四三・六％、そして私立幼稚園に五六・四％が勤務していた。また研究対象幼稚園教師たちの経歴は七年以上（四四・〇％）、三～六年（四〇・九％）、一～二年（一五・一％）の順に比率が高かった。学歴は四年制大学卒（四四・九％）、二年制大学卒（三二・二％）、大学院卒以上（二一・三％）、その他（二・八％）の順の比率が高かった。「満五歳児クラス」担任経歴は一～二年（三八・二％）、三～六年（二六・七％）、七年以上（二四・四％）、無し（二〇・七％）の順に高かった。

反面、研究対象小学校教師は一九四名で、大都市に五一・五％、農漁村に四八・五％が勤務していて、大部分国立小学校（九〇・七％）に勤務していて、私立小学校には九・三％だけ勤務していた。また、研究対象小学校教師たちの経歴は七年以上（七三・二％）、三～六年（一九・

〈表 1〉 研究対象幼稚園および小学校教師の背景分布

区 分		幼稚園教師 N (%)	小学校教師 N (%)
所 在 地	大 都 市	140 (62. 2)	100 (51. 1)
	農 漁 村	85 (37. 8)	94 (48. 5)
勤 務 地	国 公 立	98 (43. 6)	176 (90. 7)
	私 立	127 (56. 4)	18 (9. 3)
経 歴	1 - 2 年	34 (15. 1)	14 (7. 2)
	3 - 6 年	92 (40. 9)	38 (19. 6)
	7 年 以 上	99 (44. 0)	142 (73. 3)
学 歴	2 年制大学卒	72 (32. 0)	
	4 年制大学卒	101 (44. 9)	162 (83. 5)
	大学院卒以上	48 (21. 3)	32 (16. 5)
	そ の 他	4 (1. 8)	
担 任 経 歴 幼稚園 5 歳児クラス 小 学 校 1 学 年	無 し	24 (10. 7)	42 (21. 6)
	1 - 2 年	86 (38. 2)	98 (50. 5)
	3 - 6 年	60 (26. 7)	32 (16. 5)
	7 年 以 上	55 (24. 4)	22 (11. 4)
全 体		225 (100)	194 (100)

六%)、一～二年(七・二%)であつて、学歴は大学校卒(八三・五%)、大学院卒以上(一六・五%)で、「小学校一学年」担任経歴は一～二年(五〇・五%)、無し(二一・六%)、七年以上(二一・四%)の比率順に高かった。

二．調査方法

研究対象として票集された幼稚園教師たちと小学校教師たちに、研究者および研究補助さやが電話で研究

の目的を説明して了解を求めた後、E-mailまたは郵便で設問紙を教師たちに発想して、回収して、認識と実態調査のための研究材料を収集した。設問紙は二〇〇七年一月一日から二月三十一日までの一七日間配布して、二〇〇八年一月二日から一月三日まで回収した。

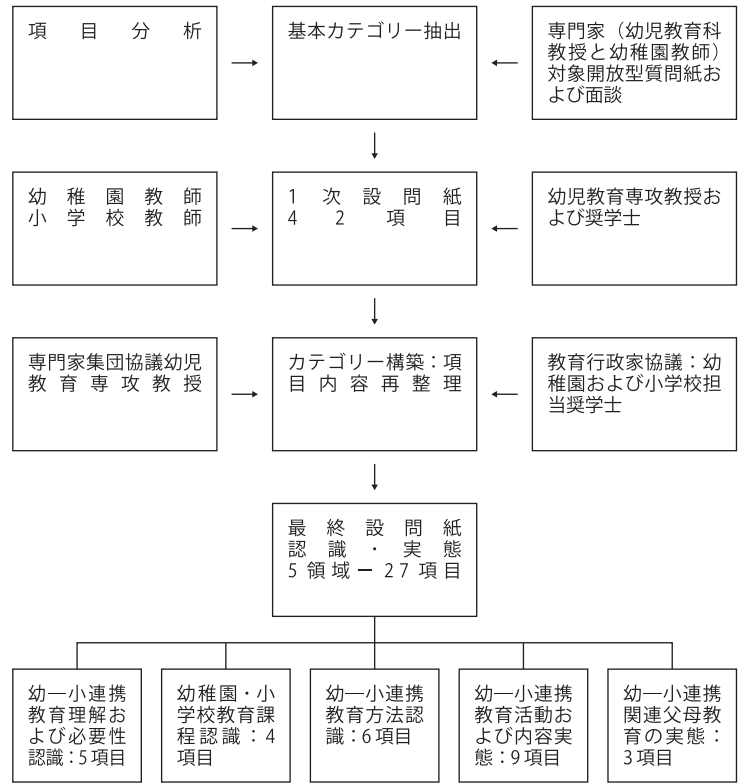
三．研究道具

一) 設問紙開発過程

本研究では設問紙を開発して、研

究資料を収集する道具として使用した。質問紙は〈図 1〉のように幼稚園と小学校連携教育の現況と実態、そして連携教育に対する幼稚園教師の認識を把握するために開発した。最初、Pianta と Kraft-Sayre (2003) の研究から基本カテゴリーを抽出して、同時に先行文献 (Pianta & Cox, 2005 ; Rimm-Kaufman & Pianta, 2001 ; Smolin, 2005) および研究 (キムチャンボク、チェヨンジヨル、2002 ; チョデヒョン、チソンエ、2006a ; チソンエ他、2006) を体系的に分析して、幼稚園と小学校連携教育実態と、連携教育に対する幼稚園教師の認識を把握することができるカテゴリーと内容を整理した。同時に専門家が幼児教育専攻教授五名、幼稚園教師一〇名と小学校一学年担任教師一〇名を対象に、開放型質問と面談を通じて、基本カテゴリー関連内容を整理した。これを基礎として一次試案設問紙全四二項目を完成した。一次試案設問紙に関連して幼児教育専攻大学教授一〇名、幼児及び小学校担当奨学士一〇名、幼稚園教師二五名と小学校教師二五名を対象に、各項目の適切性と理解程度を評価するようにした。一次設問紙項目内容の適切性と理解度について、五点(全くそうではないの一点からその通り五点)で評定するようにした。四・〇以下と評定

【図1】設問紙 開発過程



された項目を抽出して、作成または修正補完して、最終的に五つの領域に区分された設問紙を完成した。連携教育に対する教師たちの認識と関連した項目は、「幼稚園―小学校連携教育理解および必要性」、「幼稚園教育課程と小学校教育課程」、「幼稚園―小学校連携教育方法」の三つの領域に区分して構成して、幼稚園―小学校連携教育の実態と関連した項目は、「幼稚園―小学校連携教育活動および

内容」、そして「幼稚園―小学校連携教育関連父母教育」の二領域に区分されて、最終設問紙は全五領域、二七項目で構成した。設問紙の全般的開発過程は〈図1〉の如くである。

二）設問紙信頼度

設問紙の各領域の総点との相関係数の把握を通じて信頼度を求めようと、Cronbachアルファ係数を利用して、分析した。本研究の信頼度は二

〈表2〉設問紙領域／内容と信頼度

領域／内容	信頼度係数
連携教育理解および必要性：幼一小連携教育の必要性および難しさ、実行の当為性、小学校適用に対する認識	.864
幼稚園および小学校教育課程：相手方教育課程に対する認識、教育課程連携の効率性および重複に対する認識	.867
連携教育方法：教師および学父母の協議、教師間協議、地域社会援助、教育計画内容連携、各教室環境に対する評価認識	.860
連携教育活動および内容：幼一小教師交流現況、幼一小連携活動準備のための試み経験、教室訪問、遊び場使用、行事参加程度、相手方連携教育活動情報取得程度、連携教育活動出処および内容、相手方教育特性反映程度	.877
連携教育関連父母教育：連携教育関連個別面談、小学校適応父母教育、学父母案内行事構成実態	.901
	.873

二五名の幼稚園教師と一九四名の小学校教師が回答した結果を分析して、算出した。分析結果、質問紙の項目の全体信頼度は.873と示されて、設問紙下位領域別信頼度係数は、表2に示したとおりである。

四．資料分析

幼稚園―小学校連携教育に対する教師の認識と実態を把握するために

収集された資料は、設問項目に応じて頻度と百分率そして平均と標準偏差を求めて、連携対象の背景変因によってどのような差異があるかを調べるために、 χ^2 二乗検定と、 t 検定を実施して、集団間の差異を分析した。資料処理はSPSS12.0プログラムを利用した。

Ⅲ．研究結果

幼稚園—小学校連携教育に対する幼稚園教師と小学校教師の認識と実態を比較分析した研究結果を、研究問題にもとづいて提示すれば次のようになる。

一．幼稚園と小学校連携教育の理解および必要性に対する認識

幼稚園—小連携教育に対する理解と必要性に対する幼稚園と小学校教師たちの認識の差異を分析した結果は、表3に提示した如くである。全体的に幼稚園教師と小学校教師は、五評定中二・五二で、幼稚園—小連携教育に対する理解と必要性を、とても低く認識していることが明らかになった。また、下位領域別分析結果が表3に提示してあるように、幼稚園教師 ($M=3.43$ 、 $SD=.67$) が、小学校教師 ($M=3.11$ 、 $SD=.80$) より有意で、幼

＜表3＞幼稚園—小 連携教育理解と必要性

	対 象	N	M	SD	t
幼稚園—小連携教育の必要性	幼稚園教師	225	3.43	.67	4.45***
	小学校教師	194	3.11	.80	
	全 体	419	3.28	.75	
幼稚園—小連携教育実行の当為性	幼稚園教師	225	2.01	.69	1.57
	小学校教師	194	1.92	.53	
	全 体	419	1.97	.62	
小学校適応の差異	幼稚園教師	225	2.32	.74	.66
	小学校教師	194	2.27	.72	
	全 体	419	2.30	.72	
全 体		419	2.52	.69	

*** $p < .001$

小連携教育の必要性を高く認識することが示された ($t = 4.45$ 、 $p < .001$)。また、幼稚園—小連携教育を実行するべきであるという当為性を調査した結果、五評定中全体平均一・九七点 ($SD=.62$) で、全体教師たちは連携教育実行の当為性をとても低く認識している、これは幼稚園教師 ($M=2.01$ 、 $SD=.69$) と小学校教師 ($M=1.92$ 、 $SD=.53$) 間に統計的に有意な差異が無かったことを示していた ($t=1.57$ 、 $p>.05$)。最後に、児童の小学校適応に公立と

私立幼稚園卒業による差異があるかを問うた設問に対する回答平均は、二・三〇点が示されて、児童の小学校適応は公立と私立幼稚園卒業による差異がないことを、全体教師は認識していた。このような認識は、幼稚園と小学校教師間に有意な差異がないことを示していた ($t=.66$ 、 $p>.05$)。

反面、幼稚園と小学校連携教育の難しさと、児童の小学校適応の難しさに対する教師たちの認識を調査した。まず、幼稚園—小連携教育の難しさを聞いた項目に対しては、相互の教育課程に対する教師たちの理解不足 (三四・一%)、制度上の断絶 (二七・二%)、教授学習方法の差異 (一九・五%)、学習環境の差異 (一九・二%) の順で回答した。幼稚園教師は、相互の教育課程に対する理解不足 (四〇・五%) にとても多い回答があった反面、小学校教師は制度上の断絶 (二〇・四%) に一番多く回答している、二つの集団間に、統計的に有意な差異が示された (χ^2 二乗9.74、 $p>.05$)。また、児童の個人的特性 (三一・五%)、基礎学習能力不足 (五・七%)、その他 (一・二%) の順に回答があった。しかし、このような結果は児童の個人的特性 (四七・九%) に一番多く回答している、二つの集団間に統計的に有意な差異が示された (χ^2 二乗49.61、 $p<.001$)。

〈表4〉 幼一・小 連携教育および児童の小学校適応の難しさ

	対 象	N %	教授学習方法	学習環境差異	制度上の断絶	相手教育課程	χ
幼 一 小 連携教育 の難しさ	幼稚園	225 (53.7)	41 (19.8)	32 (15.5)	50 (24.2)	84 (40.5)	9.74*
	小学校	194 (46.3)	37 (19.1)	45 (23.2)	59 (30.4)	53 (27.3)	
	全 体	419 (100)	79 (19.5)	77 (19.2)	109 (27.2)	37 (34.1)	
	対 象	N %	児童の個人的特性	基礎学習能力不足	新しい環境の不応	その他	
小 学 校 適 応 の 難 しさ	幼稚園	225 (53.7)	39 (17.3)	17 (7.6)	168 (74.7)	1 (0.4)	49.61***
	小学校	194 (46.3)	93 (47.9)	7 (3.6)	90 (46.4)	4 (2.1)	
	全 体	419 (100)	132 (31.5)	24 (5.7)	258 (61.6)	5 (1.2)	

* p<.05 *** p<.001

二．幼稚園および小学校教育課程に対する認識
幼稚園と小学校教師たちを対象として、相手方教育課程を認識している程度を調査した。

〈表5〉 幼稚園と小学校教育課程に対する認識

	対 象	N	M	SD	t
相手方教育課程に対する認識	幼稚園	225	2.56	.59	5.17***
	小学校教師	194	2.27	.52	
	全 体	419	2.42	.58	
相手方教育課程認識程度による連携教育の効率性	幼稚園	225	3.42	.66	2.27***
	小学校教師	194	3.29	.53	
	全 体	419	3.36	.61	
相手方教育目的、目標、教授活動に対する認識度	幼稚園	225	2.51	.66	5.24***
	小学校教師	194	2.15	.71	
	全 体	419	2.34	.70	
幼稚園と小学校教育課程重複性	幼稚園	225	2.30	.72	.97
	小学校教師	194	2.24	.64	
	全 体	419	2.27	.69	
全 体		419	2.60	.69	

* p<.05 *** p<.001

調査分析結果が表5に提示されているように、全体教師たちは五評定基準で平均二・六〇(SD=.66)で、相手方教育課程をほとんど認識していないことが明らかになった。下位項目別分析結果を調べてみると、全体教師たちの相手方の教育課程に対する認識程度がとても低調であつて(M=2.42, SD=.58)、幼稚園教師(M=2.56, SD=.59)が、小学校教師(M=2.27, SD=.52)より統計的に有意な差異で、相手方教育課程をより多く認知していることが明らかになった(M=5.17, p<.001)。また、全体教師たちは五評定中平均三・三六点(SD=.61)で、相手方教育課程を知っていることが、連携教育の効率性支援に役立つことを認識することを示している。幼稚園教師(M=3.42, SD=.66)が、小学校教師(M=3.29, SD=.53)より有意に高く、その重要性を認識していることを示している(t=2.27, p<.05)。それだけではなく、全体的に教師たちは平均二・三四点(SD=.70)で相手方の教育目的目標、教授活動に対する認知点数が示している認知度が低くて、二つの集団を比較したとき、幼稚園教師(M=2.51,

SD=.66) が小学校教師 (M=2.15、SD=.71) より相手方の教育目的、目標、教授活動について、統計的に有意な差異を高く認知していることが明らかになった ($t=5.24$, $p<.001$)。幼稚園と小学校教育課程が重複しているかを調査した結果、平均二・二七点 (SD=.69) を示した。このような結果は、幼稚園と小学校教師たちはそれぞれの教育課程の内容が重複していないと認識していることと見ることができる。このような認識は幼稚園教師 (M=2.30、SD=.72) と、小学校教師 (M=2.24、SD=.64) 間に有意な差異がなことを明らかにしている ($t=.97$, $p>.05$)。

三．幼稚園—小学校連携教育方法に対する認識

全体教師たちを対象として幼稚園—小学校連携教育方法を認知して、認識する程度を調査した。調査結果が表6に提示されたように、全体教師たちはある程度連携教育方法を認知しているか (M=3.00、SD=.65) が明らかになった。下位項目別に調べてみると、まず教師たちは幼稚園から小学校への成功的な転移および連携教育方法を構築するために、教師と学父母が会って協議することが必要だと認識していることを示しているが、必要性の程度は五評定中二・

九五で普通程度だった。このような必要性の認識は幼稚園教師 (M=3.04、SD=.70) が、小学校教師 (M=2.85、SD=.55) よりも統計的に有意が高いことが示された ($t=3.09$, $p<.01$)。また教師たちは平均三・一三点 (SD=.59) で、幼稚園から小学校への成功的転移のために、幼稚園教師と小学校教師の論議および情報共有が必要だと認識していた。このような傾向は幼稚園教師 (M=3.32、SD=.59) が、小学校教師 (M=3.13、SD=.58) より有意

意味だと認識していることが示された ($t=3.31$, $p<.001$)。また教師たちは平均三・〇五点 (SD=.64) で、幼稚園から小学校への成功的な転移のために、地域社会の援助が必要だと認識していることを示して、幼稚園教師 (M=3.20、SD=.61) が、小学校教師 (M=2.88、SD=.64) より幼稚園教師において地域社会の援助の必要性を、有意に高く認識していることが明らかだった ($t=5.22$, $p<.001$)。

〈表6〉 幼—小 連携教育方法に対する認識

	対 象	N	M	SD	t
教師と学父母間協議	幼稚園	225	3.04	.70	3.09***
	小学校教師	194	2.85	.55	
	全 体	419	2.95	.64	
幼稚園教師と小学校教師間協議および情報共有	幼稚園	225	3.32	.59	3.31***
	小学校教師	194	2.85	.58	
	全 体	419	2.95	.59	
地域社会援助	幼稚園	225	3.20	.61	5.22***
	小学校教師	194	2.88	.64	
	全 体	419	3.05	.64	
教育活動計画時幼稚園 (小学校) 教育内容連携	幼稚園	225	3.35	.65	1.03
	小学校教師	194	3.29	.58	
	全 体	419	3.32		
幼稚園と類似した小学校1学年教室環境構成	幼稚園	225	2.36	.88	3.94***
	小学校教師	194	2.64	.57	
	全 体	419	2.49	.76	
全 体		419	3.00	.65	

** $p<.01$ *** $p<.001$

〈表7〉 効率的な 幼—小 連携教育方法構築のための要素

対 象	N (%)	教育課程	教育環境	教授学習方法	教師の資質	χ^2
幼稚園	225 (53.7)	68 (30.2)	51 (22.7)	90 (40.0)	16 (7.1)	5.00
小学校教師	194 (46.3)	68 (35.1)	55 (28.3)	62 (32.0)	9 (4.6)	
全 体	419 (100)	136 (32.4)	106 (25.3)	152 (36.3)	25 (6.0)	

表6に提示されたように、教師たちは平均三・三二点 ($SD=62$) で、幼稚園から小学校への成功的な転移のために教育活動時、幼稚園（小学校）教育内容との連携が必要だと認識していることを示しているが、

幼稚園教師 ($M=3.35$, $SD=65$) と小学校教師 ($M=3.29$, $SD=58$) 間に、統計的に有意な差異は示されなかった ($t=1.03$, $p>0.05$)。また、全体教師たちは幼稚園と類似した小学校一学年教室環境を構成するべきだということに関して、とても低調にしか認定していないことが明らかになった ($M=2.49$, $SD=76$)。しかし、小学校教師 ($M=2.64$, $SD=57$) が、幼稚園教師 ($M=2.36$, $SD=88$) より有意味に、幼稚園と小学校教室環境を類似して構成する必要性を高く認定してゐた ($t=3.94$, $p<0.01$)。

本研究では効率的な幼—小連携教育方法を構築するために、一番最初に考慮すべき要素について調査した。調査結果が、表7にされているように、教師たちは効率的な幼—小連携教育方法を構築するために、一番最初に考慮すべき要素は教授学習方法 (三六・三%)、教育課程 (三二・四%)、教育環境 (二五・三%)、教師の資質 (六・〇%) の順に認識されていた。幼稚園教師は教授学習方法 (四〇・〇%) に一番多く回答し

た反面、小学校教師は教育課程 (三五・一%) と回答していて、二つの集団間に統計的な有意差は見られなかった (χ^2 二乗 $=200$, $p>0.05$)。

四. 幼稚園—小学校 連携教育活動と内容

幼稚園—小学校連携教育活動実態を調査しようと、最初に幼—小連携教育のための事項として相手方教師との交流程度と教師が連携教育活動を計画して、施行するために準備した試みまたは経験の実態を調査した。調査分析結果は、表8に示したとおりである。

全体教師たちは幼稚園（小学校）教師との交流回数を全くない (五九・七%)、一〜二回 (三二・〇%)、三〜四回 (六・二%)、五回以上 (二・一%) の順に回答した。幼稚園教師 (五六・〇%) と小学校教師 (六三・九%) すべてが全くないに一番多く回答して、二つの集団間に統計的に有意な差異を示さなかった (χ^2 二乗 $=3.70$, $p>0.05$)。また連携教育活動を計画して試行するために遂行した、教師たちの試図および経験を調査した。調査結果では教育課程編成 (五四・二%)、教授学習方法 (一九・三%)、教育環境 (一八・六%)、現職教育参加 (七・九%) の順で、幼—小連携教育活動を準備するための試図および

〈表8〉幼—小 連携教育活動準備のための教師の経験

	対 象	N%	全くない	1-2回	3-4回	5回以上	χ^2
幼稚園—小学校教師との交流	幼稚園	225(53.7)	126(56.0)	81(36.0)	13(5.8)	5(2.2)	3.70
	小学校教師	194(46.3)	124(63.9)	53(27.3)	13(6.7)	4(2.1)	
	全 体	419(100)	250(59.7)	134(32.0)	26(6.2)	9(2.1)	
連携教育活動試行と関連経験	幼稚園	225(46.3)	108(48.0)	45(20.0)	27(12.0)	45(20.0)	14.52**
	小学校教師	194(46.3)	119(61.3)	33(17.0)	6(3.1)	36(18.6)	
	全 体	419(100)	227(54.2)	78(18.6)	33(7.9)	81(19.3)	

** $p<0.1$.

びおよび関連経験があると回答した。幼—小連携教育活動を計画するために、幼稚園教師 (四八・〇%) と小学校教師 (六一・三%) すべてが、教育課程編成を一番多く試みている

と回答した。その次に幼稚園教師は教育環境（二〇％）と、教授学習方法（二〇％）に多く回答した反面、小学校教師は教授学習方法（一八・六％）に回答して、統計的に有意差があった（ χ^2 乗=4.52、 $p<0.1$ ）。

教師たちが担任している幼児が小学校教室を、小学校児童が幼稚園教室を訪問するようにした教育活動回数を調査した結果は、表9に提示されたように、全体教師たちは全くない（五一・八％）、一〜二回（三二・〇％）、五回以上（八・六％）、三〜四回（七・六％）の順に回答した。このような結果は幼稚園教師と小学校教師間の二つの集団間に、統計的に有意な差異はなかった（ χ^2 乗=3.73、 $p>0.5$ ）。本研究結果、幼稚園と小学校教室を訪問して、相互に連携できるようにする連携教育活動がほとんど行われていないことが明らかになった。また、教師たちが担任している幼稚園の幼児が小学校の遊び場、または小学校の児童が幼稚園の遊び場を使用した回数を調査した。調査の結果、全くない（四七・〇％）、一〜二回（二八・四％）、五回以上（一六・五％）、三〜四回（八・一％）の順に回答した。幼稚園教師（四六・二％）、小学校教師（四七・九％）すべてが全くないに一番多く回答していて、二つの集団間に統計的な有意

差があった（ χ^2 乗=9.02、 $p<0.5$ ）。それだけではなくて、教師たちが担任している幼児または小学校児童が、小学校または幼稚園行事に参加した回数を調査した。調査分析の結果、全くない（五四・五％）、一〜二回（二七・二％）、三〜四回（一〇・七％）、五回以上（七・六％）順に回答した。このような結果は、幼稚園教師（四八・〇％）と小学校教師（六一・八％）すべてが全くないに一番多く回答していて、二つの集団間に統計的に有意な差異があった（ χ^2 乗=4.21、 $p<0.1$ ）。幼稚園と小学校教師たちを

対象として、幼稚園の幼児たちが功利的に、小学校にうまく適応できるような援助する教育活動に関する情報を、収集しようという試図を調査した。調査分析結果は表9に提示した。教師たちは成功的な小学校転移のための情報を取得する試図は、ない（四七・四％）よりもある（五一・三％）により多く回答した。また幼稚園教師（六〇・〇％）と小学校教師（四三・三％）すべて「ある」に多く回答していて、二つの集団間に統計的に有意差があった（ χ^2 乗=11.64、 $p<0.01$ ）。また教師たちは幼—小連携教育活動のため日本や書籍（三五・二％）、インターネット資料（三二・四％）、研修（二二・八％）、その他（二二・三％）学会やセミナー（七・

三％）の順に多く参考にすることがわかった。幼稚園教師は本や書籍（三五・六％）に一番多く回答した反面、小学校教師は本や書籍（三四・五％）とインターネット資料（三四・五％）に一番多く回答して、二つの集団間に統計的な有意差はなかった（ χ^2 乗=2.96、 $p>0.5$ ）。

同時に幼稚園と小学校教師たちが小学校にうまく適応するようにするために、幼児たちと児童たちに教える教育活動内容を調査した。調査結果、社会適応のための内容（四六・八％）、習慣および生活態度と関連した準備（七・四％）、運動能力向上（二・四％）の順に回答した。幼稚園教師（四三・一％）と小学校教師（五一・〇％）すべて、社会適応のための内容に一番多く回答していて、二つの集団間に、統計的な有意差が示された（ χ^2 乗=23.92、 $p<0.01$ ）。

幼稚園と小学校教師たちを対象に、幼—小連携教育活動を運営する際に、相手方、即小学校および幼稚園教育の特性を反映する程度を調査した。分析結果は表10に提示したように、全体教師たちは五評定中平均二・二三（ $SD=0.85$ ）で、幼—小連携教育のために幼稚園（小学校）教育の特性を反映することを示している。このような結果は、相手方教育の特性を反映する程度がとても低くて、こ

〈表9〉 幼一小 連携教育活動・内容

	対 象	N %	全無	1-2回	3-4回	5回以上	χ^2	
幼稚園（小学校）教室訪問	幼稚園	225(53.7)	111(49.3)	78(34.7)	14(6.2)	22(9.8)	3.73	
	小学校教師	194(46.3)	406(54.6)	56(28.9)	18(9.3)	14(7.2)		
	全 体	419(100)	217(51.8)	134(32.0)	32(7.6)	36(8.6)		
幼稚園（小学校）インターネット使用	幼稚園	225(53.7)	104(46.2)	55(24.4)	25(11.1)	41(18.3)	9.02*	
	小学校教師	194(46.3)	93(47.9)	64(33.0)	9(4.6)	28(14.5)		
	全 体	419(100)	197(47.0)	119(28.4)	34(8.1)	28(14.5)		
幼稚園（小学校）活動や行事参加	幼稚園	225(53.7)	108(48.0)	50(22.2)	41(18.2)	26(11.6)	43.21***	
	小学校教師	194(46.3)	120(61.8)	64(33.0)	4(2.1)	6(3.1)		
	全 体	419(100)	228(54.5)	114(27.2)	45(10.7)	32(7.6)		
	対 象	N %	ある	ない			χ^2	
小学校転移教育活動情報取得	幼稚園	225(53.7)	135(60.0)	90(40.0)			11.64***	
	小学校教師	194(46.3)	84(43.3)	110(56.7)				
	全 体	419(100)	219(52.3)	200(47.7)				
	対 象	N %	本	インターネット	学会参加	研修	その他	χ^2
幼一小 連携教育活動出処	幼稚園	135(61.6)	49(35.6)	42(31.1)	12(8.9)	19(14.1)	14(10.3)	2.96
	小学校教師	84(38.4)	29(34.5)	29(34.5)	4(4.8)	9(10.7)	13(15.5)	
	全 体	219(100)	77(35.2)	1(32.4)	16(7.3)	28(12.8)	27(12.3)	
	対 象	N %	小先行学習	社会適応	身体運動	自己主導的学習	習慣生活態度	χ^2
小学校適応のための教育活動内容	幼稚園	135(61.6)	49(35.6)	42(31.1)	12(8.9)	19(14.1)	14(10.3)	23.92***
	小学校教師	84(38.4)	29(34.5)	29(34.5)	4(4.8)	9(10.7)	13(15.5)	
	全 体	219(100)	77(35.2)	1(32.4)	16(7.3)	28(12.8)	27(12.3)	

* $p < .05$ *** $p < .001$

〈表10〉 幼一小 連携教育活動計画に 相手方教育課程の反映程度

対 象	N (%)	M	SD	t
幼稚園	225	2.25	.83	
小学校教師	194	2.20	.88	.62
全 体	419	2.23	.85	

のような傾向は幼稚園教師（ $M=2.25$ 、 $SD=.83$ ）と小学校教師（ $M=2.20$ 、 $SD=.88$ ）間に統計的に有意さはなかった（ $t=.62$ 、 $p>.05$ ）。

五、幼稚園—小学校連携教育関連父
母教育実態
幼稚園と小学校教師たちを対象に、
幼一小連携教育と関連する父母教育

について調査した。調査結果は表11
に示すように、まず成功的な小学校
適応のために、学父母の集まりまた
は個別面談を実施した回数を調査し

た。全体教師は一～二回（六六・一％）、全くない（二二・四％）、三～四回（六・七％）、五回以上（四・八％）の順に回答した。幼稚園教師（五七・四％）と小学校教師（七六・四％）すべてが一～二回に一番多く回答していて、二つの集団間に統計的な有意差があった（ χ^2 二乗＝27.12、 $p<.001$ ）。また幼稚園と小学校教師たちが成功的な小学校適応のために、学父母間の面談を提供した回数を調査した。全体的に教師たちは一～二回（五三・二％）、全くない（三六・〇％）、三～四回（七・九％）、五回以上（二・九％）の順に回答した。幼稚園教師は全くない（四五・三％）に一番多く回答している反面、小学校教師は一～二回（六三・八％）に一番多く回答していて、二つの集団間に統計的に有意な差異があることを示した（ χ^2 二乗＝20.58、 $p<.001$ ）。さらに、成功的な小学校転移のために、学父母用案内冊子をつくって見た経験を調査した。調査分析結果、研究対象の教師たちは全くない（五八・九％）、一～二回（三六・三％）、三～四回（二・三％）、五回以上（一・五％）の順に回答した。このような結果は、二つの集団間に統計的な有意差があることを示している（ χ^2 二乗＝9.83、 $p<.05$ ）。

〈表11〉 幼一小 連携教育関連父母教育

	対 象	N %	無	1-2 回	3-4 回	5 回以上	χ^2
学父母との集会または個別面談	幼稚園	225 (53.7)	72 (32.0)	129 (57.4)	12 (5.3)	12 (5.3)	27.12***
	小学校教師	194 (46.3)	22 (11.3)	148 (76.4)	16 (8.2)	8 (4.1)	
	全 体	419 (100)	94 (22.4)	277 (66.1)	28 (6.7)	20 (4.8)	
学父母間小学校適応に関する面談提供	幼稚園	225 (53.7)	102 (45.3)	99 (44.0)	16 (7.1)	8 (3.6)	20.58***
	小学校教師	194 (46.3)	49 (25.3)	124 (63.8)	17 (8.8)	4 (2.1)	
	全 体	419 (100)	151 (36.0)	223 (53.2)	33 (7.9)	12 (2.9)	
学父母用案内冊子構成	幼稚園	225 (53.7)	139 (61.8)	70 (31.1)	11 (4.9)	5 (2.2)	9.83*
	小学校教師	194 (46.3)	108 (55.7)	82 (42.3)	3 (1.5)	1 (0.5)	
	全 体	419 (100)	247 (58.9)	152 (36.3)	14 (3.3)	6 (1.5)	

* $p<.05$ *** $p<.001$

IV. 論議と結論

幼稚園—小学校連携教育に対する幼稚園教師と小学校教師の認識と実

態に関する本研究結果を、研究問題にもとづいて要約してみれば次のようになる…

一．幼稚園と小学校連携教育の理解と必要性に対する認識

幼稚園教師と小学校教師すべて、幼稚園—小学校連携教育の必要性を普通程度に認識していることが示されたが、幼稚園教師が小学校教師より連携教育の必要性を有意に高く認識していた。また、過半数以上の教師たちが、連携対象である小学校または幼稚園教師たちとの交流がないことを、本件結果は明らかにした。このような本研究結果は、わが国小学校教師が幼稚園教師より、幼稚園—小学校連携教育についてよりよく知っていると発表したファンエジョン（2009）の研究結果と合致しているといえる。また、本研究結果とは対照的にPiantaとEkraft-Sayre（2003）、そしてSmolkin（2005）は、幼稚園—小学校連携教育は行政官、地域社会の人的資源、そして幼稚園と小学校教師たちが参加する「連携教育委員会」を構成して、幼稚園と小学校との相互交流による合議を基礎として構成されるべきだということを指摘している。この点からPiantaとEkraft-Sayre（2003）、そしてSmolkin（2002）の提案は、これから幼稚園—小学校

連携教育を計画して実践するためには、幼稚園教師だけではなく小学校教師たちも連携教育の必要性和重要性に対する認識転換をしなければならぬことを暗示しているだけではなく、幼稚園と小学校間の相互交流体制を構築して、これを活性化させる必要があることを示唆している。また、幼稚園と小学校での連携教育画とても低調でうまく行われていない理由も、相互の教育課程に対する教師たちの理解不足と制度上の断絶、そして教授学習方法の差異に起因していることが明らかになった本研究結果は、PiantaとCox (2002) とPiantaとEkraft-Sayre (2003) が主張する、幼稚園—小学校連携教育のための相互教育体系確立の必要性を示唆している。

それだけではなく、幼稚園と小学校の教師たちは連携教育試行のために一番最初に考慮すべき側面として、「教育課程編成」を指摘していて、二番目の回答としては教師間の差異がある。幼稚園教師は「環境構成」を指摘した反面、小学校教師は教授学習方法を指摘している点に差異がある。このような本研究結果は、幼稚園—小学校連携教育に関連して、幼稚園教師たちは教育環境および教育活動運営の側面における小学校での変化を要求しているという結果を発表し

た研究(キムチャンボク、1992; パクチャンオク、1994; イデギョン、1996)と、部分的に一致している。小学校一学年の学校適応に関する認識でも、幼稚園教師と小学校教師間に差異があった。幼稚園教師は児童が小学校にうまく適応しない原因として新しい環境の不適応を一番多く指摘している反面、小学校教師は児童の個人的な特性を一番多く指摘している。このような本研究結果は、児童の学校不適応の原因を認識して判断する際に多少の差異があることを認定していて、このような認識は幼稚園—小学校連携教育計画および構成に影響を与えるであろうことの資料となっている。反面、同一対象幼児が小学校に入学した後、彼らを追跡して一学年から現れる学校不適応を分析したチョンデヒョンとチソンエ (2006) は、幼児の社会性および知的特性が小学校適応と関係があることを報告していて、小学校一学年入学以後の不適応は、児童の個人的特性だと指摘した小学校教師たちの認識と、部分的に脈を通じている。

これから新しい環境が小学校一学年入学児童に与える効果を深く分析する継続研究を通じて、小学校不適応に与える環境的原因を規定する必要があつて、このような研究結果は幼稚園—小学校連携教育と幼稚園およ

び小学校教育環境配置に、意味のある示唆点を提供できる資料となるかどうか。

二. 幼稚園および小学校教育課程理解に対する認識

研究対象幼稚園教師たちと小学校教師たちは、相手方の小学校または幼稚園教育課程に対する理解と認識が低くて、小学校教師より幼稚園教師たちがが有意義に小学校教育課程、目的、目標、教授活動を比較的良好に認識していることが明らかである。それだけではなく幼稚園教師たちは小学校の教育課程を良く理解することが、幼稚園教師の効率性を高めることができることを認識していた。少し前に幼稚園と小学校の連携教育を分析したナジョンとチョンミンリム (教育開発院、1997) は、幼稚園と小学校は幼児または児童の発達を目標として教育するという目標は同一であるけれど、教育課程は大きな差異を見せていると指摘しているとおりである。しかし、幼稚園教育現場で適用している二〇〇七年幼稚園教育課程の改訂方向では、小学校との連携を重要視していて、連携教育と関連した幼稚園教師研修提供と、幼稚園—小学校連携教育のための試図を試行している。このような理由で、幼稚園教師たちが幼稚園—小学校連携

教育と小学校教育課程を接合するところの機会が多くなって、これによって幼稚園教師が小学校教師より相手側の教育課程をよりよく理解して、自ら判断していると思われる。さらにこのような本研究結果は、「幼稚園—小学校」連携教育教科が、幼稚園教師および小学校教師現職教育プログラムに包含可否を比較することによって、論議してみることができ。現在幼稚園教師の現職教育プログラムでは、「幼稚園—小学校連携教育」関連教科を提供している反面、小学校教師現職教育プログラムでは「幼稚園—小学校連携教育」関連教科提供していない（チョンデヒョン、2006）。現職教育を通じて幼稚園—小学校連携教育を受講した幼稚園教師たちが、小学校教師が幼稚園教育課程に接する機会より、小学校教育課程に接する機会が多いことが見られる。従って、小学校教師を対象にした現職教育でも「幼稚園—小学校連携教育」教科を教育課程に包含させて、小学校教師たちにも幼稚園教育課程に対する認識を高める機会を準備しなければならない。Emig (2000) は教育の効率性とともに学校準備度を論議すると同時に、小学校教育の効率性を高めるためには、入学する児童の学校準備度を把握しなければならないけれども、学校が最初に入

学する児童のための準備度を検証すべきだとしている。児童のための学校準備度は、何よりも小学校教師が幼稚園で児童が経験してきた教育課程を理解しなければ児童の学校準備度を統一的に判断できないのと同じに、適した教育を遂行できないことを指摘している。このようなEmig (2000) の指摘は、小学校に入学した児童を対象に効率的な教育を遂行するためには、前段階の教育期間即幼稚園で児童に提供された教育的経験を理解するべきだということが、必須の要素となるということを暗示しているだろう。このようなEmig の指摘は、小学校教師の現職教育だけではなく、教師事前教育でも幼稚園—小学校連携教育教科を提供して、児童が小学校入学全幼稚園での経験と、幼稚園から小学校への転移に伴う経験についてより包括的体系的な知識を蓄積しなければならないということであることを強調している。

三. 幼稚園—小学校連携教育方法に対する認識

幼稚園と小学校教師すべては、幼稚園で小学校への成功的な転移および連携教育方法を構築するためには、幼稚園—小学校連携教育のための学父母と協議して論議することよりは、相手機関、即小学校または幼稚園教

師たちと、または地域社会関連人的資源と協議して論議すべき必要性を、より高く認定していることを示している。幼稚園教師たちが小学校教師たちよりその必要性を有意義に高く認定していることを明らかにした。PiantaとKraft-Sayre (2003) は、効率的な幼稚園—小学校連携教育方法を構築するためには、計画段階から学父母たちを参加させることで、児童に適した連携教育方法を構築することができるということを指摘していた。従って、教師たちは幼稚園—小学校連携教育構築方案を論議するとき、学父母たちを参加させて、より児童と家庭との連携と、教育における父母参加の重要性を認知しているために、連携教育方法構築に父母と論議の必要性を、小学校教師より幼稚園教師たちが有意に高く認定していると判断できる。方法を模索する必要がある。構築できると判断できる。それだけではなくて、幼稚園教師たちと小学校教師たちは、幼稚園から小学校への成功的な転移のためjの教育計画活動時、幼稚園（小学校）教育内容の相互連携するようにする教育方法について、幼稚園教師が小学校教師より有意義な差異でそのようにすべきだと認定していることが示された。発達学者たちは一般的に〇〜八歳までを幼児期と命名

している (Morrison、2009)。発達学者たちの見解によれば、わが国小学校三年生までが幼児期に属している、発達の特徴も類似しているため、幼稚園—小学校連携教育方法も幼稚園と小学校間に、連続性と系列性を基礎として、体系化されるべきである。研究対象の教師たちは幼稚園と小学校教育間の差異点が教授学習方法と教育環境に差異があると認定している、示された本研究結果は幼稚園と小学校低学年児童の発達特性を認識して、より系列性と連続性が維持されうるようにする方法が、それぞれの現場において成立することができるようにはならない。

本研究の結果、連携教育の効率性のために、幼稚園と類似した小学校一学年教室環境構成について、幼稚園教師と小学校教師すべて「必要がない」と認識していることを示している。しかし、幼児が幼稚園を卒業して小学校へ入学すれば、一番怖いこととして迫ってくるのが教室環境の変化であるということを、チョデヒョン (2006) とチョンデヒョンとチソンエ (2006a) は指摘している。現在大部分の幼稚園では、興味領域で区分して教室を配置をしている。幼児が小学校に入学するように、なるとしても、まさに教師に向かつて一律的に配置された机と椅子

に座っていることに対する深刻な適応の問題があることを、チョンデヒョンとチソンエ (2006a) は報告している。それだけではなくて、幼稚園卒業と同時に小学校へ入学することになって、標準時間表によって教科教育が一律的に遂行されて、可能ならば分配された時間にも椅子と机に静かに座っていなければならない日課運営に、一学年児童は適応が難しいということを事例分析を通じて、チョデヒョン (2006) は明らかにしている。特に小学校低学年まで、幼稚園教室の物理的環境と類似させて興味領域中心に配置して、その教育の効率性を提示している、アメリカのミシガン州 Ypsilanti の High / Scope プログラム (Hohmann、Banet、& Weikart、1992) を参照して、幼稚園—小学校連携教育と関連した教育環境構成を模索してみることがある。

四. 幼稚園—小学校連携教育活動および内容実態

幼稚園と小学校で現在実施している連携教育実態を把握した結果、連携教育活動を幼稚園と祖由学校すべてでは積極的に提供していないことがわかった。過半数以上の教師たちが担任している幼児が小学校教室を、小学校児童が幼稚園教室を訪問するという経験がないことが示された。

これは幼稚園と小学校を訪問して相互に連携することができるようになる連携教育活動が、積極的に教育現場で提供されていないことを示してくれていることである。また、大部分の教師たちは担任している幼児がまたは小学校児童が、小学校または幼稚園行事に参加するようなことが全くないことも明らかになったが、これは小学校教師たちが幼稚園教師たちよりも少ないことを示している。このような本研究結果は、幼稚園と小学校すべてが積極的に連携教育活動を提供していないけれども、相対的に小学校よりも幼稚園で少しは多くの幼稚園—小学校連携教育活動を提供していると解釈することができる。しかし、これからは、幼稚園と小学校すべてが多角的側面から幼稚園—小学校連携教育活動を開発して、これを教育現場に提供するようにすべきである。

何よりも周知させなければならない事実とは、幼稚園教師と小学校教師間に、幼稚園—小学校連携教育に対する関心を比較してみると、小学校教師よりは幼稚園教師が、幼稚園—小学校連携教育に興味関心が多いことを本研究結果は示している、小学校教師たちも幼稚園—小学校連携教育に関心は多いという事実である。先に論議したように、Pianta と

Kraft-Sayre (2003) ²⁶⁾ 小学校教師たちを対象に幼児教育機関と小学校の連携教育に関する調査を通じて、教師たちは幼稚園と小学連携教育に期待する以上の関心を持っていると発表した。PiantaとKraft-Sayre (2003)のこのような主張は、本研究結果とも部分的に一致しているといえる。しかし、幼稚園—小学校連携教育活動開発のために、教師たちが参考にできる資料と情報がとても制限されている現況が問題となってきた。幼稚園—小学校連携教育活動計画のために、教師たちは主に本や書籍としてインターネット資料に頼っていることも、本研究結果では明らかになかった。このような結果は、幼稚園—小学校連携教育資料収集の通路がとても制限されていることを示している。幼稚園教師と小学校教師を対象として、多様な情報収集通路を構築して、連携教育活動により容易に接することができるようにする必要はある。

結果は、多様な領域で幼稚園—小学校連携教育活動を開発する必要性とともに相手方、すなわち小学校および幼稚園教育内容を参照して、教育活動の連続性と系列性を維持する必要があることを示唆しているといえる。またこのような本研究結果は、二〇〇七年改定幼稚園教育課程において幼稚園—小学校連携を基本方向として採用していることはとても対照的な結果で、幼児教育現場においても幼稚園—小学校連携教育が効果的に運営されていないということを見せている結果となった。これから幼稚園だけではなく、小学校も国家水準の教育課程において幼稚園—小学校連携教育方向設定と同時に、幼稚園と小学校それぞれにおいて提供している連携教育活動が、連続性と系列性を維持することができるようになる方案を模索するべきである。

五、幼稚園—小学校連携教育関連父母教育

幼稚園と小学校では児童が成功的に小学校適応を協議して援助するための父母の集まりを、ほとんど実施していなくて、相対的に小学校が幼稚園よりこのような集まりと面談をもっとしばしばしなければならないことを示している。小学校では入学初期の児童たちを適応させるための教育実施と同時に、学父母の集まりと面談を通じて父母教育を実施しているが、このような学父母の集まりと面談の内容体系を、幼稚園から連携して一貫性をもつて実施するならば、小学校での児童の学校適応および連携教育と関連した父母教育の効率性も高くなることができると見ることができ。それだけではなく、過半数以上の幼稚園教師および小学校教師たちが成功的な幼稚園から小学校への転移のための学父母用案内冊子をつくってみた経験がないということを示している。本研究結果は、幼稚園—小学校連携教育のための父母教育方法の制限性示した結果だといえる。幼稚園—小学校連携教育のための多様な父母教育の方法を開発して、適用する必要がある。このような論議は既に PiantaとCox (2005)、PiantaとKraft-Sayre (2003)、そして Smolkin (2005) 発達、幼稚園—小学校連携教育は、家庭と学父母そして幼稚園と小学校が同時に参加して、交流することを基礎として計画しなければならぬということが、必須の要素だと指摘している内容を指示することだともいえる。

結論的に、幼稚園—小学校連携教育に対する幼稚園教師と小学校教師の認識と、幼稚園と小学校連携教育

実態は多くの差異がある。幼稚園での教育だけではなく、小学校教育の効率性の側面から幼稚園—小学校間の連携教育に対する、幼稚園と小学校教師たちの認識転換も要求されるけれども、幼稚園と小学校という二つの教育機関間の教育政策、教育課程、教師教育、行／財政的支援隊系統の側面において、緊密に連携して、幼稚園と小学校教育が連続性と継続性を維持することができるような方案を模索しなければならないだろう。

参考文献

- 教育科学技術部 (二〇〇五)・二〇〇七改訂幼稚園教育課程・ソウル：教育科学技術部
- 教育科学技術部 (二〇〇八)・教育とPiantaとEkmrl-Sayre 科学技術部報道資料 2008. 5. 27. ソウル：教育科学技術部
- 国立小学校併設幼稚園 (二〇〇二)・幼小連携教育プログラム 適用を通じて学校生活適応能力伸張、研究学校運営報告書
- キムチエテク (一九九四)・幼稚園と小学校教育課程の連携性模索、中央大学校付設韓国教育問題研究所、幼稚園と小学校教育課程連携性、3-17.
- キムチャンボク (二〇〇一)・幼稚園と小学校数学教育課程の比較分析および連携活动方案、数学教育論文集、12、1-19.
- キムチャンボク、チェヨンジョル (二〇〇二)・小学校教育課程に対する幼稚園教師の認識に関する研究、開放幼児教育研究、7(1), 187-203.
- パクチャンオク (一九九四)・道徳性基礎確立のための幼児教育機関の役割、一九九四年度韓国幼児教育学会年次学術大会発表論文、56-79.

- ソミョン、イスンヒョン、イカンイ (二〇〇一)・施設児童と、船乗の初期学校環境、大韓家庭式大誌、88(1), 94-94.
- シアン小学校併設幼稚園 (一九九八)・活動中心教育課程運営を通じて幼小連携教育、研究学校運営報告書、YTN ニュース (2005. 03. 07)・満5歳「初期就学」年ごと減少、<http://krnews.yahoo.com>.
- イデギョン (一九九〇)・小学校1学年児童に対する小集団活動中心教授方法の適用と効果、中央大学校博士学位請求論文
- イミョンファン (一九九八)・幼稚園と小学校開放教育の連携方案、仁川大学校第11回教育問題セミナー主題発表論文集、82-98.
- イワン付属小学校併設幼稚園 (一九九八)・幼稚園と小学校連携教育活動を通じて学校生活適応能力向上、研究学校運営報告書
- チャンヨンスク、ユスンヨン (二〇〇二)・幼稚園と小学校連携教育に対する教師と学父母の認識比較研究、教科教育研究、11(1), 277-293.
- チョンデヒョン (二〇〇六)・幼児のなかま相互作用・幼児—教師関係・多重知能と小学校適応関係の調査、全南大学校大学院幼児教育科博士学位請求論文
- チョンデヒョン、チョンエ (2006a)・幼児の小学校適応関係に対する事例研究、幼児教育論集、10(1), 207-227.
- (2006b)・幼児のなかま相互作用・幼児—教師関係・多重知能と小学校間の関係、幼児教育研究、26(3), 201-220.
- チョンゴンバ、イジョン、ユンヘギョン、イジョンファン (二〇〇二・一〇)・児童用学校適応評価尺度の標準化研究、2002韓国心理学会、年次学術発表大会論文発表
- チュボongan、イオクイム (二〇〇五)・幼稚園小学校道徳教育の連携教育模索のための国家水準教育課程分析、幼児教育論集、9(1)201-216.
- チョンエ (二〇〇九)・発達的モデル中心幼稚園—小学校連携教育プログラム開発、幼児教育論集、13(4), 387-13.

- チョンエ、チョンデヒョン (二〇〇六)・小学校1学年学校適応尺度妥当化研究、児童大誌、27(1)・15-25.
- チョンエ、チョンデヒョン、イスンイム、ジョウンジョン、パクユン、ホンヒョンイ (二〇〇七)・幼稚園—小学校連携教育の研究動向、開放幼児教育研究、12(1)・207-222.
- チョンデ、チョンゴンバ、イミョンファン、パクヒョン (二〇〇七)・幼稚園と小学校での役割あそび現場活用比較、幼児教育研究、27(1)・405-430.
- 韓国教育開発院 (一九九七)・幼児教育と初等教育の連携方案研究、ソウル：白文閣
- ファンヘジョン (二〇〇九)・幼小連携教育に対するわが国と米国の幼児教師と初等教師の認識比較、開放教育研究、17(1)・25-51.
- Bronfenbrenner, U. (一九七九)・イヨン (訳)・(一九九一)・人間発達生態学、ソウル：教育科学社
- Brown, W. H., Odum, S., & Holcombe, A. (1996). Observational assessment of young children's social behavior with peers. *Early Childhood Research Quarterly*, 11, 19-40.
- Chen, J. (1992). Building on children's strengths : Examination of a Project Spectrum intervention program for students at risk for school failure. Dissertation Award of the National Association of Early Childhood Teacher Educators.
- Ernig, C. (2000). School readiness : Helping communities get children ready for school and schools ready for children. ERIC Document Reproduction Service No. ED44712
- Epstein, J. L., & McParland, J. M. (1976). The concept and measurement of the quality of school life. *American Educational Research Journal*, 13, 15-30.
- Holmann, M., Banet, B., & Weikart, D. (1992). Young children in action. Ypsilanti, Michigan : HHGH/COPE Education Research Foundation.
- Ladd, G. W., Kochenderfer, B. J., & Coleman, C. C. (1996). Friendship quality as a predictor of young children's early school adjustment. *Child Development*, 67(3), 1103-1118
- Lo'castle-Crouch, J., Mashburn, B. J., Downer, J. T., & Pianta, R. C. (2008). Pre-kindergarten teacher's use of transition practices and children's adjustment to kindergarten. *Early Childhood Research Quarterly*, 23, 142-149.

- Morrison, G. S. (2009). *Early Childhood Education today*. NJ : Person.
- Pianta, R. C. , & E Cox, M.(Eds.)(2005). *The Transition to kindergarten* Baltimore : Paul Books Pub. ,
- Piant, R. C. , & Kraft-Saye, M.E.(2003) *Successful kindergarten* Transition Baltimore : Paul Books PLb.
- Rimm-Kaufman, S.E. & Pianta, R.C.(2001). An ecological perspective on the transition to kindergarten : A Theoretical framework to empirical research. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 16(1), 117-132.
- Smokin, L.S.(2005). *The Practice of Effective Transitions*. In R. Pianta & M. Cox(Eds.), *The Transition to Kindergarten*(pp.325-349). London : Paul H. Brooks Pub.Co., Inc.
- Stroulfe, L.,A. & Fleeson, J.(1986). *Attachment and development*(pp. 51-71)New York : Cambridge University Press.

現代の公共哲学とヘーゲル

福吉勝男 著
未来社 (2010)名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了
(ひさだ・けんきち)

久田 健吉



私開公を旨とする所に見いだす。活私開公とは「私」という個人一人ひとりを活かしながら、人々の公共世界を開花させ、政府や国家の公を開いていく」という意味とされているからである。公を私と対立させて理解するのでなく、私同士が連携し合う場としての公共を豊かに発展させる中で、公としての国家や政府を私にとって意味あるものにしうという公共哲学論議の真意を見抜いてのことである。

ところが、筆者にとって、そして私(久田)にとつてもだが、上に見た公共哲学論議はヘーゲルこそが問題にしてきた分野と考えるのに、「現代の」公共哲学論者にはヘーゲル哲学へ言及する人は少なく、言及している人でも国家主義者ヘーゲルという理解に留まり、もしくは、ヘーゲルをよく理解し彼を立憲主義者と解する人でも、国家主義者ヘーゲルの理解にこだわりの、ヘーゲルをまっとうな公共哲学者とは見ず、「ヘーゲル公共哲学」とか「ヘーゲル主義的な公共哲学」と書いているという具合である。

筆者は書いていないが、私は、本書を『公共哲学とヘーゲル』でなく『現代の公共哲学とヘーゲル』と命名した所に筆者の抗議の意志を読み取るのである。端的に言えば、ヘーゲ

ル哲学を国家主義の哲学と断じていてまっとうな公共哲学論議はできるのか、ここまで言わないにしても、ヘーゲル哲学を市民の公共哲学と解することで公共哲学の論議は一層深めていくのではないかとはいっているように思えるのである。ともあれ筆者が公共哲学を論じるにヘーゲルを落としてはならないと言っていることは、確かである。

筆者は、ヘーゲル哲学が公共哲学であることを全力を挙げて論証していく。しかしこの論証は新研究によつてではない。新研究による論証もありはするが、大半は今までの筆者のヘーゲル研究を再編する形で論証していく。どうしてか。筆者はヘーゲルの国家論を、市民の自由を実現する国家論、市民に「自由の具体的現実性」をもたらす国家論として研究してきたが、この国家論こそは公共哲学論者が目指す市民の公共性の上に立つ国家論(公共哲学)と内容を同じくすると考えるからに他ならない。

(二) 具体的に論証を見ていこう。紙数には限りがあるので、「第Ⅱ部 市民社会論と公共哲学」を中心にみるこ

とにする。他の箇所は概観程度になるが、お許し願いたい。

「第Ⅰ部 家族論」は最後に触れる。「第Ⅱ部 市民社会論と公共哲学」について。

第Ⅱ部は第三章と第四章からなっている。

現代の公共哲学論者のヘーゲル哲学理解の検討から始める。

ヘーゲル哲学に触れている論者は山脇直司氏、松下圭一氏、小林正弥氏、千葉眞氏の四氏である。山脇氏と松下氏と小林氏はヘーゲル国家論を国家主義の国家論と断定するから、結論としてヘーゲル哲学は公共哲学に役立たないと言っていることになる。ただ山脇氏は筆者の前著『使えるヘーゲル—社会のかたち、福祉の思想』(平凡社新書)に惹かれ、直近の氏の論文では「ヘーゲル主義的な公共哲学」と言っているから、松下・小林の二氏とは違うことになる。しかし半信半疑の域を出ないから、氏のヘーゲル理解の前進に期待はするものの、現時点では前二氏と同じと言つてよいであろう。千葉氏はどうか。氏はヘーゲルの市民社会論を市場モデル市民社会論と理解し、公共哲学には公的領域モデル市民社会論が必要だと言っているのであるから、これまたヘーゲル哲学は公共哲学論議にふさわしくないと断言していることに

なる。

＊筆者は後日、山脇氏の『グローカル公共哲学―「活私開公」のヴィジョンのために』の書評で、「ヘーゲルは公共哲学からほど遠く、国家哲学の称揚者だと山脇氏は理解しているように私は考えていた。だが当該書の数箇所で、〈ヘーゲルの公共哲学〉として新たに積極的評価が示されている。公共哲学としてヘーゲル哲学を読み直しつつある私にとって山脇氏の新評価は心強い限りだ」と述べ、山脇氏に対する評価を変えている。

筆者が現代の公共哲学論者に対してヘーゲル哲学を対置する理由は明瞭である。先に見た通りだ。

筆者はこの対置をまず、古典的に「公共哲学」のテーマで何が論じられてきたかを解明する中でしていく。古典的公共哲学論者とは、A・トクヴィル、H・アーレント、J・ハーバーマス、R・パットナムの四人である。ただ、対置ということから言えば、これは余分のように思える。しかし筆者からすれば、ヘーゲル哲学はこれら古典的公共哲学論議の上にあるということ言うためには是非必要ということであったのであろう。

これら四人は時代も国籍も思想も違うが、市民が国家への奉仕・犠牲

から解放されるあり方は何か、私を活かし新たな公を形成する公共性はどう作られるべきかを問題にしている点で共通している。トクヴィルは市民による自発的な市民団体の結成運動こそが民主主義の要と説き、アーレントは人間の共生が可能である理由を原理的に論証し、ハーバーマスはヘーゲルが掴みだした資本主義社会でない市民社会（bürgerliche Gesellschaft）の概念を更に発展させ、市民的公共圏としての市民社会（Zivilgesellschaft）を作り出す必要を説き、パットナムは今日の衰退する市民運動の原因を、若者に共助心（social capital）の大切さを説いて来なかったことに見いだし、アリストテレスやルソー、ジェームズやデュローイのように説いていくのではないかと呼びかけるのだから。

こう確認した上で、筆者は、ヘーゲルの市民社会論（ヘーゲル哲学）がどれほど公共哲学の内容を深め豊かにするものであるかを論証していく。

筆者は、ヘーゲルの市民社会論は市場主義の市民社会論ではないと言明する。なぜならヘーゲルは市民社会を、（一）欲求の体系、（二）司法活動、（三）福祉行政（Polizei）と職業協同団体（Korporation）の三つでできていると言うから。つまり、市民の活動を、欲求を充足する場とし

ての市場（欲求の体系）にあるとするだけでなく、司法活動も福祉行政も職業協同団体の活動も市民の固有の活動と確認しているから。

なのに先に見た千葉眞氏は、この司法活動と福祉行政と職業協同団体の活動は国家組織（内務省）がとり仕切るもので、市民の活動体ではないと言う。えっ何だっつて、どうして理由を聞きたくないが、その返答はない。これらの活動は内務省の管理のもとでやっている（やらされている）という断定があるのみ。

筆者は、ヘーゲルにおいては、これらの活動は、国家主導のものではなく、市民が自らの国家をつくり上げていく自覚的行為の中でなされていくと論証する。

（三）

市場は欲求を充足する場であると同時に、競争の場であり、無慈悲な場である。それゆえ弱者や不運の者は競争に敗れ貧困や非人間的立場に追い込まれることにもなる。問題の焦点は、だれがこれを解決していくかである。国家の慈悲によってか市民の連帯と共助によってか。

この問いの答は、職業協同団体についてのヘーゲルの叙述を見れば明

らかである。

職業協同団体は「合法的にそれら自体によって共同して統治され」、それは「自治・自己管理」において存在するとヘーゲルは言う。見られる通り、解決は市民の連帯と共助によってなされていくと言っているのである。

しかし大切なことは、ヘーゲルは同時に、職業協同団体は国家から自由であると言わないことである。この言い方が、ヘーゲル国家論が国家主義と誤解される理由となるのであるが、職業協同団体は対国家として存在するのではなく、独立性をもって国家の一構成体をなして存在すると言っているのである。そして更にヘーゲルは、この職業協同団体的自治集団はこの職業協同団体的のみならず、地方自治団体、他の商工団体、階層的諸団体も自治集団（Kreis）として存在すると言っている。

＊筆者はこの〈Kreis〉なる語に、場合によって「地域自治コミュニティ」「ニティ」の訳語を与えることもある。

この自治集団（Kreis）の存在の叙述は、国家を市民のものにするという思いなしには言えないことであろう。なぜなら市民の自治集団を認めながら、国家論が国家主義であったら自己矛盾も甚だしい国家論となるからである。

やはり、ヘーゲルの市民社会論は国家を市民のものにしていくという角度から論じられている。

この自治集団は右に見たように、職業協同団体を含むものだから、脱市場の自治集団ではなく、公共と市場を結ぶ自治集団として位置づけられていることが分かる。これに鑑み、筆者はヘーゲルの市民社会論を「公共―市場」リンク市民社会論と命名する。うまい命名と思ふ。

そして筆者は、この公共―市場リンク市民社会論であつてはじめて市場を市場任せにせず、市場を市民のコントロールの下に置くことができるようになると思う。これによつて市場は公共性に規制された市場となるから。それゆえ筆者はこのリンク市民社会論は、「公共性抜き」の市場は盲目であり、市場抜きの公共性は空虚である」が、これを克服するものとなると言う。

では、ヘーゲルは、この「公共―市場」リンク市民社会論を具体的にどのように述べるのであろうか。

筆者はこの叙述の鍵は「Kreis」にあると思う。筆者はここでバイエルン改革との関連でこの「Kreis」の意味と意義を克明に限定するが、本書評の課題は筆者のヘーゲル公共哲学理解の有効性を明らかにすることなので、詳細は追わず結論だけを見る

ことにする。

問題は、自治集団もしくは地域自治コミュニティとしての「Kreis」はどう国家と関係し、国家を市民のものにしていくのかである。単なる自治集団であるだけなら国家は分裂し、国家は自治集団同士の合従連衡の闘争の場となる。こうであるならヘーゲル哲学は活私開公の公共哲学ではなくなる。

筆者は、ヘーゲルはこの「Kreis」を「Kollegium」（合議・協議）との密接な関連のもとで説明するが、ここにこそ公共哲学性はあると思う。

筆者は、ヘーゲルの国家目的は国民福祉の実現であつて、行政の仕事はそれを具体化することだと確認する。こういう言い方をされると唐突のように聞こえるが、そうではない。ヘーゲルの国家論は、福祉行政（Wohlfahrt）を市民の固有の活動領域とし、市民はこの自治集団において国家と合議・協議して、福祉を国家において実現していこうというものになっているからである。

ところで「Kreis」の訳であるが、職業協同団体をはじめ、地方自治団体、他の商工団体、階層的諸団体等を含むのであるから、「Kreis」の訳は地域自治コミュニティより自治集団の方がよいと私は思う。なぜなら地域自治コミュニティの訳では、「公共

―市場」リンク市民社会論という折角の命名の意図が薄らいでしまうと思うからである。

「Kreis」に「Kollegium」。これがヘーゲル国家論が公共哲学たるの根拠である。

ヘーゲルはこの「Kollegium」は、意志の最終決定機関である議会や意志遂行機関である内閣までをも貫くのでなければならぬと思う。「Kreis」は多様であるから、意志も多様となる。「Kollegium」に参加する「Kreis」の代表と公務員の責任は重いものとなる。多様な意志を一つにまとめ政策にしなければならぬからである。しかし、こうすることになるよつてはじめて、国家権力による統治は市民の共治による統治へと姿を変えることになるのである。

以上は本書が明らかにしたヘーゲルの公共哲学論である。

(四)

私の本書に対する書評は「第Ⅱ部 市民社会論と公共哲学」に限定されている。本書は他に「第Ⅰ部 家族論」と「第Ⅲ部 国家論」を持つ。これらに触れなかった理由は、本書が現代の公共哲学論にヘーゲル哲学を対置し、公共哲学論におけるヘー

ゲル哲学の意義を問うというテーマで書かれているからである。

本書の「国家論」はヘーゲルの国家論の研究としては重厚である。形成の過程や時代との関わりの中での彼の柔軟な対応は、ヘーゲルの国家論を理解する点では見落としてはならないであろう。しかし公共哲学の視点から見れば、ヘーゲルが公共哲学との関連で何を言ったか、最高級の言辞こそ大切である。この理由のために、あえて第Ⅲ部については触れないことにした。

第Ⅰ部について触れなかった理由も基本的には第Ⅲ部を触れなかった理由と同じであるが、少し異なる点がある。この点を記しておこう。

筆者のヘーゲルの市民社会と家族の関係での家族の役割の理解は、私の理解とは異なる。筆者は、ヘーゲルは家族の子供に対する教育の使命として、一つは否定的使命として市民社会の構成員となるべき自立の教育を説き、もう一つは積極的使命として愛と信頼の心、いわば倫理の心の教育を説いていると確認しながら、前者については市民社会の主体者になるための必要物と論ずるのに、後者については市民社会との関連では「具体的」には何も語らないのである。この点が異なる。「倫理規範にそつた生活は家族につづく市民社会お

よび国家においてもヘーゲルの主要なテーマのひとつである」と述べるだけだから。

私はこの倫理の心の教育を否定的と言わずに積極的、肯定的使命(Positive Bestimmung)と言ったところにヘーゲルの深い意図を感じる。

ヘーゲルの『法・権利の哲学要綱』は第Ⅰ部「法・権利」、第Ⅱ部「道徳」、第Ⅲ部「倫理・人倫」となっている。そしてこの第Ⅲ部において、家族・市民社会・国家が問題にされる。だからこれを物語風に言えば、権利意識から出発した人間が権利の主張だけでは闘争になることを悟り、共存の道徳を身につけるのでないと権利は実現されないことを自覚するに至る、そこで人間の生活の場である家族、市民社会、国家をどう道徳的なものにするか、その道徳の実践のあり方を倫理・人倫として考えていくという物語になっていると考えられる。道徳を実現しようという心、これを実現していくのが倫理・人倫だと。

私はこう考えるので、筆者と論争的にこの書評を書いてもよかった。しかしなぜそうしなかったかと言うと、本書の市民社会論が余りにも素晴らしいからである。右に見た通りだ。批判を全面に掲げて書評を書いたら、この素晴らしいさを伝えること

ができなくなってしまうだろう。

私は筆者に言いたい。ヘーゲルのこの倫理・人倫への思いに留意していただいたら、筆者のヘーゲル市民社会論はもっと素晴らしいものになるだろうと。しかもこの筆者の素晴らしい労作に何一つ傷つけることなく。

私の頭の中にはアリストテレスが『ニコマコス倫理学』で述べた正義論、「分配の正義は友愛があつてはじめて貫徹する」がいつも鳴り響いている。ヘーゲルの頭の中にも多分鳴り響いていたのではなからうか。

はじめての政治哲学 ——「正しさ」をめぐる23の問い

小川仁志 著
講談社現代新書 (2010)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(いとう・やすひこ)

伊藤 恭彦



ろい授業とは何かということだ。第二はサンデルの講義の主題である「正義」とは何かである。そして第三は「政治哲学」とはどのような知的営みなのかである。第一の問いに関しては、日本でもおもしろい大学の授業があちこちで紹介され、日本版「白熱教室」ブームが起こった。ただ日本では第二、第三の問い比して、第一の問いに関心が集中しすぎているように思える。

第二の問いについては、政治哲学、法哲学、倫理学といった、従来、正義論を独占してきた学問領域とは異なる学問領域の人々が、正義について語り始め、これも一定の広がりを見せている。正義についての議論が学際的に広がることは好ましい。しかし、この正義論ブームについては、少し慎重にみておく必要がある。日本の多くの人々は、サンデルの正義論を標準的な正義論と理解している。確かに功利主義、義務論的（カント的）リベラリズム、卓越主義（アリストテレス主義）の対抗関係を見事に描き、現代正義論の基本的な論点を提示したサンデルの功績は大きい。しかし、注意しなくてはならないのは、彼は対抗関係を描きながら、自らが信奉する特定の正義論（正義観）に読者を誘導している点である。

サンデルの正義論の意義と問題点

を冷静に考察するためには、政治哲学のより広い知見が必要となる。サンデルのおかげで「政治哲学」という言葉が少し身近になったが、やはりそれは難解な知的営みという印象をもち合わせている。

小川仁志著『はじめての政治哲学——「正しさ」をめぐる23の問い』は、政治哲学という知的営みを平易に伝えている好著である。著者は既に『人生が変わる哲学の教室』、『ヘーゲルを総理大臣に！』『哲学の授業』、『人生をやり直すための哲学』といった著作を著している。どれも難解な哲学を平易におもしろく解説している著作である。哲学を平易に語るという著者の卓越した能力を政治哲学の分野で発揮したのが、本書である。

本書は自由、民主主義、差異と平等、共同体、世界的な対立という政治哲学の標準的なテーマをとりあげ、各テーマの中で、政治哲学がいかなる役割を果たしているのか、テーマをめぐる対抗関係はどのようなものになっているのか、さらには最新の議論は何を提起しているのかを明快に論じている。また、各テーマで使われている具体例も、抽象的な議論をうまく理解するのに役立つ。

政治哲学の一般読者向けの書籍が皆無であった中、本書のような手軽な入門書が出版されたことを心から

喜ぶたい。政治哲学に関心がある人や政治をもう少し深く、原理的に考えてみたいと思う人には是非とも読んでもらいたい一冊である。

本書の意義を十分に踏まえた上で、一点だけ本書について問題提起をしたい。それは冒頭に掲げた問いと同じだが、「政治哲学とは何か」という問題である。本書は政治哲学を「正しさ」（正義）に関する知的営みとしている。政治哲学を「正義」というテーマに即して展開している点、本書のわかりやすさの秘密だし魅力の一部でもある。しかし、政治哲学は「正しさ」だけに限られるものだろうか。社会が集合的に追究する価値には、正しさ以外にも、善さ、繁栄、効率性、平和、品位などがある。本書ではそれらが正義論の下位テーマとして論じられているが、果たしてそうであろうか。確かにプラトンやアリストテレス以来の西欧の正義論の伝統では、正義は他の価値（規範）を調整する独特の価値という位置づけを与えられてきた。その伝統に従えば、本書の議論の組み立て方は正当であると言える。しかし、現実の政治では、例えば、正義と平和という価値が対立的であったり、公正（正義）と効率性がトレードオフの関係であったりする。そうした問題を念頭においたとき、政治哲学を「正義

二〇一〇年、マイケル・サンデルの「ハーバード白熱教室」が社会現象になった。「白熱教室」を放映したNHK教育番組は高視聴率を得た。またサンデルの著作も本屋の店頭に山積みされ、ベストセラーになった。「白熱教室」が私たちに問いかけているものは三つある。一つはおもし

論」として語る意義（意義は本書で十分に展開されている）と同時に、その限界も示す必要があるのではないだろうか。

さらに本書では社会の「正しさ」が生き方の「正しさ」につながるという政治哲学上の重大な問題提起がされている。それでは両者が「つながる」とはいかなる意味なのだろう。個人の正しさと社会の正しさとを、ある種の連続と捉える哲学上の潮流は確かにある。他方で、現代正義論の主流派、例えばジョン・ロールズの正義論では、正義を社会制度の問題に限定している。そのように限定した上で、制度の安定性を構想するために、制度の正義が構成員の「正義感」（正しい生き方では必ずしもない）に支えられる必要があるという議論になっている。ロールズらリベラリズムは個人の正しい生き方や善き生き方を社会全体で問えないという前提にたっている。この前提の問題性はもちろんある。しかし、社会の「正しさ」と生き方の「正しさ」がつながるといふ本書の立場について、さらに一歩進んだ議論が必要であらう。

正義論と政治哲学の関係、個々人の正しさと政治あるいは社会の正しさとの関係はどのようなものであるか。これに唯一の正解はない。本

書は政治哲学の役割を正しい社会を構想する上で必要な万人に開かれた知的営みと捉えていると思われる。つまり哲学の実践性に重点をおいている。この捉え方にも基本的な共感できる。他方で本書では扱われていない別の政治哲学の潮流もある。例えば——近年はネオコンとのつながりであり評判がよくないが——レオ・シュトラウスの政治哲学を挙げることができる。シュトラウスの場合、政治哲学とは端的に「真理」に至る哲学的営みとされている。そして、その「真理」（「永遠の真理」と言ってもよい）こそが、社会の善さや正しさを判定する基準となる。ここでは合意形成ではなく、真理の探究が政治哲学の役割なのである。本書のようにロールズとポスト・ロールズの政治哲学を軸とした政治哲学の意義を確認し、政治哲学とは何かを問うためには、別の政治哲学の潮流との対話が不可欠であらう。

良い哲学の本、そしておそらく良い政治哲学の本は、読者を刺激し、新たな疑問をわかせ、そして各人の知的探究を促すものであらう。本書について、いろいろな疑問が生まれてくるのは、本書に欠陥があるからではなく、疑問や問いを誘発しているという、哲学ならではの役割をもっているからである。

現実政治は「劇場政治」が大流行である。そして政治家が発する、あまりに単純な議論に多くの人々が飛びついている。同時にわずかなことで急速に政治不信に陥る。近年の政治をめぐる、私たちの態度は大きく揺れている。こういう時代状況だからこそ、政治をもう一度深く考える必要がある。本書がその糸口になることは間違いない。

注

- ① サンドルの正義論の問題点を指摘したものととして、井上彰「サンドルとその人気の背景を読む——リベラルなアリストテレス主義者」（『政治思想学会会報』第三十一号 二〇一〇年）を参照。またサンドルの正義論とグロウバルな正義については、杉田敦「書評」『これからの「正義」の話をしよう』マイケル・サンドル著、鬼澤忍訳（早川書房）、『貧困の放置は罪なのか』伊藤恭彦著（人文書院）（『北海道新聞』『現代読書灯』（二〇一〇年一〇月七日朝刊掲載）を参照。
- ② ロールズらの政治哲学とシュトラウスの政治哲学の対抗関係については、伊藤恭彦『多元的世界の政治哲学——ジョン・ロールズと政治哲学の現代的復権』（有斐閣 二〇〇二年）を参照。

貧困の放置は罪なのか —グローバルな正義とコスモポリタニズム

伊藤恭彦 著
人文書院 (2010)

徳山工業高等専門学校准教授
(おがわ・ひとし)
小川 仁志



弁証法的に紡ぎ出された苦悩、
あるいは希望

はじめに—何が問われているのか

書名のとおり、本書は世界の貧困

の実態を受けて、それを放置する富裕国の姿勢を断罪せんとするものである。ただ、単なるノンフィクションや政治家のもののする類書とは異なり、政治哲学の視点から問題の本質を暴き、かつ解決策を模索する試みであるといえる。

そしてその問題の本質とは、副題に掲げられたグローバルな正義であり、解決策とは同じく副題に掲げられたコスモポリタニズムである、と一応はいうことができる。問題は、グローバルな正義やコスモポリタニズムといった概念の内容が、未だ一義的に了解を得られる類のものではないという点にある。

著者はこれらの点を明らかにするべく、序章及び四つの章において、それぞれの課題を明確にしつつ、手際良くかつ説得的に議論を展開している。そこで、基本的には本書の構成に沿ってその内容を紹介しつつ、私なりの見解を加えていきたいと思う。

まず序章では、貧困の現実が様々な数字を使って明らかにされる。地球には一日一ドル以下という最も貧困な生活を強いられている人々が約一二億人いるという。これは地球人口の約二〇％に当たる。他方で、世界の中で最も豊かな人々二〇％が、世界の所得の八〇％を所有している

のである。

著者はこうした現実に対して、実は貧困をなくすための国際的合意があるにもかかわらず、日本人がそれを認識していない事実を指摘する。二〇〇〇年に国連で合意された「ミレニアム開発目標」は、富裕国がGNIの〇・七％を援助にあてることで、二〇一〇年までに貧困を半減することを掲げているのである。本書は、この富裕国の責任を明確化し、誰もが貧困から解放され、人間的な生活を送るためのグローバルな枠組みを提示しようとする。

貧困の放置が罪である理由

第一章では、富裕国から貧困国への富の移転を阻む倫理的態度を三つほど紹介し、グローバルな正義の最低限の規範内容を明らかにしている。一つ目は、「日常に潜む新マルサス主義」という態度である。ギャレット・ハーディンの「救命ボートの倫理」によると、ボートの空き定員が少ないときは、誰も救わないのが正しい選択だということになる。

しかし著者は、現在地球が直面している現状はそれとは異なるという。むしろ食料を満載し、安全装置を完備した豪華客船が十分な乗船スぺー

スを残しながら航海しているようなものだ表現する。したがって、溺れている人を助けられないことは、倫理的には認められないのである。

二つ目は「日常生活に潜むリバタリアニズム」という態度である。これは「私のものは私のもの」という単純な直感を指している。人は自分の能力を行使して財を獲得し、自発的交換によって移転した財からなる分配結果は正しいと信じている。しかし、著者によるとそれは間違っているという。なぜなら、各人の労働が可能になるためには、それを支える社会制度が不可欠だからである。また、労働と交換の背後にある個人間の差異をないがしろにしているからである。

三つ目は「日常生活に潜むナショナリズム」という態度である。たしかに、明確なナショナリズムだけでなく、「リベラル・ナショナリズム」のように開かれた思想も含め、今国民国家の意義を強調する立場は支持を得ている。しかし、だからといってそれは富裕国から貧困国への財の移転の責任と義務を覆すほどの根拠には至らないのである。

このように、いずれの観点からしても、貧困死の除去はグローバルな正義の目標として正当化されうるのである。

貧困の奥に潜む悪の本質

そこで、続く第二章では、貧困死を越える課題の有無が追求される。著者はそれを地球上の格差に見る。いわばそれはグローバルな経済秩序、とりわけそれを主導するグローバルな資本主義の問題である。

ここでは、途上国で過酷な労働を強いる「搾取工場」の実態の中にアリス・ヤングが見出した、「構造的不正義」が取り上げられる。この構造がグローバルな正義の課題になるのは、そこで生産された製品を求めるという意味で、富裕国の人間も不可避的にかかわっているからである。

そしてこの構造的不正義は、人々から潜在的可能性を実現していく方法を奪うという意味で、構造的暴力であるという。そして、こうした構造的暴力を生みだしているのが、グローバル資本主義というメカニズムにほかならない。

ただ、著者は単にグローバル資本主義を悪ととらえ、その排除を望むものではない。そうではなくて、むしろ資本主義のもつ本来の力を発揮すること、問題状況を乗り越えようというのである。つまり、資本主義の行う社会的生産を、社会的「公

共的なもの」として徹底させる必要があると主張する。これはすぐれて弁証法的発想であるといえる。

そうして求められるのがグローバルな分配的正義であるという。これを原理にまとめたものが次の三つである。

第一原理 全ての人が貧困死から解放される状態に至るまで地球上の富を再分割すべきである。

第二原理 貧困死が除去されたとしても、残る格差が暴力的な力を発揮するならば、その暴力的作用がなくなる地点まで地球上の富を再分割すべきである。

第三原理 暴力が除去されても残る格差は、格差構造の底辺にいる人々の潜在的可能性が高まるように作用しなくてはならない。

ここで重要なのは、これらの要求を実現するために求められる主体は、政府や国際機関など各領域ごとに重層的なものであるべきだとしている点である。それは次の公共政策論にもつながってくる。

政策と三つの原理

著者は単に政治哲学の抽象的な議論に終始することなく、具体的な公共政策についても積極的に議論を展開

開しようとする。まずはグローバルな正義の観点から、ODAについて貧困国が対象として優先されていないこと、二国間援助が多すぎることを指摘する。そして、そこに国益という名の内在的制約が存在すること、及び自己利益と結びつけることの意義について言及する。

続いて著者が提案するのは、グローバルな税制の可能性である。ここではすでに一部で実施されている「トービン税」と「国際連帯税」という二種類の税に加え、トマス・ポッツの提案する「地球資源税」並びに「地球資源の配当」についてその実現可能性が模索される。

さらにグローバル資本主義そのものの改革として、前述の「搾取工場」について論じている。負の側面から目をそむけ、これを肯定するのではなく、かといって単純に廃止するのではなく、あくまでも改革によって生かすことを提言するのである。これはいわゆる企業の社会的責任の概念を、貧困の削減という文脈に持ち込もうとするもので、ここにもある種の弁証法的な解決法を見ることが出来る。

その他多国籍企業税の導入、グローバル・コンパクトの実践、フェア・トレードの推進などについて、強制力の欠如をはじめとした問題はあ

ものの、前向きに進めることにこそ意義がある点を訴える。

コスモポリタニズム

公共政策論に象徴されるような、以上の現実的議論を存分に展開した後、ついに著者は政治哲学的理念についての議論へと歩を進める。具体的問題状況を十分に認識し、それに対してどのような政策を採りうるかじっくりと検討した読者にとつて、ここではもう抽象性ゆえに直面する議論の理解の困難さは克服されているものといえよう。

著者が寄つて立つのはコスモポリタニズムという思想的立場である。それは次のように定義される。「本書で言うコスモポリタニズムは、どの命も同じ重みをもっていることを前提に、各人の差異を尊重しつつ、尊厳ある生が地球上どこでも実現できるように、国境を越える正義を構想し擁護する思想である」。

もちろんコスモポリタニズムとして、ややもするとそれが支配の言説に転落する危うさをはらんでいるのは事実である。しかしそれは、現代のコスモポリタニズムが登場した背景としての資本主義自体が内包する危うさに起因するものであるといえる。

したがって、逆言するならば、資本主義そのものの危うさを超克することができれば、コスモポリタニズムは十分解放の思想たりうるのである。

著者の姿勢はある意味で一貫している。それは常に問題を弁証法的に超克していかんとする果敢な姿勢である。問題を放置するのではなく、かといって原因を単純に排除するのでもない。原因をアンチテーゼとして止揚することで、問題を解決しようと試みる。そこには壮絶な苦悩を垣間見ることができる。しかし、そうして生み出された答えの先には、常に希望が輝いているのである。

おわりに―希望に向けて

これだけの壮大かつ緻密な議論を展開した挙句、著者はそれがグローバルな正義群の一部を扱ったものにすぎないと謙虚に述懐する。さらに、私たち自身未だ国民国家の政治アリーナから脱することができないという困難性を指摘する。ここに来てそう聞かされると、悲観的な気分におそわれるかもしれない。

しかし、著者は、それでも人は「二一世紀地球市民の一つの作法」ともいふべき態度を少しづつ身につけていくことができるという。それは国

民国家のアリーナにいながらも、国境を越える問題の関連性を意識しながら行動し、また消費者として商品のグローバルな連関についての情報を得るといふ態度である。

「コスモポリタンへの一步を踏み出す希望はここにもある」。これはアイティストのボノが日本に向けて発したメッセージに寄せて、著者が最後に記した一行である。この言葉は、きつと本書を読み終えた読者全員が抱くであろう感想にも重なるに違いない……。



ポストコロニアリズムとジェンダー

菊地夏野 著
青弓社 (2010)

名古屋大学大学院人間文化研究科

(やまもと・あきよ)

山本明代



本書は、日本軍の「従軍慰安婦」問題と沖縄の基地「売春」問題を取り上げ、女性の表象をジェンダー論とフェミニズムの観点から問い直し、現代社会と日本のフェミニズム運動の閉塞を打開するための新たなパラダイムを構想した研究である。この二つの問題を考察対象として選んだ

問題意識について、次のように述べられている。日本軍の「従軍慰安婦」問題に関しては、歴史的事実の発掘が進んでいるにも関わらず、この問題が歴史認識の中で事実として評価されず、ナショナリズムの渦の中に飲み込まれている現状がある。そして、沖縄の基地「売春」問題については、国際的な認知を獲得しつつある「慰安婦」問題と比べて、近代日本の軍事的な性暴力問題の中で看過されがちな問題である。さらに、著者はこれらの問題に対して連帯して闘うことができなかったフェミニズムにおける「分断」を指摘し、性暴力と闘う女性たちの思想と運動がこの問題にいかに関わりうるのかを問いつけている。

本研究のねらいは次の四点にまとめられている。第一に、ジョンダーとセクシュアリティについて、英語圏の新しいフェミニズム理論をもとに探求することである。従来のフェミニズムによるジョンダー一元論を批判し、女性が社会的現実ではジェンダー以外の要因も絡む複雑な権力作用のなかに位置づけられていることを明らかにする。第二に、戦争や軍事占領に関する研究をフェミニズムの視点から更新することである。一九八〇年代以降、女性たちの国際的な運動が戦争と女性に対する暴力

との密接なつながりを認知させることに成功した。本研究はこの課題を学問的に位置づけ、重要な一つの研究領域として発展させることを目指している。第三に、言語化が難しく、社会的矛盾が集中する売買春に関する問題に焦点をあてる。その際に、当事者であるセックス・ワーカーによる運動を重視しながら、その先を視野に入れる立場をとる。第四に、ガヤトリ・C・スピヴァクによるポストコロニアル・フェミニズムの方法論を手がかりに、沖縄のAサイン制度と「慰安婦」問題の所在を明らかにすることである。

本書は三部から構成されており、第一部では社会学とフェミニズム理論の現状を概観して理論的視座を明らかにし、それを踏まえて、第二部では軍事占領期沖縄の問題を、第三部では日本軍「慰安婦」問題について検討している。以下、各章の内容を紹介したい。第一章「売買春をめぐる『自由意志対強制』の神話」では、一九九〇年代に社会学者の間で交わされた売買春を中心とする「性の商品化」論争を取り上げている。この時期に「売春は悪くない」とする主張が、売買春の善悪、つまり「自由意志」によればよいが、強制であれば悪いという点が議論されるようになった。この「自由意志」論は道

徳的価値判断の論理を乗り越えるところまで、議論を進めることができた。しかし、著者は「自由意志」の限界を指摘し、この論は売買春が実際に行われている社会の権力関係であるジョンダーや植民地権力を看過していると主張している。そして、一九九〇年代の売買春論争の検証の結果、保護されるべき女性とそうでない女性を分断するセクシズムこそを問うべきであると結論付けている。

第二章「戦争と女性」では、戦時下の性暴力や売買春に関して、ジェンダー論やフェミニズム研究が分析する方法について検討した。具体的には、フェミニズム研究による戦争に関する議論や普遍主義的フェミニズムの問題点を整理・分析し、男女の二元論から脱するために、ポストコロニアル・フェミニズムの可能性を論じている。そこで注目するのがスピヴァクのサバルタン論である。ある沈黙に焦点をあて、その沈黙の陰にあるサバルタンの声を探し、想像し、それが消去されていった過程の権力関係を探るというスピヴァクの方法論に本書は依拠している。さらに、占領期沖縄の売買春と日本軍「慰安婦」問題の先行研究を分析し、論点を抽出した。

次に論じたのは軍事占領下の沖縄での基地売春の問題である。第三章

「軍事占領社会における売買春管理」では、軍事占領初期の沖縄におけるAサイン制度によるセクシュアリテイ統制と売春禁止の言説を分析し、

売買春の管理が進められた過程を考察した。Aサイン制度とは、女性従業員への性病検査と店舗の設備の衛生検査に合格した店だけにAサイン(Aはapproval(認可)に由来)を与え、アメリカ兵対象の営業を許可するものだった。アメリカ軍兵士による性暴力に悩まされた沖縄社会では、売春女性を管理することで問題解決を図ろうとした。著者は、売買春が被占領社会の構造に深く関わることを示し、性暴力と売買春を混同した売春禁止の言説が軍部と住民を接合させる特殊な位置にあったことを主張している。

第四章「Aサイン制度のポリテクス」では、Aサイン制度の特徴が売春禁止と性病検査の二重体制にあったことを明らかにした。この制度は自発的な売春という形式を作ることによって、女性に対する暴力の告発を困難にし、売春によって生活の糧を得る女性の権利を否定した。そして、同時にこの制度は性病検査を義務付けることによって、アメリカ兵の兵力を安全に衛生的に再生産し、性病罹患による戦力低下を防止しようとした。この二重体制によって、

売春女性には排除されるだけの存在ではなく、兵力の再生産と円滑な占領統治の遂行のために役割を担わされていたのだった。

第五章「挿入される国家と女性の分断」では、占領期沖縄で形作られた女性の運動を考察し、運動の論理の変遷とその問題を考察している。初期の運動では、「売春は悪である」という前提のもとに「風紀」や「教育」の観点が重要視された。八重島特設街の設置計画をめぐって、沖縄婦人連合会は、売春は「悪である」から「廃止すべきだ」、「家庭」や「教育」にとつても「悪」だと主張した。他方、設置賛成派は「悪である」けれども「必要だ」、「子どもの教育上悪い」から一ヶ所に集めると主張している。婦連の反対は、公権力による売買春管理、つまりは売春女性の身体の統制の非公然化を導いた。一九五六年本土での売春防止法の実施に伴い、沖縄の売春反対運動が再開し、その運動は本土の女性運動との交流の中で「女性の人權」に基づくものへと変化した。売防法の必要性を主張する者の論点は、国家が売春を「悪」とすることであり、沖縄の売買春反対運動には「女性の人權」概念と同時に「国家」の存在が取り込まれたのである。著者は、このパラダイムの最大の矛盾は、売春女性

への差別がまず存在し、そのうえで売春を女性差別として批判するため、逆に売春女性が女性差別に加担する立場に立つてしまう点であると述べている。つまり、売防法によって、売春女性は「更生」が必要な犯罪者とされ、売春反対運動は売春を否定する規範をより強化することにつながってしまうのだ。

続く第三部では、日本軍「慰安婦」問題におけるナショナリズムと女性の表象の関係を分析し、フェミニズムからの応答について考察している。第六章「英雄と売春婦を構築するナショナリズム」では、新しいナショナルリズム運動である「つくる会(新しい教科書をつくる会)」の言説を分析し、その中に込められたナショナルリズムとジェンダー・セクシュアリティとの関係性について考察している。つくる会は「慰安婦」に対する公的責任を否定するかわりに、「慰安婦」を「売春婦」だとするイメージ作りを行った。例えば、「慰安婦」に「軽んじられる気弱な日本兵」と「お金のために積極的に売春する慰安婦」のイメージが創り出された。そして、つくる会は「慰安婦」に性暴力被害にあつていても「国の名誉」と「家族の名誉」のために沈黙を求め、沈黙を破った女性に対しては、ただちに「売春婦」の表象を与えて、排除

している。こうして、主体的にやっている「慰安婦」に対しては、公的責任をとる必要がないという論理が作り出されることを著者は解き明かしている。

第七章「検閲する力と触発する力」では、女性国際戦犯法廷を取り上げたNHKの番組をめぐって起きた政治的圧力と改竄の問題について取り上げ、そこでの権力作用について分析している。改竄され放映された番組がいかなるものであったのかを考察し、フェミニズムからの批判の可能性をジュディス・バトラの理論を用いて検討した。著者は、この改竄問題は日本軍「慰安婦」問題が性差別と民族差別を構造化した現代日本社会のありようを表わしていると指摘し、性暴力を捉える視線と国家を批判する言説を結び付ける必要性を主張している。

第八章「『慰安婦』問題とフェミニズム」では、「慰安婦」問題に関して、被害者を支援する側が問題の所在をどのように認識したかについて取り上げている。これまでの調査から、「慰安婦」制度の被害者の大半は朝鮮半島や中国・東南アジア出身の女性だったが、公娼出身の日本人女性も存在した。慰安所での処遇では、日本人女性は将校を、植民地出身の女性には下級の一般兵の相手をさせられ

ていた。このことは、「慰安婦」問題において民族差別と「売春婦」差別が密接な関係性にあつたことを示している。さらに、日本人女性以外では、公娼や売春女性出身でない女性が「慰安婦」として選ばれたが、日本人女性についてみると公娼のみが対象とされた。つまり、日本人の非売春女性は「銃後の守り」として温存されたことにより、この問題には階級差別も重なっていたのである。その他にも、フェミニズム内の論争として、上野千鶴子と岡真理の論争を考察し、「慰安婦」問題を捉える視座を探っている。

第九章「女性国際戦犯法廷からポストコロナル・フェミニズムへ」では、女性国際戦犯法廷を論じた米山リサの議論を取り上げ、「グローバル・フェミニズム対批判的フェミニズム」の枠組みについて論じた。批判的フェミニズムの視点をより明確にするために、ポストコロナル・スタディーズの視点との接合の必要性を明らかにしている。最後の終章「売買春と女性の主体」では、第二部と第三部の議論を整理し、問いと第一部での理論的枠組に照らして検討を行っている。

本書は、女性の「分断」がいかに創られ、フェミニズム自体も「分断」を余儀なくされている現状を問うも

のであつた。本書のキーワードである「分断」について、著者は次のように述べている。『『女性』の表象では分断が構造化されている。そして、分断されるときに、『主体性』や『自由』あるいは『強制』といった語彙が道具として用いられる。であれば、わたしたちは『分断』そのものを見つめなければならぬ。同一性を想定して差異や分断に傷つくのではなく、分断にこそわたしたちの始まりがあること、そこに立ち上がる理由があり、乗り越えられるべきものがあることを見つめなければならない。『女性』の表象は分断から逃れられないし、分断を克服できるのは『女性』の表象から解放されるときである。」これが女性とフェミニズム運動に託す著者の「希望」であると思われる。「あとがき」に記されているように、本書は博士論文をもとに執筆されており、著者が大学院時代に苦闘した思想の跡でもある。本書を手にする、と、課題と内容自体からだけではなく、論理展開や文体、そして行間からもそのことを知ることができる。この苦闘の成果が、今後のフェミニズム運動に、さらには日本の思想界と日本社会にどのような影響を与えるのか注目したい。そして、著者がこの思想の営みをいかに発展させ、現状を打破するような可能性をさら

に広げてくれるのかを待ちたい。

日本軍兵士になったアメリカ人たち —母国と戦った日系二世—

門池啓史 著
元就出版社 (2010)

名古屋市立大学名誉教授
(むらい・ただまさ)
村井 忠政



評者はかつて著者の門池氏と名古屋市立大学大学院（人間文化研究科博士前期課程）における指導教員と院生という関係にあった。評者が当時大学院で、一九九〇年代以降盛んになった南米からの日系人出稼ぎ、明治期からの日本からハワイ、アメリカ、カナダへの日本人移民などの

テーマで課題研究（多文化共生）を担当していた関係で、門池氏と出会うことになったのである。大学院（社会人）入試の面接で氏は大学院進学の動機について次のように語ってくれた。それによると、氏は海軍士官であった父親の影響で幼少時から太平洋戦争に強い興味関心が芽生え、その後山崎豊子の『二つの祖国』や立花譲の『帝国海軍士官になった日系二世』などの著書に触発されたこともあって、いつの日かアメリカの日系人をテーマに本を執筆したいとの願いを抱くようになった。この夢を実現すべく、それまで社長を務めていた会社経営を友人に譲り、自らは会長職に退くことで時間的・精神的ゆとりをつくりだし、大学院に進学することを決意されたという。

本書で取り上げられている「日系二世」については、若干の解説が必要であると思われる。山崎豊子の前出書で「帰米二世」（米国の日系人社会では「キベイ」と日本語で言及されている）についてはある程度わが国でも知名度があり、すでに多くの先行研究も出されているが、本書で扱われている「日系二世」はこの「帰米二世」とも異なるカテゴリーに入るので、一般読者にはあまりなじみがないであろう。ここでまず「帰米二世」について定義すると、「日本人

移民の子どもとして戦前の米国で生まれたが、日本人としての教育を受けさせることを願う親の意向で祖国日本に帰され、幼少期あるいは青年期に日本の学校で日本の教育を受け、太平洋戦争勃発以前に米国に帰国した人々」ということになる。

これら「帰米二世」は、日本人移民の子として米国で生まれており、その意味では米国民には相違ないが、事実においては幼少より純日本式の天皇制軍国主義の教育を受け、思想においては日本人であり、米国生まれで米国の教育を受けて育った多くの日系二世（これを「純二世」と呼ぶ）とは、そのメンタリティ（精神構造）を大いに異にしている。

本書の対象とされている「日本軍兵士になったアメリカ人たち」の多くは、アメリカで生まれ育ち、アメリカ国籍も持っていたが、同時に日本国籍も保持しており（彼らの多くは二重国籍所持者であった）、何らかの理由（日本の教育を受けるためや里帰り、観光など）で日本に一時帰国したりしている間に日米開戦となり、帰米のタイミングを失って日本に留まっているうちに赤紙が来て日本軍人として召集され、母国であるアメリカ、連合国軍と戦わざるを得なくなった若者たちである。著者はこれら日系二世は、「純二世」とは無

論のこと、「帰米二世」ともメンタリティを異にしており、著者はこの呼称については「いふんと悩まれたようだが、結局「滞日二世」という呼称に落ち着いている。

本書のモチーフがどこにあったかは明らかである。運命のいたずらで図らずも日本軍兵士となり、祖国アメリカに銃を向ける結果となったこれら日系二世たちが、日本と米国という二つの国への忠誠心の間で「自分は何者なのか？」と自問自答し、アイデンティティが揺れ動いたであろうことは容易に想像できる。自ら進んで語られることのない彼らの内面に立ち入り、その心の奥深く隠された内なる声を解明すべく、著者は膨大な時間と金と労力を使って元日本軍日系兵士の方々に個別の聞き取りを実施したのだ。この努力には頭が下がる。しかしながら、皮肉なことに、聞き取りからは確かに戦争に翻弄された二世たちの声が聞こえてはきたが、アイデンティティが揺らいだような語りはあまり聞かれなかったという。つまり、本書執筆にあたって著者が当初に想定した仮説は、見事に裏切られる結果となったのである。著者自身のことばを次に引用する。

「私は日本軍に入隊した二世たち

が、自分がアメリカ生まれであるがためのジレンマ、揺れ動いたであろう心情に対して長年、強い関心を持っていた。しかし、二世のみなさんの語りからは、二つの国の間で揺れ動いたであろう心模様は、あまり聞こえてこなかった。第一回目の調査渡米終了時に、自分の想像とは異なった証言が多くあり、意外な印象を受けた。第二回目以降は、そういった私のそれまでの想像、つまり、二つの国の間でアイデンティティの喪失状態となっていたであろう二世の方を見つける調査旅行であつたといっても過言ではない。しかし、度重なる国内での調査を行ない、何度も調査渡米し、多くの元日本軍二世兵士たちにじっくりと話を聞くことができたが、誰一人として、当時アイデンティティ喪失状態であつた二世はいなかった、としか私には思えなかったのである。現状を静かに受け入れた二世の声しか聞こえてこなかった」（二六七頁～一六八頁）。

それでは、なぜ彼らは著者の想像と反して、自分たちが経験した過酷な運命を静かに受け入れてしまったのであろうか。このような疑問に対する解答として、著者はあるテレビ番組でのドナルド・キーン（コロンビア大学名誉教授）の次のようなこ

とばを引用している。「日本民族は、時として諦めが早いというか、何か大きな流れに対して、あまり抵抗しようとしませんね。日本語で『仕方がない』ってことばがこれを象徴しているんですね。欧米人などは、納得がいかないうことがあると、納得いくまで抵抗する傾向にあると思うのですよ。ところが、日本人はけっこう諦めが早いのではないですか」。

この日本人のメンタリティとして知られる諦観の思想（それがことばとして表現されると「仕方がない」になる）は、太平洋戦争時に強制収容されたアメリカの日系人の間でも多く見られたことは歴史が証明している。思うに、アイデンティティの喪失とか葛藤は、あくまで平時時の出来事であり、戦争という過酷な現実を前にして、二世たちは葛藤や苦悩などという言葉では表現できない、別次元の諦めに似た心情しか持ち合わせることしかできなかったのである。

本書の対象とされている在米の元「滞日二世たち」はいずれも高齢であり、すでに逝去されている方も多いと聞く。また存命でも病床に伏しており、すでに聞き取りが不可能な状態にある方も少なくないであろう。もし著者である門池氏が彼らのライフストーリーを記録に留めなかった

なら、これら証言者たちの多くは歴史から消え失せてしまっていただろう。このように考えると、アメリカ日系人史に本書が貢献するところは大きい。本書で取り上げられたライフストーリー以外に、その何倍もの聞き取り調査が行われていることを評者は知っている。これらの貴重な資料を眠らせることなく、さらに一歩踏み込んだ次回作が刊行されることを期待してやまない。

日本のシェイクスピア 上演研究の現在

小林かおり 編
風媒社 (2010)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
(たなか・たかこ)

田中 敬子



シェイクスピア上演史は、本書によると、研究分野として半世紀たったばかりだという。評者自身は英米文学専攻でも畑違いだが、学生時代に観たピーター・ブルック演出『夏の夜の夢』の斬新な舞台の印象が強烈なため、上演史研究がそんなに若い分野であるとは意外な思いがした。

しかも分野形成初期は上演記録蓄積に焦点が置かれ、上演史が包括的な文化批評として展開されるにはなお時間が必要だった。二〇世紀後半のポストコロニアリズム、フェミニズム、ポストモダンリズムなどを経て上演史はようやく沙翁のテクストの呪縛を逃れ、一九九〇年代から学問体系としての理論構築が本格的になった。そして二一世紀、世界がますますグローバル化する一方ローカル性が注目されるなか、絶好のタイミングでこのような研究書が出版された。

編者の小林かおり氏はすでに『じゃじゃ馬たちの文化史——シェイクスピア上演と女の表象』(南雲堂)で、英国シェイクスピア上演史の一環として『じゃじゃ馬馴らし』上演を各時代の文化や社会背景の変遷から考察し、高い評価を受けている。今回の編著は、氏が中心となって二〇〇八年第四回シェイクスピア学会で行われたセミナーに基づいたもので、執筆陣は気鋭の若手研究者も交え、野心的かつ充実した内容となっている。全体は二部構成で、第一部は個々の上演を取り上げた論文集、第二部はこの分野の既存のパラダイムや新たなパラダイムの可能性を検証するべく、英米圏のシェイクスピア上演研究史、パフォーマンス・スタディーズの動向、国内外の上演史を分

担して精力的に解説し、論じている。

本のカバーには二〇〇五年初演『NINAGAWA 十二夜』で尾上菊之助が演じた三役、主膳乃助、琵琶姫、獅子丸の扮装の三態の写真が使われている。ちょうど『NINAGAWA

十二夜』が初演、再演されたあとで、第一部ではこの舞台が格好の主題として多く取り上げられており、菊乃助が表紙を飾るのもうなずける。それはシェイクスピアの『十二夜』

という芝居が、ヒロインのヴァイオラの変装に示されるように、上演のさまざまな意匠によって新たな様相を展開できると暗示する。歌舞伎という異文化との遭遇も、「起源」としてのシェイクスピアを超えてグローバル化時代の新たなシェイクスピアを創造する提案になる。また菊乃助のあでやかな姿は一般読者をも引き付け、熱心な歌舞伎ファンや演劇愛好家に日本のシェイクスピア上演を考えてもらうきっかけになるかもしれない(その意味で、第一部がシェイクスピアの『十二夜』と『NINAGAWA 十二夜』の丁寧な比較から始まるのは親切である)。

さて本書の内容であるが、最初小林氏によって全体の内容、本書の意図が簡潔に示される。個々の論文でも日本のシェイクスピア上演史研究全体を視野に入れ、英米圏に追従

するのではないパラダイムを模索し、さまざまな研究スタイルの可能性を提示しよう、という意欲がよくうかがわれる。その目論見は非常に野心的で一時に達成されるとは思われないが、本書がそのための基本的文献となることは間違いない。以下、順を追って紹介する。

第一部冒頭の古屋論文は先に述べたとおり、『十二夜』と歌舞伎翻案の比較であるが、『NINAGAWA 十二夜』を視覚的聴覚的舞台美にすぐれた歌舞伎風翻案劇と結論する。舞台上の大きな鏡の使用、道化のフェステと執事マルヴォーリオが歌舞伎では菊五郎の二役であること、その他注目すべき点はよく整理されている。しかしそれらをどう意味づけるかという考察には至っていないうらみがある。次の末松論文は蜷川シェイクスピアの変遷を三期に分けて解説する。大衆にシェイクスピアを日本的にわかりやすく伝えるという反逆精神がかえって西洋でインパクトを持ったという皮肉など、要領よく紹介するとともに、演出と社会の文化的経済的情勢との関係にも目配りした内容である。しかし蜷川が海外では日本のシェイクスピアを引き続き上演する理由についての議論は避け、『NINAGAWA 十二夜』は、再演で様式美の中に時折差し込まれ

るリアリズムが成功していると評価している。初演と再演の差については、評者はテレビで放映されたロンドン公演を見ただけなのでコメントできない。しかし三番目の「観客はいかにして翻案を受容したのか——『NINAGAWA 十二夜』の場合」と題する佐藤論文によれば、『NINAGAWA 十二夜』について劇評を寄せた観客は、再演が歌舞伎としてよりこなれていたことを成功ととらえているようだ。彼らは再演のリアリズムと様式美の微妙なずれを見逃したのだろうか。佐藤の観客論は、シェイクスピア観客論の古典といえる笹山隆の『ドラマと観客』のような理想的観客を想定せず、ウェブ上のコメントなど実際の観客の反応をできる限りとらえようとする現代的な試みで興味深い。しかしその資料の扱い、専門家の受容との兼ね合いなど課題もあり、今後の発展を期待したい。四番目の阪本論文は「異性配役の身体」の上演について論じる。言語テキストによって構築された役と役者本人の身体の緊張関係を論じるサイモン・シェパードの論をひき、観客が認識する第三の身体を加えて劇場で共有されるイメージを考察すること、シェクナーのいう「濃厚な演劇性」をみるという論旨は大変興味深い。菊之助が二つの身体と同

時表現を行っても、男女の性が微妙に交錯した身体の二重性の表現とは異なるというのは、『NINAGAWA 十二夜』と蜷川のオール・メール・シェイクスピア・シリーズの差を見事に指摘している。宝塚のように、女性による男役の伝統もある日本の文化的背景を視野に入れて今後考察する必要性を示した点も刺激的だった。ついでガリモアは、シェイクスピアの翻訳を松岡和子訳中心に考察し、シェイクスピアのテキストの他者性は残しつつ、役者が演じやすいように翻訳する重要性を指摘する。さらにエグリントン論文は、グローバル／ローカル化したシェイクスピア作品の上演を欧米中心のパフォーミング・スタディーズのパラダイムで読み解く問題点を指摘する。そして日本の能狂言や韓国の民間招魂儀礼クツを応用した『オセロー』上演の比較考察から、東西二項対立を無効にできるパラダイム修正を試みる。第一部を締めくくる小林は、表象とそれを取り巻く文化的コンテキストの間のダイナミズムから生まれる「ドラマティック・パフォーミング・ヴィティ」というウオーソンの論をひき、栗田芳宏演出の『冬物語』を例に論じる。演劇から儀式へという、西洋にはない発想の演出を評価しながらも、演出家、上演史研究者双方が陥

りがちなエスノセントリックな議論の危険性にも警鐘を鳴らす。反オリエンタリズム一辺倒では二項対立からは抜け出せず、日本のシェイクスピア上演を語るパラダイムの模索はそう簡単ではないことが察せられる。

枚数も尽きたので、第二部については詳しく言及しないが、執筆者たちを総動員した上演史研究の解説や英米圏の研究で用いられるパラダイムの検証など、ここでの新たな理論構築への模索は、その広い視野、豊富な参考資料の提示とともに大変貴重である。個々の論文に時折表記の誤りなど、技術的な取りこぼしがあるのが残念だが、全体として日本のシェイクスピア上演研究の現在と将来の展望を示した、タイムリーかつ野心的で刺激的な一冊である。

毛髪で縫った曼荼羅 ——漂泊僧空念の物語——

日沖敦子 著
新典社（2010）

名古屋市立大学大学院人間文化研究所
(よしだ・かずひこ)
吉田一彦



べき書物になっている。ここで言う曼荼羅とは、正統密教の金剛界、胎藏界の曼荼羅のことではなく、日本の浄土宗で依用された「当麻曼荼羅」のことである。空念は、人々から髪の毛の喜捨を受け、それを用いて当麻曼荼羅などの仏画を製作する活動を行なった僧であった。

髪の毛で織られ、刺繍された曼荼羅は「髪繡曼荼羅」と呼ばれている。著者と髪繡曼荼羅との最初の遭遇は、本書第一章によると、二〇〇六年秋、京都の知恩院で行なわれた古本市でたまたま出会った大正時代の絵葉書であった。それは大分県宇佐市の極楽寺が発行した五枚の曼荼羅の絵葉書で、それに当時の同寺住職であった国東翻迷による略縁起が付されていたという。ここから著者の東奔西走の旅が始まった。

さっそく極楽寺（浄土真宗本願寺派）に調査におもむいたところ、髪繡当麻曼荼羅が寺に現存しており、その銘文から、空念という僧が延宝二年（一六七四）に十穀断をして貴賤の髪を集めて縫い始め、同六年頃までに完成したものであることが確認された。この曼荼羅は明治中期までは宇佐八幡宮に所蔵されていたが、のち極楽寺に所蔵がうつり、現在に至っているという。空念製作の髪繡当麻曼荼羅は、また、宮城県仙台市

青葉区の昌繁寺（浄土宗）にも所蔵されており、その銘文によるなら、こちらは男女八九六三人の髪を集めて作られたもので、元禄五年（一六九二）に完成したものであった。さらに、青森県南津軽郡藤崎町の摂取院（浄土宗）にも空念の髪繡当麻曼荼羅が現存し、同寺所蔵の曼荼羅の縁起から、空念が京都伏見の大樹院の僧であることが判明した。この大樹院は、調査したところ、浄土宗の本山の一つである知恩院（京都市東山区）の末寺で、現在の京都市伏見区榎町に存在した寺院であるが、明治初年頃に廃寺となり、現在は存在しないという。それでも、空念の所属が知られ、浄土宗の僧であることがわかった。

空念は、また、延宝六年（一六七八）に北野の成願寺（浄土宗、京都市上京区）にて髪繡釈迦涅槃図を、同七年（一六七九）に五条の莊嚴寺（時宗、京都市左京区）にて髪繡阿彌陀二十五菩薩来迎図を作り、奉納した。これらを調査したところ、前者は銘文を失なっているものの現存し、後者も部分のみであるが、現存していることがわかったという。摂取院所蔵の「摂取院之記」という記録によれば、空念は全国で六十六幅もの髪繡の仏画を作っており、その地域は北は青森から南は熊本に及んでい

るという。また、『平山日記』という記録によるなら、空念の活動は民衆たちの大きな支持を得ていたようで、空念は髪の毛を集めて曼荼羅を縫う「奇代の名人」であると評されており、空念のもとに参詣した男女は髪を抜かれながらありがたいといい、銭を出して空念を拝んだという。

著者は、空念の活動を、日本の民衆世界に広く展開した、漂泊するひじり（聖）たちの活動の一例として仏教史の中に位置づけ、また髪繡当麻曼荼羅を、一二、一三世紀以来連綿と作成されてきた髪繡の仏画の美術史の中に位置づけた。さらに、明治時代になっても、青森の海浦義顕（一八八五～一九二二、もと修験宗）のように、空念の影響を受けて髪繡の仏画を製作する活動を行なった僧が存在したこと、また清水賢善（一八六七～一九一四）によって、明治三三年（一九〇〇）～四一年（一九〇八）に貴賤男女数万人の髪で髪繡当麻曼荼羅が作成され、それが増上寺（浄土宗、東京都港区芝公園）に現存していることを論じている。

当麻曼荼羅には、また、有名な中将姫の説話がついている。中将姫の物語は、中世後期以降、広く日本社会に流布し、民衆世界においてもよく知られる話になっていった。空念は人々から「中将姫観音菩薩再来」

日沖敦子氏の最初の著書『毛髪で縫った曼荼羅——漂泊僧空念の物語——』（新典社選書三一）が刊行された。これは、一七世紀後期に、髪の毛で曼荼羅を作って諸国を行脚した空念という僧の活動を精力的な実地調査を行なって解明し、当時の民衆文化の一面面を明らかにした注目す

と称されたが、それは中将姫説話の社会的展開、歴史的展開という文脈の中に位置づけられる概念と読解すべきであるという。近代歴史学の父として知られ、帝国大学文科大学国史学科の初代教授を務めた重野安繹（一八二七～一九一〇、号は成斎）の『成斎文集』（富山房、一八九八年）においても、空念の活動は中将姫に重ね合わされるように理解されているという。

本書は、著者が発表した二本の研究論文、「髪續当麻曼茶羅と空念——近世前期の一僧侶の活動とその意義——」（『MUSEUM』六一八、二〇〇九年、東京国立博物館）、「髪續に込めた祈り——漂泊僧空念の歩み——」（『仏教史学研究』五二一一、二〇〇九年、仏教史学会）に基づいて、新たに一般向きに書き下ろした書物で、写真が多く掲載され、とても親しみやすく、読みやすい書物になっている。本書は、すでに、京都新聞（二〇一〇年四月二一日夕刊）、朝日新聞（二〇一〇年一月三〇日夕刊）などで紹介され、マスメディアからも好評を博している。

本書の成果としては、空念という決して著名ではないが、注目すべき僧の活動とその現存遺品を丹念な調査によって実証的に明らかにしたことで、平安時代末期から明治時代に至

る髪續の仏画の歴史の中に空念の活動とその作品を位置づけたこと、日本における仏教の歴史的展開の諸相のうち、民衆の生活文化にそくした方面の一樣相を具体的に明らかにしたこと、それを中将姫物語という説話文学の展開の一樣相として位置づけたことなどがあげられると思う。著者は、仏教史、美術史、民衆文化史、説話文学研究などの複数の研究分野を横断しながら、学際的に日本文化の一つの姿を明らかにしたと評価されるだろう。

最後に評者の注文を二つほど述べたい。一つは、今後、日本一国にとどまらず、アジアにおける仏教文化の展開の中に、髪續当麻曼茶羅や空念の活動を位置づけてほしいと思う。もう一つは、その中で、インド、中国、朝鮮とは異なる、日本の曼茶羅、あるいは当麻曼茶羅の特色を解明してほしいと考える。中国や朝鮮半島では、髪續の曼茶羅、仏画ははたして作成されたのか、されなかったのか。現存遺品はあるのか、ないのか。当麻曼茶羅や智光曼茶羅、あるいは天寿国曼茶羅のように、正統密教的な曼茶羅とは異なる独特の曼茶羅が、日本で、なぜ、またどのように成立し、展開していったのか。それらの中には、「女性と仏教」という文脈から語られる作品がいくつかあるが、

それらをどう評価すべきであるのか。これらは、いずれも今回の著書で設定された問題の枠組みをはみ出す論点となるものであるが、今後検討していく価値のある課題になろうと考える。

中国人就学生と中国帰国子女

山田陽子 著
風媒社 (2010)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
(なりた・てつお)
成田 徹男



同六月、その精力的な活動には感嘆する。

「就学生」という語は、一般にはなじみがうすいであろう。大学など留学先が決まっている「留学ビザ」ではなく、「就学ビザ」を取得し、主として日本の大学や大学院への入学を目標として日本語学校などで日本語を学んでいるのが「就学生」である。在留資格は二〇一〇年七月「留学」に一本化されたが、それまでは「留学」と「就学」とに分けられていた。また、「中国帰国子女」は、一般の「帰国子女」と同列ではない。仕事の都合などにより海外で生活した日本人の子どもで、外国で初等・中等教育を受けて帰国した者を「帰国子女」と言うが、「中国帰国子女」は、中国残留婦人・孤児の帰国にともなって来日した、その家族の子どものことである。したがって、日本に来る前は中国語を母語とする「中国人」だったのである。

日本の外国人登録者数は二〇〇万人をはるかに超え、中国籍はその三割を占めている。長期に日本に滞在して「日本で生活する」中国人が数十万人いるのである。「日本で生活する」限り、彼らは、程度の差はあれ、日本語を身につけて使っているわけである。その中で、大学に在籍する留学生や、一九八四年に設立された「中

国帰国孤児定着促進センター」(のち一九九四年「中国帰国者定着促進センター」に変更、現在は埼玉県所沢市一か所のみ)の対象者となる中国帰国者については、公表されている資料や調査があつて、その状況や支援のあり方がわかる。しかし、中国人「就学生」については、その生活実態はよくわかっていなかった。また、中国帰国者の家族として来日した「中国帰国子女」については、一九八四年以前はもちろんそれ以降についても、各定着地へおもむいた後、その自治体任せであり、そこでのような日本語教育を中心とする支援がおこなわれたか、一般には不明な点が多い。

本書では、この空白を埋めるように、第Ⅰ部では、アンケート調査と聞き取り調査を中心に中国人就学生の置かれている状況や生活の実態に迫り、第Ⅱ部では、現地での調査で掘り起こした資料をもとに一九七〇年代に岐阜県泰阜(やすおか)村でおこなわれた、中国帰国子女への日本語教育を中心とする支援について、そのあり方を明らかにしている。

後者が最近の事例ではないのには事情がある。前述したように、「中国帰国子女」は、中国帰国者本人ではなく、その家族として来日した。帰国者の定着先の公立学校に入つて学

校教育を受けることになる。文部省は、一九七六年から中国帰国子女教育研究協力校指定制度をつくり、受け入れ校向けの研修制度、後には「手引き」や教材もつくり、教員の加配もしてきた。しかし、どのような教育がおこなわれたか、についての記録は各学校か、せいぜい所属教育委員会への報告にとどまり、また、個人情報問題もあつて公開されにくいため、その実態はあまり知られていないのである。筆者は、中国帰国者の調査に泰阜村へ何度も出向き、その中で、きわめて早い時期に帰国者の子女への日本語教育がおこなわれていたことを知り、村や学校の協力を得て、残された資料を掘り起こした。

中国人就学生の調査をとおして見えてきたことは、就学生自身も、日本語学校も、教えている日本語教師も、授業で日本語を教え学ぶことに手いっぱい、余裕がないことであると思う。筆者は、国・県・市町村の積極的な支援が緊急の課題だとしている。一方、泰阜村で実践されたのは「村ぐるみのサポート」であった。筆者は、この、いわば「泰阜方式」をヒントとして、就学生も含めた日本語を母語としない日本語学習者に対して、地域とつながった教育、母語保持とメンタルサポートの両面

で有効な、同国人ネットワークの構築、といった方法を提案している。そして、博士論文の結論から一步踏み出して、「私たちに何ができるのだろう」と題する巻末の文章で、「地域全体で支えていく」ことを提唱している。

資料が乏しいせいでも、一部をもって全体を推し量らねばならなかった点があり、また「泰阜方式」への思い入れから、その良さを評価するあまり、国の支援や各自治体の支援の不足を強調しすぎたさらいはあるものの、説得力のある論が展開されている。近年の裁判を通して、中国帰国者に対する国の支援が、日本語教育をふくめて不十分なものであったことが認識されてきている。また、外国人労働者の増加にともない、その子どももふくめて、日本語教育が必要とされているのに、企業の対応には限界がある。不況で帰国せざるをえなかった労働者の子どもの中には、日本で育つたために、年齢に見合ったような母語運用能力が十分に身についておらず、不登校になっていることも多いと言われる。その原因のひとつが、日本での受け入れ体制、教育のあり方にあることは間違いない。そのような現状の問題に対して、本書は、貴重な解決の観点を与えてくれると期待される。



中国と博覧会

—中国2010年上海万国博覧会に至る道—

柴田哲雄・やまだあつし 編著
成文堂 (2010)名古屋市立大学大学院人間文化研究科
(やまだ・あきら)

山田 明



二〇一〇年一〇月三十一日、上海万博は六ヶ月の会期を終え閉幕した。累計入場者数は七三〇八万人で、一九七〇年の大阪万博(六四二二万人)を上回って史上最多となった。

本書は「上海万博の開幕を機に、改めて中国における博覧会史について考察しようとする趣旨から編纂さ

れた。」本書は中国の中央・地方政府が主催した博覧会だけでなく、「日本の植民地支配や侵略戦争のさなかに、台湾・中国・日本において日本側が主体となつて挙行了た博覧会に対する、中国(台湾)側の関わりについても」とりあげている。単に中国の博覧会史にとどまらず、日本による植民地支配や侵略戦争との関わりにも注目している点に本書の特徴がみられる。

「中国二〇一〇年上海万国博覧会に至る道」という副題がついた本書は、第一部「中国における博覧会の歴史」と第二部「日本の博覧会と中国・台湾」からなる。第一部は第一章「清朝末期・万国博覧会と南洋勸業会」、第二章「中華民国期・西湖博覧会」、第三章「中華人民共和国・社会主義路線期・毛沢東時代の展覧会」、第四章「中華人民共和国・改革開放路線期・中国'99昆明世界園芸博覧会と中国二〇一〇年上海万国博覧会」、第二部は第五章「台湾・展覧会の始まりと台湾博覧会」、第六章「中国・汪精衛南京政府下の大東亜戦争博覧会」、第七章「日本・愛知県の博覧会と中国・汎太博を中心に」の七つの章から構成されている。

本書の内容は歴史的にも多岐にわたり、専門外の評者が詳細にコメントするのは困難なので、中国・台湾

の政治と博覧会、中国の経済発展と博覧会史、日本の万国博覧会と比較するうえで示唆に富む指摘を本書から紹介していきたい。

・博覧会という「イベント」は、時代の象徴である。清朝末期の博覧会も、当時欧米列強に侵略された中国の再興を工商業から行う、また一般国民への啓発的な役割を持ったといわれる。万国博覧会では、欧米で中国の特産物が紹介され評価されると同時に、中国側は欧米の科学技術や文化芸術に触れる機会を持った。科学的なものに関する覚醒と、文化的なものでは中国的なものへの郷愁を改めて人々に感じさせた。

・中華民国期の西湖博覧会は、なにより国貨(国産品)振興をめざした。これは中国ナショナリズムと密接に結びついており、日本の大陸侵略と対峙しあっていた。内容的には単に国貨振興にとどまることなく、総体的な国家建設の促進をも趣意とすることにより、中華民国期初の内国博にふさわしい威容を備えるに至った。

・中国改革開放期の昆明園芸博覧会、BIE(博覧会国際事務局)が承認した中国初の国際博覧会であり、一九九九年五月一日から一八四日間、間にわたり開催され、約九四〇万

人が入場した。テーマは「人と自然―二一世紀に向かう」であり、具体的には庭園、花、緑、および関連する技術や施設を展示し、それらの進歩を促進して環境の質を普段に改善することを目指した。開催地の雲南省は中国全体の貧困人口の一割近くを抱えていた地域であり、一般労働者は高額な入場料により参観できず、万博にも無関心にならざるを得なかった。昆明園芸博覧会の実施が、改革開放期の中央政府や省政府による上からの開発主義の産物であることを改めて想起させる。

・二〇一〇年上海万国博覧会は、国内総生産が日本を上回り世界第二位となった中国の経済発展を象徴するものといえる。会場は上海中心部の三二八ヘクタールもの広大な土地であり、万博史上例をみない一万八〇〇〇世帯が立ち退きの対象となった。上海万博のテーマは「より良い都市、より良い生活」であり、「都市多元文化の融合」「都市科学技術の革新」「都市コミュニティの再生」「都市と農村の対話」という五つのサブテーマを掲げる。博覧会の開催関連インフラ建設に総額四兆円超もの資金が投じられ、中国の経済発展を加速させたが、BIE執行委員から「過度な商業

主義」との批判を浴びるほどであった。

・台湾博覧会のトビックスとして紹介されている愛知名古屋館の写真が興味深い。名古屋城を模した五層楼閣であり、博覧会でも特異な外観を誇っていた。愛知名古屋館の館内は外観と全く異なり、名古屋城や愛知の景観を宣伝するのではなく、愛知名古屋の商品を展示し販売も行う施設であった。売り上げは順調で会場内第三位であり、今日同様、経済重視の愛知名古屋の姿をみるようである。

・一九三七年に開催された汎太平洋平和博覧会（汎太博）は、名古屋港開港三〇周年を記念した規模の大きな博覧会であった。汎太博における中国展示は、立派な展示施設と内容、にぎやかな記念日というように大変目立っていた。とはいえ、満州事変や華北分離工作による中国の分裂状態を反映するような、分裂した展示のされ方であった。博覧会閉会から一カ月余り経った七月七日、日中戦争が始まった。会場跡地とその周辺は戦争のために活用され、博覧会の名称で謳ったはずの平和は遠のいた。

唯一、港区役所前の平和橋のみが今日も博覧会の施設として残っている。

このほかにも本書から多くの情報や知見が得られたが、評者の問題意識と関わせて参考までに二点ほど記しておきたい。

第一に、最後に紹介した汎太博に代表されるように、博覧会による名古屋の都市発展の歴史である。

名古屋都市センター『景観が語る名古屋』（一九九九年）の「都市名古屋の一世紀」も次のように述べている。名古屋は昔から「博覧会太り」する都市として知られている。一九一〇（明治四三年）に鶴舞公園で開かれた「第一〇回関西府県連合共進会」では、この会場へのアクセスとして、新栄町から会場前を経て上前津に至る道路が整備され、共進会のムードを盛り上げるため、この道路と広小路通、南大津通等に約三〇〇灯のガス灯が設置されている。

本書でも紹介された汎太博では、東海道線名古屋駅、桜通、中央線鶴舞駅、東山動物園などが整備されている。とりわけ名古屋駅は、機能主義的建築の端正な外観と東へ真っ直ぐに伸びる幅員約四四メートルの桜通によって、都市の表玄関にふさわしい堂々たる景観を誇った。

第二に、「経済大国」を世界にアピールした日本の大阪万博、いま急成長を遂げる中国の上海万博、二つの巨大な国際博覧会の歴史的検証と評

価である。

「万博公園冬景色」をテーマにした朝日新聞二〇一一年一月一日社説は、寒風のなかの大阪・千里の万博公園をレポートする。万博公園に近い千里ニュータウンは、来年、街開きから半世紀を迎える。世界中から人と資本があつまる活況の上海に対し、大阪は昨今、負け組の代表の観がある。しかし、四〇年後の上海万博跡地に、千里より美しい光景が広がっている保証はない。好況もいつかは終わる。千里のありさまは大阪と関西の、そして日本の将来を先取りしているだけでなく、中国やアジアの未来の姿を示しているのではないか。

本書から中国・台湾の歴史と博覧会、日本による植民地支配・侵略戦争と博覧会について多くのことを学んだ。中国・台湾の歴史と博覧会にとどまらず、日本の大阪万博や愛知万博に関心のある多くの人にも読んでほしい。

写真で綴る名古屋の教育

名古屋教育編さん委員会 編
(2010)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(さかい・よしき)

阪井 芳貴



です。

そして、その事業の成果の第一歩が、一月に刊行された本書『名古屋教育史写真集 写真で綴る名古屋の教育』ということになります。まさに、待望の書ということですが、その第一歩が、市民にもわかりやすい写真集という形で公開されたことは、高く評価できると思います。それも、いかめしいハードカバーの分厚い装丁ではなく、九〇頁というコンパクトかつソフトな装丁であることも、親しみやすさを意図した編集姿勢であることが伺われます。

全体は、次の五章に分かれています。すなわち、「義校の創設と名古屋の教育」「広がりゆく名古屋と教育」「戦時体制下の名古屋の教育」「名古屋の復興と新しい教育」「まちづくりの進展と教育の展開」の五つで、それぞれ、明治期・明治末期・昭和初期・戦時期・戦後・昭和中期・昭和中期・平成初期という時代区分による章立てになっています。そして、二つの特集と九つのトピック、四つの解説が合間に挿入されるという構成で、巻末には「学校園沿革表」が付録として置かれています。

基本的に写真集ですから、写真に時代を語らせるということになるのですが、それぞれの写真には、丁寧なキャプションが付されており、読

者の理解を助けてくれます。執筆・編集者の本書への意気込みが、そこに集約されていると思いますが、本書の丹羽孝教授が担当した第V章など、おそらく明治期などに比してはるかに膨大な資料が残されているはずで、そこから時代と教育の関係を的確に表し、かつ名古屋らしさを示すというのは、かなりの見識と労力を要する作業であったと思われます。

丹羽教授は、教育制度と教育内容、ハードとソフト、子どもたち自身の活動、などに重点を置いて写真を選択・配置していますが、そこには一貫して、子どもたちのために教育がある、そのために時代の変化に同じ教育も絶えず展開・変容してきたのだ、という主張が読み取れます。

さて、本書において目玉となるのは、教育史編纂事業を進める中で新たに発見された資料を用いた二つの特集です。一つは、昭和二年発行の『記念帖』で、愛知県内のすべての小学校の写真を収載したもので、ここから名古屋市内の小学校一六校の鮮明な写真が紹介されています。二つ目は、伊勢湾台風の記事『伊勢湾台風災害誌』などの紹介で、そこからは、この災害のもたらした教育への被害の甚大さと、それを克服しようと努めた人々の心が伝わり、写真の持つ説得力をあらためて認識させら

れます。

いっぽう、もうちょっと踏み込んでほしいと感じたのは、昭和前期の戦争に教育が巻き込まれていく時代の取り上げ方でした。種々議論のあるところだとは思いますが、冷静な分析と明確な反省のもとに、この時代を鋭く論じていかねばならないのではないかと思います。

さらに、本書は「いつでも子どもたちをまんなにして」という「名古屋の教育の伝統」を柱に編集されているとのことですが（表紙にも副題的に明示されています）が、この伝統がどのようにして「伝統」となったのか、そもそも誰がいつ打ち出したのか、などがよくわからなかったのが、残念でした。『名古屋教育史』の本編で、それが明らかにされるのを期待したいと思います。

名古屋市には、『教育史』が編纂されていなかったそうです。近代教育のシステムが整ってから百数十年経つ中で、貴重な資料の散逸や名古屋の教育を担ってこられた方々の証言もほとんど得づらくならないという状況に鑑み、ようやく二〇〇六年度から教育史編纂事業が始まったとのこと

地域に根ざす次世代育成支援としての

〈学―学―社連携〉の試み

―小学校における音楽のアウトリーチ活動報告（二〇〇九年度～二〇二〇年度）―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

（あるが・かつあき）
有賀 克明

名古屋市立大学大学院博士後期課程

（かじた・みか）
梶田 美香

研究代表者…有賀克明（人間文化研究科 教授）

分担研究者…梶田美香（人間文化研究科 博士後期課程）

皆元恵理子（人間文化研究科 博士前期課程）

研究協力者…岩田幸子（名古屋市立A小学校教諭）

研究の背景および目的

近代学校の成立後、一四〇年近くを経ようとしているが、この間の経過からすると子どもの教育は基本的には学校の「独占事業」化が強化される方向に進んできたと言える。

とはいえ、そのことによって生ずる学校と社会との疎隔、言い換えれば、地域社会と学校との間の「壁」もしくは「溝」の拡大はしばしば批判の対象になってきた。社会教育の側から見てそうであるだけでなく、学

校の側も地域社会とのつながりの希薄化が子どもの教育と学力の抽象化をもたらす原因であるとの反省をすることも少なからずあった。そのような立場から、地域に学び地域を生かす教育実践を意識的に作り出そうとする動きが一九七〇年代後半を中心に全国各地に生まれたこともある。

一方、家族形態の変化、少子化の進展などが直接間接に影響して、若い親たちを中心に子育てに対する自信喪失現象とも言える状態が広がり、それがまた少子化を加速する悪循環となつて、今日の日本の合計特殊出生率を国際的にも低水準に押し留める原因の重要な一つとなっている。

もちろん少子化の原因は、おそらく社会の経済状況はもちろん、文化的背景、生物学的要因など多くの要素が絡み合う複雑なものである。そのため、国や自治体は、子育て支援、次世代育成支援をさまざまな方向か

ら打ち出して、ある程度の効果をあげているものの、現状では人口維持さえ覚束ない。政府などの少子化対策の内容は多岐にわたっているように見えるが、実質的には「仕事と子育ての両立支援」を含めて、「産めよ増やせよ」を基調とする子育て支援に重きがおかれがちである。したがって直接的には家庭、保育施設、社会における乳幼児の保育環境を整えることに力点が置かれていると言えるよう。

無論そのことは重要である。しかし、子どもをもち育てることへの躊躇は、必ずしも乳幼児を中心とする保育の困難さのみに起因するものとは限らない。むしろ学校教育段階での経費的なものと相俟って、子どもが自立するまで「きちんと教育すること」ができるかどうかという不安に根ざすものが強いのではない。未だに緩和されることのない学歴・学

校歴信仰の根強さはその典型である。それは、結婚後まだ子どもを授けてない夫婦でさえ、将来のわが子の受験学力達成競争についての不安を強く持たざるを得ないような、今日の教育観と教育状況の反映であるとも言えるのである。

本プロジェクトは、以上のような状況下で親が安心して子どもを産み育てる条件の一つとして、学校を舞台とする教育現場に学校と社会とを直結する装置が整えられることが必要であることを、具体的な実践に基づいて議論し提案しようとするものである。そのような「装置」整備にはいくつかの手法が考えられるが、当プロジェクトでは社会における教育的資源として、本学の大学院生・学生、NPO法人、および公立文化ホールを活用した実践例の創出を企画した。以下、具体的な研究計画の概要を述べる。

研究の全体像とその意義

一、研究代表がコーディネータとして、近隣の小学校（名古屋市立A小学校）と音楽教育研究者・演奏家（本学院生、研究員ほか）、公共的文化ホール（例：文化小劇場、芸術センター等）、管理栄養士（栄養教育専門家＝本学院生）、本学院生、NPO法人

などを結びつけ、音楽科教育、食教育、理科教育、総合学習等、小学校における教育内容の一部の再構成を図る。このことにより、教科書にしばられて学校での生き生きとした学びを創造することが困難な状態になっている部分を活性化し、子どもに学びの新しい姿を提供するとともに、学校（教師）、親、地域に教育観の転換を促す。

二、小学校の教育実践に「参加」する社会的資源としての音楽家、管理栄養士、保育士、院生・学生は、所与のフィールドでのアウトリーチ活動を通じて、自己の社会的「資源」としての意味を再確認し、そのあり方に評価・反省を加えることで、音楽や食など、自分の「資源」文化の発展に寄与することが可能になることが期待される。

研究計画

一、音楽演奏家および公共的文化ホールのアウトリーチ活動の一環として、地域の小学校の音楽科授業の再構成を、学校の音楽科指導教諭との共同作業で企画・実施する。

二、管理栄養士のアウトリーチ活動として、同小学校の食育や、食

育活動に携わる地域NPO法人に積極的にかかわり、通例の栄養指導のみならず、子ども、教師、親に対する「食」「栄養」の本質的な理解、その上に立つ広く文化的・歴史的な意義、食の生産と消費の関係の見直し等社会的意味の捉え返し等々を提案・提供する。

三、音楽等教科学習や総合学習における、食と音楽のコラボレーションの追求。これにより、学問・芸術と教科との対応関係を見直し、子ども・教師・親の教育観、学習観に一石を投じる。

四、学部学生による同小学校への教育参加。過去二年ほど同小学校の生活科授業には、研究代表のゼミ生が部分的にかかわり、授業づくりに協力してきた。その実績を踏まえた上で、生活科以外の教科や総合学習での連携を追求する。

五、以上の活動についてその都度、小学生、教師、親およびアウトリーチの実施主体側の意識調査を行って効果測定を行い、連携の仕方についての改善策を講ずるとともに、これらの連携を小学校・大学・地域社会をフィールドとして展開していくことの次世代育成支援としての意義を

まとめていく。

研究結果―音楽科授業について

学校側の要望もあり、この二年間はA小学校における音楽科教育と食教育の二つの分野に限定してアウトリーチの実践を進めてきた。このうち、食教育については、総合的な学習の時間、給食の時間などを活用して一年あまりにわたりアウトリーチ活動を活発に行ってきたが、その後、実践を担ってきた大学院生の体調の関係で中断を余儀なくされた。一方、音楽科のアウトリーチ活動については、ひとまず完結したので、今回は音楽科の授業の再構成をめざすアウトリーチの実践について以下報告（文責：梶田美香。一部、有賀により修正）する。

小学校の音楽科教育は、主に「表現」（歌唱・器楽・音づくり）と「鑑賞」に大別されている。しかし、圧倒的に歌唱と器楽による「表現」に多くの時間が割かれており、「鑑賞」は軽視されがちである。様々な要因がこの現象を引き起こしているが、本プロジェクト研究においてはこの現状の打開を図ることを目指して、「鑑賞」を中心に取り扱うこととした。従来、学校における「鑑賞教育」はレコード、CD等の録音媒体によっ

て行われることが多いが、学校音楽を芸術に接触させる機会として考えた場合、この現状は甚だ不十分だと言えるよう。「子どもに、本物の芸術を」という多くの親の要望に、これまでの学校の鑑賞教育は応えられるような状況にないのである。

一方、学外に目を転ずると、一九九〇年代以降に急増した公立文化ホールが中心となり、学校で生の演奏を鑑賞する機会を創出するアウトリーチ活動が活発化し、近年はほぼ定着しつつある。そこで本プロジェクトでは、市民が芸術をより身近に感じingことを目的としているというこのアウトリーチ活動を、学校鑑賞教育に位置付けることを試みた。それにより、芸術の分野において「きちんと教育する」ことの可能性を作り出すことを期待したのである。加えて、表現領域の中の「音づくり」についての実践も行った。「音づくり」は、その重要性にもかかわらず、鑑賞領域と同様に軽視されがちだからである。

まず鑑賞領域での実践を紹介する。二〇〇九年度は、演奏家による生演奏の鑑賞と、実際に楽器に触れるなどのワークショップを組み合わせた授業を七回行った。筆者は演奏（ピアノ）と授業のコーディネーターを務めた。また、地元で演奏活動を行

っているヴァイオリニスト、弦楽四重奏団、アイリッシュ・ミュージックバンドなどの協力を得た。

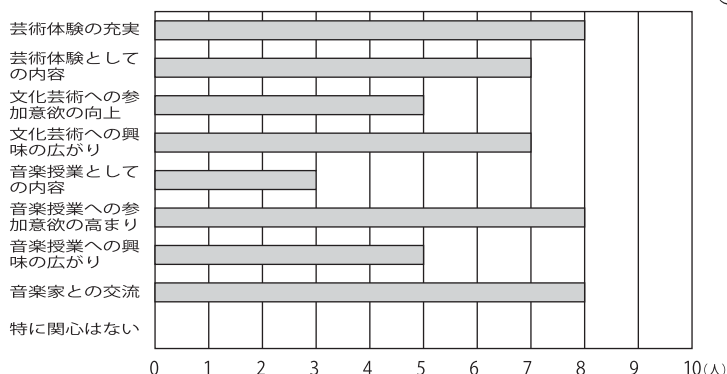
授業は学校の主として音楽室で、子どもたちに生演奏を間近に聴く体験を一〜二カ月に一度の頻度で提供した。このような体験は子どもたちにとって非日常であるため、とかくインパクトの強さに注意が向けられがちである。しかし、実践回数が多くなると、インパクトの強さを通り越して、楽器、演奏曲目、演奏者、音の種類や性質など、多岐にわたる対象に興味、関心を向けさせることができた。二〇一〇年度もほぼ前年度と同様の内容で継続している。

次に表現領域では、芸術工学研究科の水野みか子教授（作曲）の協力を得て、子どもたちと作曲家とのコラボレーションによる楽曲作りを試みた。完成した楽曲を子どもたちによるリコーダー等の演奏と筆者のピアノ演奏とで発表した。実践期間中に子どもたちは慣れない作曲という作業や、難易度の高い作品の演奏に取り組んだため困難を感じることも多かったようだが、知識を具体的な形で理解・習得し、また充実した器楽活動を行うことで、音楽表現の楽しさや喜びを初めて経験することができた。加えて、困難に向かって努力したり、仲間同士で助け合ったり

するなどの光景も見受けられ、教育的効果の広さと高さが把握できる実践であった。二〇一〇年度には、名古屋芸術大学の協力をも得て、現在進行中である。

教育的効果の高さが認められた本実践は、保護者にとっては「きちんと教育する」ことを実感する機会となったかどうかについて調査するために、二〇〇九年度の実践終了後に、アウトリーチ活動への関心についてアンケートを行った（回答者は一〇名）。

アウトリーチ活動に対する保護者の関心



グラフからは、芸術体験としても音楽授業としても概ね保護者が満足したことがわかった。本プロジェクト研究ではこの結果を、芸術面において子どもたちを「きちんと教育する」ことに対して保護者を支援ができた結果ととらえたい。本実践は決して学習指導要領に沿った内容ばかりで構成されていたわけではないため、現行の学習指導要領に明確に位置付けていくことは容易ではないが、地域から学校教育への参加が、子どもたちに芸術を享受させる機会を創出できたことは確かではないだろうか。

当研究報告は、紙幅の関係でここまでとするが、研究の成果は梶田により音楽教育やアウトリーチに関係する学会、研究会や、学会誌等での研究発表の内容に反映・結実している。

シンポジウム「越境文学の現在―中国語文学と日本語文学を中心に」

名古屋市立大学大学院
人間文化研究科
(つちや・まさひこ)
土屋勝彦

二〇一〇年十二月十八日、名古屋
市立大学滝子キャンパス一号館会議
室において、科研費基盤研究B「世
界文学における混成的表現形式の研
究」(平成二〇一二年度)による上
記シンポジウムが行われた。招待作
家は、神戸国際大学教授の毛丹青氏
と法政大学国際文化学部教授のリー
ビ英雄氏であり、コメンテーターと
して沼野充義氏(東京大学教授)、西
成彦氏(立命館大学教授)、谷口幸代
氏(名古屋大学准教授)、共同研
究者として田中敬子氏(同大学教授)、
山本明代氏(同大学准教授)が参加
した。

まず毛氏の講演「現代中国文学に
おける越境性」の概要を述べる。毛
氏は、中国における越境性について
二つの面を指摘した。つまり、国家
戦略としての越境性と個人としての
世界との関わりという二点である。
現代中国文学についてはこの三〇年、

つまり一九八〇年代以降の流れを見
ると、まず莫言さんの『赤いコーリ
ヤン』が刊行されたのが八五年頃だ



つたが、今年ノーベル平和賞をもら
った民主化運動家の劉曉波さんとも
当時自分は面識があった。八九年の
天安門事件の直後に戻ってきた劉さ
んは逮捕されて、自分は政治とかか
わりを持ちたくないの日本にとど
まったという。文化大革命後の八〇
年代中国文学は、傷跡文学からルー
ツ文学へ移行していく。八〇年代半
ば以降は、人間の葛藤が文明化とつ
ながっていくような中国の家族の物
語が台頭してくる。莫言の『赤いコ
ーリヤン』もその一つであり、張芸
謀(チャン・イーモウ)の映画化に
よって有名になった。つまり映画に
よって世界でも注目されていく作品
になったという受容形式流行の始ま
りだった。一方同時代の日本では社
会との関係を拒絶しようとする村上
春樹の『ノルウェイの森』が出てき
たが、当時の中国ではほとんど受け
入れられなかった。その後の中国に

おける村上ブームは九〇年代後半以
降のことであり、国民生活が豊かに
なってからである。その後、蘇童(ス
ー・トン)の小説『妻妾成群』が原
作の映画『紅夢』(一九九一年)や、
一九四〇年代の内戦に翻弄されつつ
もひたむきに生きた民衆を描いた、
余華の『活着』(一九九二年、映画
化一九九四年)などで中国文学が広
く世界に知られるようになった。それ
から九〇年代に入ると、衛慧の『上
海バビリー』(一九九九年)がその自
由奔放な女性の生き方と大胆な性描
写で一躍注目されたが、この上海と
いう言葉を冠した諸作品、例えば、
韓寒の『上海ビート』(二〇〇〇年)
などがその後続々と生み出される。
この小説は、過酷な受験戦争と恋愛
を描いた若手作品であり大ベストセ
ラーとなった。最近では閻連科の『丁
庄の夢―中国エイズ村奇談』(二〇〇
六年)という小説が現れたが、これ
は河南省の売血とエイズ感染の実態
を描くセンセーショナルな内容のた
めに出版差し止めになった。しかし
今になって中国は人道的な家族愛を
描く作品だとして売り出そうとして
いる。国家が文化活動に力を入れて、
エイズキャンペーンの一環としてこ
うした作品を認め始めたりするので
ある。最近のベストセラーでは、郭
敬明の小説『悲しき逆流』は河に

なる（悲傷逆流成河）』（二〇〇七年）が挙げられるが、これは若い男女の純愛物語と人間関係を描いたものである。これは日本のAKB48みたいなもので、著者の郭さんは、出版プロダクションを設立し、専属作家たちの小説を次々ベストセラーに仕立ててきたが、その大きな背景は、大学の増大とともに郊外型の大学が増え、他に娯楽がない地方の学生たちにとって読書が唯一の趣味になっているという事情がある。そのため大量の青春小説を生み出す出版社も現れた。（日本のライトノベルの隆盛に近いだろう。）余華が二〇〇五年に出した『兄弟』では、文革篇と解放経済篇の二巻構成で、弾圧恐怖の時代から拝金主義時代への変化を家族の物語としてリアルに描き感動できる話となっているが、それを読むとヨーロッパで四百年以上かかっていたイデオロギーの経過が中国ではわずか四〇年間で完成していったような感覚を覚える。また作家協会というのが国家の予算で動いており、その会長は実質的に大臣クラスの人物になっているが、果たしてこういう公的な文壇システム（文学活動支援体制）がいかどうか疑問も残る。しかし外文局が動いて、中国文学の外国語翻訳にも多大の予算を投入しており、世界中のブックフェアに進

出しているという。文化産業への投資が中国文化の真の豊穡性につながるかどうかは分からないが、映画産業や文学産業を梃子にして文化の世界進出を図る姿勢が窺える。

自分が創作言語として日本語を選んだ理由として、日本語のほうが包容力があり解釈可能性が広がり、ある種の快感があり、中国語ほど表現が重くないところにあるという。それゆえ外国人で中国語を使って創作する人はまだほとんどいない。また大江健三郎さんと莫言さんの対談を通訳したときに、仏文出身のインテリたる大江さんの抽象的な文学理論的な話と、体験したことを深めて巧妙に話を作っていく実体験派の莫言さんとの対話を面白く思ったことから、文学の越境性を感じたこと、また欧米に移住しその言語で創作する越境的な中国人作家たちや日本語で創作する中国人作家たちは、今後さらに増えてゆくと同時に活躍が期待されると結んだ。

討論では、現代中国における検閲の問題や「内的亡命文学者」の問題が出されたが、敏感な政治問題に関わることについては今後もしばらく締め付けが厳しいだろうとのことである。また日本が明治時代以来百年かかって作り上げてきた西洋精神との葛藤のようなものが、三〇年であ

りやされてしまったという現代中国の文学的流れについての批判的質問には、残念ながらそれが現実であるとの回答があった。またコメンテーターからロシアでも事情はよく似ており、ペレストロイカ以降一〇年でポストモダンの文学まで来てしまったという。また軽い文学の隆盛も同じ現象とのことである。最後に毛氏は、時代のテンポがハイテクによってさらに進み、哲学や倫理が追いつけなくなり、人間は統御できないだろうと述べた。

次に、リービ英雄氏を囲む文学座談会として行われた第二部でも、話題が多岐に渡ったが、そのうち多くに對話者の質問に対するリービ氏の意見を中心として概要を述べる。

リービ氏は、作家にとっての経済的側面と純文学との関係について、中国における現代文学の受容を見る限り、エンターテイン系の作家がベストセラーとなり、純文学系の作家は経済的に恵まれていないという状況を説明し、『上海ベイベー』を書いた智慧と重厚な純文学作家である莫言とを例に挙げた。また、もともと排他的な日本の文壇にあって、外国人が創作することは難しかったが、それを突破したリービ氏自身、今でも日本語で書くのは難しいが、それ

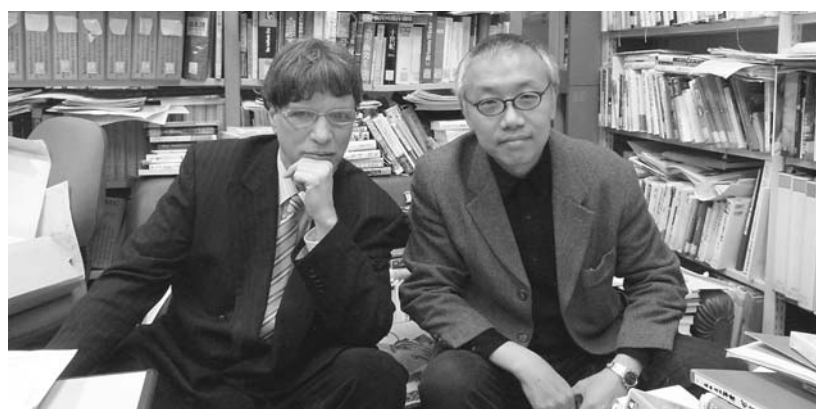


はどの言語でも同じであり、越境文学というのは、作家が身体的にまで異文化に身をさらして初めてそう呼べると述べた。また、二〇歳から四〇歳までの人生は、日本に永住して日本の作家として認められることが目的だったが、それで認められてしまった時点で、中国に行き始め次のステップに進んでいったという。その意味で『仮の水』は重要な作品であり、中国語を聞いて漢字を想像し、日本語でその漢字を読んで、それによって意味がずれてしまう。そうし

て意味がずれてしまったところで一つの表現を得る、表現を獲得するという文学創造のプロセスを語った。自著を自ら英語に翻訳することではなく、優れた文学言語である日本語にこだわるという。中国についての記事はアメリカのジャーナリズムやノンフィクションはいつも面白いが、自分は文学言語としての日本語で書く。作家と研究者の関係についても、研究者のなかでも移動する外国文学者の方が自分の作品を理解してくれるという。クレオール作家という定義を広げれば、西欧中心主義への反感から母語の英語を自ら断ち切ってきたリービ氏もその一人と呼べるかもしれない。その出発点は七〇年代初頭の新宿体験であり、それは日本語でしか描けなかったし、エキゾチズムから逃れる形で書いたという。そしてその後、日本語を通しての中国経験が日本対西欧という図式から解放してくれた。『天安門』あたりから日本語のテクストのなかに中国語や英語も入れてトライリンガル的に書くことをしているが、単なるエキゾチズムを超えつつ言葉のずれを文学的メタファーにしている。多和田葉子のいうエクソフォニーについて言えば、自分もエクソフォニー・ライターと呼ばれるけれども、そういうカテゴリーに入れられると、摩擦と

か緊張というものが消える懸念がある。英雄という名前の通り、アーサー・ビナードや楊逸とは異なり、アイデンティティを崩した形でより身体的な摩擦と緊張の中で文学を創造しているのだと述べる。その際、母語でも外国語でもない継母国語 (step-mother tongue) というものもあり、そうした異言語によるすごい体験 (身体的経験) というものを大事にしたという。『仮の水』の仮という漢字は、「偽物」と「かりそめ、一過性の」という二つの意味があり、中国の奥地ではすべて偽の意味で使われており、仮のタバコ、仮のワイン、仮の軍服など、様々の偽の欲望が至る所に出現している。こうしたかりそめの領域の上に、シルクロードや万葉集、源氏物語といった世界に結び付けていくフィクションを作り出した。それが言葉の次元によって作り出される重層的な文学世界であるという。日本語の仮名と中国語の真名を比べると、日本語のほうがやさしく中国語のほうが難しいという平安時代の日本人の意識はわかるが、むしろそうした仮の言葉を感じる。中国では耳から入ってくる音から日本語の文字が浮かんでくるという一種の翻訳プロセスから文学が生まれているという。また『仮の水』の主人公を三人称の「彼」にした理由を聞かれて、

アイデンティティや国籍を決めない主人公に設定するためだとする。そして母語でも間違っている表現、基準とは違った表現を作るというのが、本当の文学では行われており、それは母語における越境であり、自分の言語と摩擦するのが越境の定義だとする。文学を書いているプロセスにおいて、何かを書こうとして全然違ったものを書いてしまうというように、何か本質的なものが突然出てくるといふことがある。そして、一度異化された母語が異言語のようになってそのような意識で書くという話は刺激的であるが、自分は母語には戻らないと断言した。自分の台湾と中国の関係性についていえば、五〇年代の台湾で子供時代を過ごした経験から、九〇年代の中国を見るという言語的な迂回をしているので、台湾の歴史に日本が入りそこから中国へ行くという複雑な経路を通っているという。



以上、空間的かつ時間的な移動、飛び越えによって、メタフォリックな平行性や類似性を見いだし、異次元のものを一体的に表現するというリービ氏の創作方法の一端がよく窺える談話となった。二人の文学者が、それぞれ文学創造の現場における神がかり的な表現意志について熱く語ってくれたのは、望外の喜びであつた。その後の懇親会でも現代文学をめぐるさらに歓談することができた。参加してくださった皆様にもこの場を借りてお礼申し上げる。

なお、本シンポジウムの全記録は、冊子としてまとめる予定である。

(本稿は、科研費基盤研究B「世界文学における混成的表現形式の研究」の研究成果の一部である。)

「名古屋市立大学憲法・教育法判例研究会」二〇二〇年活動報告

名古屋市立大学大学院
人間文化研究科
（すがわら・しん）
菅原 真

育法学会の会員でもあり、今後のさらなる憲法・教育法理論の発展のために尽力することが期待されている。学部生の会員も、本研究会を通して、判例研究の方法を理解するとともに、現場の教育法問題・憲法問題をさらに深めていくことであろう。

「名古屋市立大学憲法・教育法判例研究会」は、二〇一〇年五月に創設されたばかりの新しい研究会である。本研究会の目的は、「法学、教育学および隣接諸科学の立場から、憲法・教育法に関する判例を学問的に研究し、あわせて会員相互の協力を促進すること」（規約第一条）にあり、本研究科の教員、小中高等学校の現職教諭として働きながら大学院で研究を進めている博士前期課程の院生のほか、法科大学院への進学、中学社会科・高校地歴公民の教員免許取得を希望している学部生や卒業生など、現在、会員は多彩な一六名から構成されている。今年度は、事務局長に本研究科博士前期課程の榎崎洋一郎さん、事務局次長に同じく本研究科博士前期課程の森敦嗣さん、会長に菅原を選出し、役員会を担っている。毎月第三水曜日の夜六時から一時間半を使って、人間文化研究所を会場

にして例会を開催しており、二〇一〇年一二月までに六回を数え、年末には「望年会」を開催し、会員相互の交流を深めた。

例会では、毎回、著大な争訟事件について、報告者が事件概要・判旨・解説からなる判例報告をおこない、会員からの質疑に応答をした後、報告者が設定した論点に基づいて会員同士で議論を行っている。会員は皆、教育現場や教師・親・子どもの権利、法と教育などについて、各自の見解を有しており、時に激しくも充実した討議の場となっている。

第一回例会（二〇一〇年五月九日）は、「旭川学力テスト事件」最高裁一九七六年五月二二日大法廷判決・刑集三〇巻五号六一五頁（報告者・菅原真）、第二回例会（六月一六日）は「教育に関する個人情報保護についてーアメリカ合衆国のFERPAとFalvo判決を素材にー」Owasso Inde-

pendent School District No.1-11 v. Falvo (U.S. 2022, 534 U.S. 426)（報告者・榎崎洋一郎）、第三回例会（七月二二日）は「水戸五中体罰事件」東京高裁一九八一年四月一日判決・判時一〇〇七号一三三頁（報告者・森敦嗣）、第四回例会（一〇月二〇日）は「義務教育費負担請求事件」最高裁一九六四年二月二六日大法廷判決・民集一八巻二号三四三頁（報告者・穴井幸二）、第五回例会（十一月一七日）は、「東大ボロ事件」最高裁一九六三年五月二二日大法廷判決・刑集一七巻四号三七〇頁（報告者・岡部周作）、第六回例会（十二月一五日）は『嫡出子』と『嫡出でない子』の法定相続分差別」最高裁一九九五年七月五日大法廷決定・民集四九巻七号一七八九頁（報告者・犬飼智帆）と、毎回、憲法・教育法に関する重要なテーマについて研究を進めた。

本学の院生会員の多くは、日本教

「トランスナショナル研究会」

名古屋大学大学院
人間文化研究科
(すがわら・しん)

菅原 真

二〇一〇年活動報告

「トランスナショナル研究会」は、初代・人間文化研究所長でもある村井忠政名誉教授とその門下生によって創設された研究会である。現在、房岡光子・本研研究科研究員が事務局の任を担っている。本研究会の目的は、グローバル化時代においてますます盛んになると予想されるトランスナショナルなヒトの移動をめぐる現象とそれに付随する問題を解明することであり、現在、会員数は約二〇名である。研究会は、名古屋市立

例会では、社会学を中心に、移民史、移民政策、外国人法、在日外国人との多文化共生、エスニシティなど多分野の若手研究者が、毎回研究成果を報告し、それに基づき参加者の間で活発な議論が闘わされている。以下、例会における報告者と報告タイトルを記す。

二〇一〇年一月第一回例会（一月一三日）は、名古屋大学・大学院生の中村パトリシア氏による「在日ペルー人家族の教育戦略―犬山市楽田地区における聞き取り調査から」、第二回例会（二月二七日）は、本研研究科・伊藤恭彦教授による「グローバル・フード・システムと食の人権」、二月第一回例会（二月一〇日）は、行政書士の櫻井謙至氏による「外国人の在留資格をめぐる問題」、第二回例会（二月二四日）は、金城学院大学・丹羽卓教授による「カナダの言語政策について―アメリカ合衆国との対比

において」、三月第一回例会（三月一〇日）は、村井名誉教授による「現代アメリカ合衆国におけるネイティブイズムとバイリンガル教育について」、第二回例会（三月二四日）は、東海学園大学・宮本益治教授による「多文化共生教育の目標と課題」、四月第一回例会（四月一四日）は、日系アメリカ人移民史研究者の門池啓史氏による「著書出版までの苦労話と戦時下・滞日日系アメリカ人について」、第二回例会（四月二八日）は、名古屋大学・山口博史特任講師による「『多文化共生』にかかわる人々」、五月第一回例会（五月一二日）は、村井名誉教授による「現代アメリカのネイティブイズムとバイリンガル教育（第二弾）…バイリンガルイズムをめぐる研究動向と現代新移民第二世代の言語適応の実態」、第二回例会（五月二六日）は、松宮朝・愛知県立大学准教授による「外国籍住民集住

地域の比較研究…地域から考える視点の限界と可能性」、六月第一回例会（六月九日）は、本研研究科・菊地夏野准教授による「在日フィリピン女性の不可視性…インタビュー調査から」、第二回例会（六月二五日）は、三重大学・江成幸准教授による「メキシコ系移民に関する世代間比較の動向…エスニシティによる格差の背景」、七月第一回例会（七月一四日）は、村井名誉教授による「現代アメリカのネイティブイズムとバイリンガル教育（第三弾）…バイリンガルイズムを生む客観的要因はなにか―ポルトスラのCJIS調査結果から」、九月第一回例会（九月八日）は、名古屋大学・山口特任講師による「日系南米人支援活動に関する地域間比較枠組みに関する批判的検討」、第二回例会（九月二二日）は、梶山女学園大学・Marco SOTTILE 准教授による「日系南米人が集中する学級の力学からみた日本人と外国人のこどもの関係―三年生の学級を事例に」、一〇月第一回例会（一〇月一三日）は、本研研究科・菅原による「外国人の公務就任権」、第二回例会（一〇月二七日）は、名城大学・近藤敦教授による「国籍制度について」、十一月第一回例会（十一月一〇日）は、名古屋大学・山口特任講師による「公開データの二次分析を通じた多文化社会研究―世界

相互の交流を深めた。

二〇一〇年一月第一回例会（一月一三日）は、名古屋大学・大学院生の中村パトリシア氏による「在日ペルー人家族の教育戦略―犬山市楽田地区における聞き取り調査から」、第二回例会（二月二七日）は、本研研究科・伊藤恭彦教授による「グローバル・フード・システムと食の人権」、二月第一回例会（二月一〇日）は、行政書士の櫻井謙至氏による「外国人の在留資格をめぐる問題」、第二回例会（二月二四日）は、金城学院大学・丹羽卓教授による「カナダの言語政策について―アメリカ合衆国との対比

において」、三月第一回例会（三月一〇日）は、村井名誉教授による「現代アメリカ合衆国におけるネイティブイズムとバイリンガル教育について」、第二回例会（三月二四日）は、東海学園大学・宮本益治教授による「多文化共生教育の目標と課題」、四月第一回例会（四月一四日）は、日系アメリカ人移民史研究者の門池啓史氏による「著書出版までの苦労話と戦時下・滞日日系アメリカ人について」、第二回例会（四月二八日）は、名古屋大学・山口博史特任講師による「『多文化共生』にかかわる人々」、五月第一回例会（五月一二日）は、村井名誉教授による「現代アメリカのネイティブイズムとバイリンガル教育（第二弾）…バイリンガルイズムをめぐる研究動向と現代新移民第二世代の言語適応の実態」、第二回例会（五月二六日）は、松宮朝・愛知県立大学准教授による「外国籍住民集住

地域の比較研究…地域から考える視点の限界と可能性」、六月第一回例会（六月九日）は、本研研究科・菊地夏野准教授による「在日フィリピン女性の不可視性…インタビュー調査から」、第二回例会（六月二五日）は、三重大学・江成幸准教授による「メキシコ系移民に関する世代間比較の動向…エスニシティによる格差の背景」、七月第一回例会（七月一四日）は、村井名誉教授による「現代アメリカのネイティブイズムとバイリンガル教育（第三弾）…バイリンガルイズムを生む客観的要因はなにか―ポルトスラのCJIS調査結果から」、九月第一回例会（九月八日）は、名古屋大学・山口特任講師による「日系南米人支援活動に関する地域間比較枠組みに関する批判的検討」、第二回例会（九月二二日）は、梶山女学園大学・Marco SOTTILE 准教授による「日系南米人が集中する学級の力学からみた日本人と外国人のこどもの関係―三年生の学級を事例に」、一〇月第一回例会（一〇月一三日）は、本研研究科・菅原による「外国人の公務就任権」、第二回例会（一〇月二七日）は、名城大学・近藤敦教授による「国籍制度について」、十一月第一回例会（十一月一〇日）は、名古屋大学・山口特任講師による「公開データの二次分析を通じた多文化社会研究―世界

価値観調査 (World Values Survey) を題材にして、第二回例会 (一月二四日) は、村井名誉教授による「現代アメリカ合衆国移民二世代 (The New Second Generation) の心理について―ポルテスらの CLS 調査結果から―」、一月第一回例会 (二月八日) は、金城学院大学講師の David ABE 氏による「日系アメリカ人と仏教」である。

なお、本研究会の多くがその構成員でもある「名古屋多文化共生研究会」(会長・村井名誉教授) は、『多文化共生研究年報』第七号を発行し、ここには二〇〇九年度のトランスナショナル研究会における研究成果も幾つか収められている。また、七月三十一日には本学を会場にこの多文化共生研究会の年次総会が開催され、門池啓史氏による「日本軍兵士になったアメリカ人たち―帰米二世のアイデンティティを探索して―」、元・中部日本放送 (CBC) アナウンサーの後藤紀夫氏による「伝説の野球チーム〈バンクーバー朝日〉を追い求めて―太平洋戦争と日系カナダ人の強制収容―」の二報告が行われた。さらに、一月十一日に愛知県立大学で開催された「移民政策学会」では、村井名誉教授が「現代アメリカの移民二世代の同化をめぐる―アレハンドロ・ポルテスらの『移民

子弟の縦断的研究』(CLS) を中心に―」と題する報告を行った。現在、村井名誉教授を中心とする本研究会メンバーの手によって、このポルテスの著書 (A. PORTES and R. G. RUMBAUT, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, University of California Press, 2001) の邦訳作業が行われており、二〇一一年中に明石書店から出版される予定である。

二〇一〇年度「ドイツ現代文化研究会」活動報告

名古屋大学大学院
人間文化研究科
(つちや・まさひこ)
土屋勝彦

今年度は「フロイトと独文学」のテーマで若手から中堅まで、五名の研究者による発表・討論会を行った。以下その概要を述べる。場所は一号館国際文化学科会議室である。

五月二二日、山尾涼氏による「フロイト『ある幻想の未来』について」と須藤勲氏の「カフカの『訴訟』における「書かれたもの」と「書くこと」の二つの報告があった。

まず山尾氏の発表では、一九二七年に発表された『ある幻想の未来』では、その三年後に書かれた論文である『文化への不満』と同じくフロイトの文化的ペシミズムが展開されている。タイトルにある「幻想」という言葉は、ここでは宗教的な感情及び宗教的観念を指す。その宗教的な幻想が、ヨーロッパにおける文化の発展のひとつの礎となった。現在の文化の下す禁令の合理的説明のつかなさ、この文化と宗教との微妙

な結び付きが主な原因となっているとフロイトは主張する。人間が宗教を信じる気持ちは、幼児期に「寄る辺のない状態」を感じることによって生まれる不安から発症する、幼児の強迫神経症の症状に類似している。そこからフロイトは、当時の人間がまさに、幼児が「文化の担い手」に成長するまでに発症する強迫神経症の段階にあるのだと洞察した。それをより健全な形で克服するためにフロイトは、宗教という幻想を成長段階の早期に植え付ける代わりに、科学的な合理性に基づく教育を施すことを提唱する。その後の議論としては、宗教（キリスト教）への激しい憎悪と批判がみられる論文であるが、その背景には反ユダヤ主義に対する反発が見られるのではないか、宗教という幻想の代わりに科学を提案するというフロイトの考え方は、やはり近代主義的な科学・理性信仰が反

映しているのではないか、宗教において禁忌とされるカニバリズムも本来ポジティブな民間信仰から由来しており、それがキリスト教においても反映されている面（イエスの分身としてのパンと葡萄酒）があるのではないか、そもそも強迫神経症と宗教の相似性を自明の前提にすることができるのか、など活発な質疑応答と意見交換があった。

次に須藤氏の発表に移る。カフカの『訴訟』では、ヨーゼフ・Kは、身に覚えのない罪によって逮捕される。人間の言動とは、記録や記憶という形（「情報」）で社会の中に拡散し、保存され続けるものであるが、ここでの逮捕も、Kの過去の言動によって生じているはずであり、その自分から発したはずの「情報」が形を変えてKのもとに現れたのであるということが出来る。これは、フロイトの『不気味なもの』における、慣れ

親しんだものが「不気味なもの」として現れる、という構図にもあてはまる。自分の前に突然現れた「罪あるK」を、Kは自分ではないと否定する一方で、どこかに不気味さを感じ、無視することができなくなっていく。「過去の言動」が回帰してきたものとしての逮捕とは、何らかの根拠があるはずであり、それは訴訟の記録という「書かれたもの」である。Kは無罪を求めるが、その方法とは、請願書を「書くこと」であった。それは半生を振り返っての、自伝を書く試みとなっていく。『訴訟』に見られるKの無罪を求める戦いとは、「書くこと」によって「書かれたもの」を打ち消そうという試みであるということが出来る。また、作者カフカにとっても、この図式はあてはまる。彼は、逮捕と処刑の章を最初に書き、その後、二つの章を埋めるように訴訟の「過程」を書いている。それは、処刑に向かって書かれるはずであるが、物語は処刑への流れからそれ、別の方向へと進むようになる。それは、訴訟の過程を「書くこと」によって、すでに「書かれたもの」としての「処刑」を打ち消すことを意味しているということが出来る。討論では、情報としての自分が不気味なものとして主人公に対峙するという着想の面白さから、メディア論とし

てさらに論を發展させればどうか、抑圧されたものの回帰と「見知らぬもの」を「なじみあるもの」に変える無害化の試行に関して、他者性と自己像との連関がどうであるのか、受動体験の能動化についての質問、カフカ研究におけるフロイト的なアプローチの現状など、多様な質疑応答と意見交換が行われた。

七月一七日には、鶴田源子氏の「小説の起源としての『家族小説』とメルヒェン・フロイトの論考 Der Familienroman der Neurotiker (1909年)を手がかりとして」と福岡麻子氏の「イエリネクにおける過去の問題の仕方——フロイトの『隠蔽記憶』に照らして」の発表があった。

鶴田氏の発表では、フロイトの Der Familienroman der Neurotiker (1909) は、神経症者たちの家族ロマンと訳すことができるとして、ここでフロイトは、はじめ子どもは両親を唯一の権威を見做すが、知的な発達の後、自分に対する親の愛情の欠如を感じ取ることとを契機に、両親に対抗する姿勢をとり、自分と両親との関係を、事実を歪曲した形で空想すると述べる。通常このような空想傾向は大人になると減退するが、神経症者においては残る。マルト・ロベールに拠れば、『家族ロマン』は『エディプス・コンプレックス』によって決定される

ような人間的成長の典型的な危機を解決するために、想像力が助けを求める手段」として定義される。上記の空想は大きく三つに分類できる。第一空想として、もらい子、継子空想がある。子どもが出生の条件を認識すると、子どもにとって母親は確実な存在として、父親は不確実な存在として認識される。ここで第一の

空想よりも積極的な危機解決となる第二空想、血統空想（実際より高貴な出自であるとする）、そして第三空想、結合空想（母親を手に入れようと父親に強い対抗心を抱く）が生じる。両親に敵対するように見えるこれらの空想の本来の意味は、両親への裏切りではなく、両親に対する子どもの当初の愛情が維持され、変装したものであり、失われた過去への憧憬である。『家族ロマン』が刊行される二年前のフロイトの講演「詩人と空想」Der Dichter und das Phantasieren (1907) では、大人は自分の空想行為を恥じ、それを自分だけの秘め事とする傾向が示される。成長過程で人は現実の対象への依托を放棄し、代替形成を学ぶ。『家族ロマン』のあり方は、憐れむべき状態にある主人公が、幸福の象徴として王位を獲得するような、あるいは貧しい少女が王子と幸せな家庭を築くような、メルヒェンの図式に合致する。第三の

結合空想である母親への近親相姦欲望は、『家族ロマン』において空想する者の願望を最も満たす形式であり、この変種に自分以外の兄弟姉妹は本当は私生児であるとか、性的な魅力を感じている姉妹を肉親関係がないものとする空想があげられる。兄弟姉妹間の近親相姦を仄めかすモチーフを含む話として、グリム童話では KHM11「兄と妹」Brüderchen und Schwesterchen、KHM51「めつけ鳥」Fundevogel、KHM163「ガラスの棺」Der gläserne Sarg などがある。これ

らの話では、主人公の実際の兄弟姉妹との結合願望が抑圧され、変形されているか、その願望により両者の血縁関係がないものとされている。グリム童話の改変過程には実母から継母への変更がある。グリム兄弟自身は意識していないと考えられるが、子どもたちが歯向かう対象が悪い継母であるという点に鑑みると、これを実母への愛情を成長過程で保持し続けようとする子どもの願望の反映として読むことができる。この考え方に照らして、主人公の発言を再度解釈する試みが必要である。

次の福岡氏の発表では、構成されるものとしての記憶と物語という観点から、エルフリーデ・イエリネク (*1946) が自らの作品において、どのように過去を扱っているかを論じ

た。その際、フロイト『隠蔽記憶について』Ueber Deckerinnerungen (1899) と、ホワイト／エプストン『物語としての家族』Narrative Means to Therapeutic Ends (1990) に示される体験の「物語化」のあり方に依拠し、第二次大戦後のドイツ語圏文学における「物語」の位置づけを確認した後、イエリネクの演劇がストーリーを持たないことの意義と作用を明らかにした。フロイト『隠蔽記憶について』は、

内容そのものは取るに足らないものであるにも関わらず、奇妙にもよく保持されている記憶の諸相を論じたものである。本人にとつて重要であるはずの負の体験は抑圧され、何でもない印象が保持されるメカニズムをフロイトは、重要だからこそその体験を思い出すとする力と、それに逆らおうとする力、即ち抵抗との間の葛藤と妥協の結果として説明する。そして「隠蔽記憶」を、印象の最も重要な部分是不快感を喚び起こすものであるがゆえに抑圧され、それを代理するために日常の印象が浮上した結果と位置づける。(幼時)記憶は「浮かび上がってくる」のではなく「形成される」ものだというこの論文の示唆を引き継ぐ論者として、本発表では、臨床社会学の立場からナラティヴ・セラピーを提唱するホワイトとエプストンに着目した。彼

らは、記憶は構成的なものであり、負の体験は「物語」として語ること
で癒されるという知見を踏襲しつつ
も乗り越え、その「物語」が権威と
しての他者に与えられたものである
場合には、個々の体験の持つ固有さ
が汲み残されてしまうと指摘する。

そして、他者から与えられる「ドミ
ナント・ストーリー」に対し、患者
自らが言語で構成する「オルタナテ
ィヴ・ストーリー」を導入すること
の重要性を明らかにしている。本発
表では、この「ドミナント・ストー
リー」と「オルタナティヴ・ストー
リー」の概念に照らし、一九六〇年
代のオーストリア文学における物語
性の拒否を、体験を最大公約数的な
物語で代理するのとは異なる、「オル
タナティヴ」な文芸のあり方の模索
と位置づけた。そしてその例として、
イエリネクの『トーテナウベルク』
Totenauerg (1991) をとりあげた。
線状の筋を持たないこの作品は、様々
な方途によって、読み手に作品を「構
成」させている。本発表ではその例
として、一、連想を導く様々な形象、
二、テクストの複数の次元を意識さ
せる引用、三、意味の提示と並行す
る身体感覚（とりわけ聴覚）への作
用、の三点を示した。そしてH.-E.レ
ーマンの『ポストドラマ演劇』Post-
dramatisches Theater (1999) に依拠し、

意味の認識と感覚的知覚、意味の受
容と創出を同時的なものとして促す
これらの方途を、表現媒体の「演劇
的な」あり方と位置づけ、新しい物
語論の可能性を示唆するものである
と結論付けた。

一〇月二三日には、中川佳英氏の
「ベンヤミン『親和力論』(一九二五)
とフロイト」の発表があった。中川
氏の報告の目的はベンヤミンの当該
エッセイとフロイトとの影響関係を
論ずることではなく、晦渋なことで
知られる当エッセイをフロイト心理
学のコンセプトの助けを借りて読み
解くことである。さてベンヤミンが
当エッセイを書いた執筆動機は、当
時の大御所的ゲーテ学者、F.グンド
ルフの親和力論を反駁することにあ
った。しかしベンヤミンとグンドル
フの親和力論は実は作品解釈の基本
において共通する。すなわち共にゲ
ーテの当該作品を運命小説と規定し
ているのである。しかし両者は、運
命受容を肯定的に見るか(グンドル
フ)、否定的に見るか(ベンヤミン)
の点で決定的に分かれる。ベンヤミ
ンが当エッセイの冒頭で、注釈と批
判の区別にこだわった第一の理由が
ここにある。運命展開の洞察をもつ
て自由と形容している点を除けば、
グンドルフの運命観は全体としてソ
フォクレスの機械的運命観に近い。

これに対してベンヤミンは「運命と
は罪の連関である」と定式化しており、
運命の起因として人間の欲求と広い
意味の法を前提としている。この点
でこの運命観は、性的本能と超自我
メカニズムによる罪意識を運命の背
後に読み取るフロイトのそれと共通
性がある。ベンヤミンによればこの
運命観を美化し神話化しているのが、
オッティリーエの美である。彼女の
美は性や倫理をベールで隠したとこ
ろに成立する。これと対照的なのが
当ロマンに挿入されたノヴェレの
男女たちで、彼らは美のベールを脱
ぎ捨て、性と倫理に正面から向き合
うことで運命から自由になった。フ
ロイトは、美は性的実現を阻まれた
情動の一つであるとしているが、こ
の見方は恋愛の挫折を審美的観想的
姿勢に求めるベンヤミンの見方と軌
を一にしている。この作品に救いが
あるとしたら、それはエドアールト
とオッティリーエの頭上に星が流れ
るといふ描写が持っている中間休止
(Zesur)の作用である。この中間休
止は『オイディプス王』におけるそ
れと同様、一瞬運命の流れから離れ
られる希望を読者に抱かせる。討論
では、Zesurの意味、運命観の相違
点、フロイト的観点のベンヤミン的
な受容、美が覆うものとしてのカオ
スの意義など、多様な論点から活発

に議論が行われた。
以上、カフカ、グリム童話、イエ
リネク、ゲーテを最新の研究動向を
踏まえたフロイト理論から論じてお
り、今後の展開が期待されること
である。



「名古屋の個性・魅力・歴史と観光戦略ビジョン」ワークショップ

名古屋市立大学大学院
人間文化研究科
(やまだ・あきら)
山田 明

二〇一〇年一月六日(土) 午後、人文社会学部棟一階会議室において、市民公開講座の一環としてワークショップ(公開ゼミナール)が開催された。テーマは「名古屋の個性・魅力・歴史と観光戦略ビジョン」であり、名古屋市と人文社会学部現代社会学科の社会調査実習・山田班の学

生から報告をうけ、二時間余りにわたり観光戦略ビジョンの具体化に向け活発に議論した。

まず、名古屋市民経済局観光推進室の西野輝一室長が「名古屋市観光戦略ビジョン(案)」について、パワーポイントと概要版を使って報告した。名古屋の観光の現状を概観して、観光の戦略的課題として次の六点をあげる。①名古屋らしさを活かした魅力の創出、②都市イメージの向上と都市ブランドの確立、③プロモーションの強化、④訪名外国人の誘致、⑤観光客の受入基盤の充実、おもてなしの向上、⑥広域連携による誘客促進。

名古屋市の観光戦略の基本理念を「飛躍する名古屋の観光―世界的な交流拠点都市をめざして」として、おむね一〇年先を見据えて観光客数や観光客の満足度などの目標を掲げる。とりわけ名古屋らしい魅力を創



名古屋市観光戦略ビジョン

出し、都市ブランドを確立するうえで、「歴史観光」と「都市観光」の推進を柱とする。二〇一二年度までの重点プロジェクトでは、それぞれ四

つの課題を提起する。

「歴史観光」では①武将観光の推進、②名古屋城本丸御殿の復元、③名古屋城の魅力向上、④歴史的資産を活用したまちづくり、「都市観光」では、①文化・観光拠点の魅力向上、②産業観光の推進、③文化芸術の振興による都市魅力の向上、④なごやめし・土産品の魅力向上。そして実現に向けて、市民・民間事業者・行政が一体となったビジョンの推進とともに、「各部署との連携を図りながら、全庁をあげてビジョンの着実な推進と進捗管理」を行う名古屋市観光推進会議をあげる。

次に、名古屋市民住宅都市局歴史まちづくり推進室の横地玉和主幹から「名古屋市歴史まちづくり戦略」の報告があった。歴史まちづくり法が制定され、全国各地で戦略プランが策定されている。名古屋市においても、地域の歴史的資源を活かした魅力的な都市環境の維持・形成に向けて、歴史分野に関するまちづくりの基本方針として、「名古屋市歴史まちづくり戦略」の策定を進めている。市民からの意見・アイデアを募集するためのリーフレット、「歩こう!文化のみち」などの資料をもとに、パワーポイントを使いビジュアルに説明された。

名古屋のまちの成り立ちについて、

人間文化研究科・人文社会学部主催
ワークショップ(公開ゼミナール)
11月6日(土)13時30分~16時30分
テーマ「名古屋の個性・魅力・歴史と
観光戦略ビジョン」

報告 名古屋市民経済局観光推進室
名古屋市民住宅都市局歴史まちづくり推進室
現代社会学科社会調査実習・山田班

報告をもとに「名古屋市観光戦略ビジョン」案
について参加者とともに議論し戦略を考える。
(司会・進行 山田明)

①城下町以前の名古屋、②城下町名古屋の形成と発展、③近代産業都市への飛躍、④戦災からの復興、という時期に区分して振り返る。歴史まちづくり戦略の目標として『語りたくなるまち名古屋』の実現、協働理念として「歴史的資源をみんなでもり・いかし・つなぐ」を掲げる。歴史まちづくりの実現に向けて四つの戦略をあげる。戦略Ⅰ「尾張名古屋の歴史的骨格の見える化」、Ⅱ「世界の産業文化都市・名古屋のまちづくり資産を活かす」、Ⅲ「身近な歴史に親しむ界隈づくり」、Ⅳ「地域力で歴史的資源を『まもり・いかし・つなぐ』仕組みづくり」

三番目に社会調査実習・山田班の学生が「名古屋の歴史観光とまちづくり」と題して報告した。一〇月一六日に岐阜大学で開催された社会調査インターカレッジ発表会報告をすこし修正したものだが、パワーポイントを使って調査の中間報告をわかりやすく説明した。とくに猛暑の八月に名古屋城で実施したアンケート調査に、名古屋市の関係者や参加者からも注目が集まった。それと四間道・文化のみち・有松といった調査対象についても、観光まちづくり・歴史まちづくりの課題と関連して質疑でも話題になった。

三本の報告のあと、参加者から多



くの質問や問題が提起され活発に議論が行われた。参加した学生のメモと実習での感想などをともに、主な発言を紹介していこう。東海道をもっと活用すべきでないか、本町通りのPR、メーグルの有松などへの延伸、市民の観光意識とPR、観光スポットでのなごやめし、桶狭間や大須の取り組み、観光マップと車椅子、観光のメリットとデメリット、住民の意見を聞く窓口など。

当初は参加者から発言があるのか

心配だったが、多くの参加者が積極的に問題提起し、報告者との質疑も行われ時間が足りないほどであった。参加した市民は観光に関心があり、観光ボランティアなどを実践されている人も多く、名古屋市の観光戦略ビジョンや歴史まちづくり戦略についても具体的な指摘、注文が出された。

観光と地域住民、まちづくりとの関係についても重要な指摘があった。「観光客により、まちを荒らされたくない」という発言もあり、観光推進の影にも注目する必要があることを痛感した。参加した学生からも、観光に対する満足度とともに住民の満足度、住民生活への影響にも視点をあてる必要があり、「おもてなし」する側だけでなく、観光する側の倫理・マナーも問われなくてはならないという発言があった。

今回「名古屋の個性・魅力・歴史と観光戦略ビジョン」をテーマに市民公開講座の一環としてワークショップを企画したのは、研究所年報でも紹介してきた観光プロジェクトとの「連続性」がある。名古屋市の要請もあり、人文社会学部で総合科目「名古屋と観光」を開講して五年が経過した。研究所プロジェクトとしても観光研究を推進してきたが、こうした活動が名古屋市からも「評価」されるようになってきた。名古屋

市の観光推進を考える研究会に続いて、名古屋市観光戦略研究会の座長を務めることになり、その成果をもとにワークショップを開催することにした。

二〇一〇年一月にスタートした名古屋市観光戦略研究会は、五回の会合を経て七月に終了した。この研究会の議論や提案をもとに「名古屋市観光戦略ビジョン（案）」が作成された。当初の予定では、ワークショップには観光戦略ビジョンは出来上がっているはずであったが、名古屋市政をめぐる「動き」のなかで遅れてしまった。研究会報告書はこの間に間に合うように作業してもらい、参加者に資料として配布できた。今回のワークショップの議論が、今後の名古屋市の観光施策、観光まちづくり・歴史まちづくりに活用されることを期待したい。

ハンガリーのペーチ大学との共同研究コンフェレンスとワークショップの開催

「東中欧・バルカン地域におけるインテ カルチュラル圏の形成と変容」

名古屋大学大学院
人間文化研究科

（やまもと・あきよ）
山本明代

二〇一〇年九月名古屋大学と大学間交流協定を結んでいるハンガリーのペーチ大学において、コンフェレンスとワークショップを開催した。今年度から二年間の計画で日本学術振興会の二国間交流事業・ハンガリーとの共同研究に「東中欧・バルカン地域における職能集団をめぐるインテカルチュラル圏の形成と変容」が採択され、その第一回目の共同研究会議を行った。ペーチ大学側のパートナーは、二〇〇七年度と二〇〇八年度に本学の特別研究奨励費の助成を受けて以来、研究交流を行っている自然科学部地中海東部・バルカン研究センターである。



インテカルチュラル圏の歴史的編成を説明することである。本研究の特徴は次の二点にある。第一に、東中欧とバルカン諸国とに分断されてきた従来の地域認識に対して、両地

域の境界領域に位置するハンガリーに着目することによって、東中欧とバルカン諸国が育んできた双方向的な関係性を歴史的な視点から明らかにする点にある。この試みは、二〇〇四年のハンガリー、チェコ、スロヴァキアに続き、二〇〇七年ルーマニアとブルガリアのEU加盟によって、東方から南方へのEU圏の拡大に加えて、人の移動を自由化するシェンゲン協定領域のバルカン諸国への拡張も伴って、当該地域において新たな政治・経済圏が形成されつつある現状を念頭においたものである。さらに、ハンガリーに注目すると、社会主義時代のソ連を例外として、従来、西欧諸国との密接な関係が強調されてきたが、一九八九年の東欧の体制変革後には、再度、西欧諸国との政治・経済・文化的一体性を確認・強化する傾向がみられた。しかし、現在進行するEUのバルカン諸

国への拡大に伴って、ハンガリーは西欧諸国とバルカン諸国との仲介者の役割が期待されている。この点は、ヨーロッパの一都市を一年間文化首都に定めて文化観光を促進するEU主導の「ヨーロッパ文化首都」の二〇一〇年開催地にハンガリー南部の都市ペーチが選ばれたことにも表れている。本共同研究は、このような現代的課題と要請に対して歴史的な視点から応えようとするものである。

第二の特徴は、東中欧・バルカン地域間のみならず、その領域を越えて移動した様々な職能集団に焦点をあてる点である。職能集団の移動と活動範囲、生産活動・労働と生活形態、地域における役割や位置づけ、集団をめぐる共生や紛争の形態を動的に考察することによって、必ずしも階層化されない相互に絡み合ったローカルな文化圏の実態を明らかにする。エスニシティの観点から多様な構成要素から成る職能集団は、その集団自体が混雑的な文化の発信者であるが、主流社会に参入・介在し、主流文化を変容させるアクターでもある。複雑な民族問題が強調されがちな東中欧とバルカン諸国に対する地域認識に対して、本研究は新たな地域像を示すことを試みたい。

九月二日午前に開催したコンフェレンスでは、ハンガリーにおけるバ



ルト氏がハンガリー側メンバーを紹介し、コンフェレンスが始まった。

コンフェレンスでは共同研究メンバーによる以下の四つの報告が行われた。秋山晋吾氏（一橋大学）「日本におけるハンガリー研究」、木村真氏（日本女子大学）「日本におけるバルカン研究の過去と現在」、シヨクチェヴィチ・デーネシュ氏「南スラヴ主体性のイデオロギー」、ヴェーグ・アンドル氏「バルカン半島西部地域におけるエスニック諸集団と諸文化の接圏」日本側メンバーによる日本における東欧・バルカン地域研究への問題関心と成果を論じた報告に、来場したペーチ大学のスタッフや大学院生、市民は高い関心を示し、多くの質問が出された。

ルカン研究と日本におけるハンガリー研究・バルカン研究の主要な成果を報告し、相互の課題を交換した。コンフェレンスの冒頭、来賓として招いたペーチ市選出の国会議員ホッパール・ペーテル氏と在ハンガリー日本大使館の倉金圭氏、ペーチ大学の文学部長フィツシャー・フェレンツ氏とアジアセンター長ヴィルヘルム・ゾルターン氏から挨拶をいただいた。続いて、日本側代表者である山本明代が日本側メンバーを、ペーチ大側代表者である地中海東部・バルカン研究センター長パプ・ノルベ

の転換と『近代』、秋山晋吾氏『ガストアルバイター』としてのギリシア商人」、キタニチ・マーティー氏「ハンガリーの伝統的・初期資本発展期における南スラヴ人による事業の戦略的役割」、木村真氏「ブルガリア野菜栽培農民」、ヴェーグ・アンドル氏「バルカン半島におけるエスニック諸集団の接圏」、山本明代「一八世紀ペーチの革なめし職人とギルド」、百瀬亮司氏（大阪大学）「旧ユーゴスラヴィアにおける日常史研究の現状と可能性」、レメーニ・ペーテル氏「旧ユーゴスラヴィア地域におけるエスニック空間の同質化」



当日夜のレセプションでは、副学長コムローシ・ラースロー・イムレ氏をはじめ、ペーチ大の他の研究スタッフや大学院生、日本研究者らと研究交流を行った。翌日には、ペーチ市で今年開催されているヨーロッパ文化首都の事務局本部への訪問とイベントの見学、新たに建設された図書館・研究センター、建設中の国際会議場を訪問し、関係者から文化首都のイベントの成功や問題点について聴く機会を持つことができた。二〇一一度はハンガリー側メンバーが来日し、名古屋市立大学を中心にセミナーやワークショップを開催する予定である。

午後のワークショップは共同研究メンバーと一部の研究者のみで行った。ワークショップでは問題意識を共有し、今後の方向性を定めるために、共同研究において各自が取り組むテーマとその内容の報告を行った。各報告テーマは次の通りである。パプ・ノルベルト氏「ハンガリーの地政学的思考におけるバルカン観の変容」、鈴木広和氏（大阪大学）「近世ハンガリーにおける知識人たちの描く『トルコ人』像」、シヨクチェヴィチ・デーネシュ氏、戸谷浩氏（明治学院大学）『軍政国境地帯』の性格

サイエンス・カフェ

第三回 サイエンス・カフェ

二月二日(日)

テーマ:「センター入試問題はどのようなに作られるか—英語の場合」
講師:宮田 学教授

毎年一月中旬に行われるセンター試験。その中でも最も受験生が多い全国約五〇万人が受験する英語の試験の裏側に迫った。宮田先生には平成一八年度から平成一九年度の二年間にわたって英語(筆記)の作題委員として試験の作成に携わったという経歴がある。しかも、一年目は副部会長、二年目は部会長を務められた。その経歴をもとに問題がどのように作られ、どんな手順で出来上がったのかを、実体験を交えながら詳しく説明された。作題委員には守秘義務があり、委員である任期期間はある一定の人しか知らないという重要な任務である。その期間、作題委員には相当なるプレッシャーがかかるのではないかと感じた。また、試験

実施後の受験生・高校教師や塾・マスコミ等の反応についてのことや平成一九年度の出題形式の大幅変更の話にも触れられた。当時、受験指導をしていた私としては、出題形式の大幅変更の話は大変興味深く拝聴した。

最後は、これからの英語教育はどうあるべきかという議論に移った。現在、英語という教科は高校・大学入学試験の必須科目である。しかし、本来何のために英語を勉強するのかといえば、試験のためではなく、英語の文献を読み、英語で自己表現が出来るようにするためである。そして、その英語力をアップさせるには受験テクニックではなく、「英語を聞き、話し、読み、書く」ことが基本である。そのことを念頭に置いて教育することが現在の英語教育には重要であると宮田先生は強調されていたのが印象的であった。
中島眞吾(人間文化研究科博士前期課程)

第三回 サイエンス・カフェ

三月二日(日)

テーマ:「ウチナーVSヤマト」
講師:阪井芳貴教授

現在、連日沖縄報道がなされている。もちろん普天間基地移設問題だ。政治や「沖縄」について知識のない者でもテレビや新聞から基地のゆくえきが気にならざるを得ない状況の今日、沖縄県美ら島沖縄大使でもある阪井芳貴教授から「ウチナーVSヤマト」の題目で講義が行われた。

まず、日本においてトップであるかワーストであるかというポジションにある沖縄の説明がされた。平成一八年から二〇年における主要指標調査の概説で沖縄の外郭が理解できたところで、次に沖縄の歴史に移った。この歴史説明は単なる沖縄の時の推移ではなく、ウチナーからみた日本、ヤマトからみた沖縄の視点からの歴史が語られ、外からくるものを受け入れながらも自分のものに変容して受け入れて来た歴史に沖縄のあたりのよいやさしさの奥にある、したたかさ、強さを感じた。歴史を語りながら「集団自決」をめぐる教科書検定問題、米軍基地の過重負担、江戸時代に一八回も行われた江戸上

り、それにより琉球側と幕府側の異文化体験といった政治、経済、文化にまで多岐にわたる内容であった。

また、四月二五日に沖縄県民大会が開催されることにも言及された。沖縄の人たちは県外、国外移設を求めている。しかし、政府はシュワブ陸上部とホワイトビーチ沖の二案を提示方針とし、首相は沖縄県外移設の断念を示唆したされている現在、私たちはどうしたらよいのか考えさせられる。三月下旬春分の日であったが、午前は黄砂に覆われ、午後は強い風が吹いた寒い天候のなか、一九名の方が参加された。終了後、帰路、栄の繁華街を歩きながら、まわりの若者にとって沖縄はどんな存在なのだろうか、今後基地問題はどのような結果に至るのか思い巡らされる講演内容であった。

水野美津子(人間文化研究科博士前期課程)

第四回 サイエンス・カフェ

四月二日(日)

テーマ:「アメリカ文学とボーダーランド」
講師:田中敬子教授

講 師:田中敬子教授

今回は田中敦子先生が、メキシコ系アメリカ作家の作品が歴史の中でどのように登場し、どのような意味のある作品であったかを講義された。ボーダーランドとは国境地帯で、広義には異文化が混在する地帯を意味する。グロリア・アンサルドウアの『ボーダーランド』というタイトルの本は狭義にはアメリカとメキシコのボーダーを主として意味している。しかし、古典的アメリカ文学におけるボーダーランドとは、文明と自然の境界としてとらえられている。一九世紀においても同様なとらえ方で作品が書かれたが、自然への傾斜が



見られる。異文化とのボーダーランドをアメリカが強く意識するようになったのは、二〇世紀後半といえる。

さて、一八二一年のメキシコ独立や一八三六年のテキサス独立などの歴史を背負ったメキシコ系アメリカ作家は自分たちのアイデンティティを表す呼称を用いて「チカーノ・チカーナ文学」を生み出した。アンサルドウアの『ボーダーランド』（一九八七）はチカーナ（女性作家）文学の一作品であり、国・性別・言語などのボーダーに生きるメキシコ系アメリカ人のアイデンティティをテーマにした。さらに、同時代のメキシコ系アメリカ人ではない白人作家がメキシコ国境を描いた作品をとりあげ、彼らにとって、アメリカとメキシコのボーダーとは異なるボーダーが存在するのではないかと結んだ。一般的にはあまり知られていないメキシコ系アメリカ作家の作品のあらすじをわかりやすくお話いただき、文学の世界を味わうことができた。

伊藤泰子（人間文化研究科博士後期課程）

第三五回 サイエンス・カフェ

五月一六日（日）

テーマ：「文学の中の丸善」

講師：谷口幸代准教授

「記憶の中の丸善」

谷口先生のお話をうかがいながら、子どもの頃からあこがれていた丸善が明治時代から文学者のみならず知識人にとって、舶来文化との重要な接点だったことを再認識しました。そして東京日本橋の本店や名古屋店の正面玄関を入ると突きあたりに左右に分かれて階上へ進む階段のある風景や、早く丸善で洋書が買えるようになりたいたいと思つて青年期を過ごしたことを懐かしく思い出していました。それが、私たちの世代の大人への通過儀礼であつたと思います。



谷口先生とはかなりの期間同僚であつたのに、私は先生の講演を聴くのは今回が二回目でした。周到に準備された講義内容と資料、誠実なお人柄が伝わる朗読など、とても感銘を受けました。あつという間に予定の時間が過ぎ、五月晴れにふさわしいさわやかな気持ちで帰途につきました。次回は、科学者からみた丸善を聴いてみたいと思います。

後藤宗理（相山女学園大学教授）

第三六回 サイエンス・カフェ

六月二〇日（日）

テーマ：「注意の初期発達…『いたい』の、いたいの飛んで行け」の真実

の真実

講師：中川敦子教授

梅雨らしく、激しい雨が降る中で今回のサイエンス・カフェは開催されました。そうした足元が悪い中にも関わらず、予想を上回る方々が講義にいらつしやいました。

中川先生より、今回の論題である、なぜ「いたいの、いたいの飛んでいけ」の言葉掛けで子どもの「痛み」が緩和されるのか？を分かりやすく解説してもらいました。普段何気なくおこなっているこうした行為も、「痛みの発信源である対象から、他のもの（対象）へ注意をそらす」と考

えることでひとつの学問として捉えることができました。また、子どもの「注意」という機能がどのように発達し、脳のどの部分が関与するのかなど、神経心理学をご専門にされている先生らしく、詳しくも分かりやすく教えてもらえました。

また、注意機能の初期発達を豊富な実験経験を交えてお話ししてください、実験という特殊な状況を想像しにくい聴衆からも活発に質問が上がりました。みなさん、子どもの発達に関して並々ならぬ関心を抱いていらっしゃるということが伺え、有意義な時間を過ごされたようでした。終了後は雨も上がり、みなさん満足気な表情で雨上がりの栄へと消えていきました。

木村由佳（人文社会学部卒業生）

三七回 サイエンス・カフェ

七月一八日（日）

テーマ：「税制改革の政治学―公平な社会のための税を考える―」

講師：伊藤恭彦教授

七月一日に行われた参議院選挙では、消費税が大きな争点となりました。IMFからの勧告や、事業仕分けなども含め、今日、「税」が大きな課題となっているなか、まさにその「税」をテーマにサイエンス・カ

フェが開かれました。

伊藤先生は、「税」を経済学の視点からだけでなく、政治哲学の観点から捉え、税が奉仕する正当な「社会目標」が必要であると指摘されました。私たち国民が、どのような社会を実現したいかという共通の目標を設定し、その実現の手段として税制を捉えるという考え方は、非常に民主主義的で、また理にかなった考えであると感じました。人それぞれ多様な経済生活の中で、いったい公正な税とは何かと考えるとき、この社会目標を指標にすれば、おのずとその方向性が見えてくるかと思います。たばこ税などわかりやすい例も挙げられました。また、社会保障など、いわば自分以外の他者に分配される税の不公平感の反論として、個人が労働できるのは、他者の労働によって支えられているのだという見解は、非常に説得力がありました。

リバタリアニズム（自由至上主義）の主張も一見正しいように思えますが、誰もが社会システムの一員として存在していることを考えると、その矛盾は明らかで、改めて他者と自己との関係を認識するとともに、税制の必然を考えさせられました。税について、そして社会目標について積極的に議論していくことは、税を負担する私たちの権利であり、また

義務でもあると感じます。名古屋市では、河村市長の政策により、市民の意志を行政に伝える場が設けられています。そのような、市民が「社会目標」をつくっていく場が今後普及するとともに、より活性化していくことを願います。

野川恵生（人文社会学部生）

三八回サイエンス・カフェ

八月二三日（日）

テーマ：「COP10と名古屋の観光まちづくり」

講師：山田明教授

開府四〇〇年記念イベントが佳境を迎え、COP10の開催が目前に迫った八月。今月のサイエンス・カフェでは名古屋市観光戦略研究会の座長でもある山田明先生が「COP10と名古屋の観光まちづくり」をテーマに講演されました。

今回の講義では自然環境や生態系の保護・保全と歴史的・文化的遺産の保護・保全の二つの側面から、名古屋における都市型エコツーリズムの可能性と、観光をきっかけとしたまちづくりについて、ユーモアを交えながら、わかりやすく解説していただきました。エコツーリズムと聞くと自然環境に関する観光をイメージしがちですが、歴史・文化的遺産

の保全・保護という視点からの考察は新鮮に感じました。

名古屋には東山の森や藤前干潟、郊外の里山の豊かな生態系、そして名古屋城や有松地区、白壁地区の街並みといったような歴史的・文化的資源といったような都市型エコツーリズムの要素が豊富に存在しているものの、これらが十分に認識、活用されていない現状を指摘されました。また、観光戦略研究会座長として、名古屋市の観光行政への働きかけの成果やご苦労をご報告いただき、明



確なビジョンを持って、全市をあげて名古屋の個性と魅力を生かす観光まちづくりを行っていくべきだと結論付けられました。

参加者も熱心に講演に耳を傾け、質疑応答の場面では参加者自らの実体験に基づく一歩踏み込んだ具体的な提案がなされるなど、活発な意見交換が行われました。

都市型エコツーリズムが名古屋における新たな観光スタイルとして定着するためには、まずは私たち市民ひとりひとりが名古屋の魅力や個性について見直し、知る必要があるのではないかと感じました。

近藤康一郎（人文社会学部生）



マンデー・サロン

マンデー・サロン

三月一五日(月)

テーマ:「地域における芸術教育の可能性——小学校からの実践報告」

講師: 梶田美香 (人間文化研究科博士後期課程)

本学大学院博士後期課程の梶田美香さんを講師に開催された。前半は、梶田さんが小学校で実践しているプログラムに沿って進められた。初めのグランドピアノの生演奏を聴きながら、音楽教室というこじんまりした空間であったせいか、「音」は物体の振動が空気の振動として伝わることを改めて実感していた。iPodやケータイで音楽を聴くのでは味わえないであろう、空気の振動を皮膚で感じるような一次的経験が子どもの発達過程において重要である、という講師のメッセージが込められているようにも感じた。続くヤマハミュージック東海の佐橋さんの「チェン

バロは叩くのではなく引?いて音を出す」「グランドピアノはレペティションレバー機構によつて鍵盤が素早く戻る」などのピアノの仕組みに関する話も、とても興味深いものであった。さらに、演奏された曲のイメージから題名をつけてみたり、グランドピアノの周りでハンマーが弦をたたく様子を目の前で見たり、受動的のみにならないよう工夫されていたが、子どもたちとは異なり、目の輝きや反応がやや鈍っている聴衆を前にお二方ともやりにくかったのではないかと思う。後半はパワーポイントによる報告で、音楽など芸術の専門家が、外に出かけて行つて芸術普及活動を行う「アウトリーチ」について説明がなされた。梶田さんは、このアウトリーチを小学校で実施するにあたり、「総合的学習」における一過性的な活動にとどめるのではなく、音楽科教育の中に位置づけようと、意欲的に取り組まれている。特

に「鑑賞」だけではなく「創作」すなわち曲作りまで行うことで、子どもたちの音楽に対する意識が大きく変化したであろうことが推察できる。おそらく今後は実践による効果をどのように客観性をもつて評価するか、について検討されていくことと思ひ、研究の発展に期待している。

野中壽子 (人間文化研究科教授)

マンデー・サロン

四月一九日(月)

テーマ:「ひめゆり 平和への祈り」

展に寄せて」

講師: 安藤さおり (かわら美術館学芸員)

長 阪井芳貴 (人間文化研究所)

阪井先生の主催により、沖縄のひめゆり学徒隊について、高浜市のかわら美術館学芸員の安藤さん、そしてそのバックアップをされた朝日新聞社の小倉さんからお話をうかがった。その内容はひめゆり学徒隊のみならず、戦争全般、それを後世に伝えることの問題についての話までにおよび、幅広く濃い内容であった。安藤さんが言われていた中でも私が



強く心に残ったことは、「戦争を分かつたつもりになっていないか」ということであった。原爆資料館や特攻隊平和記念館など、昔私は訪れた時に涙があふれ、大変なショックを受けたことを思い出した。そして思った、「こんなことはやめてはいけない」と。しかし、その衝撃ですら私は戦争の悲惨さのごく一部を垣間見たにすぎないのではないと感じた。現実では、もっと残酷のだ。戦争とは体験者にしか分からない、想像を逸脱した恐ろしさをもっていることが分かり、とても考えさせられた。

また、そのような想像を絶する戦

争の体験を体験者が語るのは非常に難しいという。それらの体験をふまえ、平和についての大切さを語るのは簡単ではないという。また、平和を伝えようとしても、正しく伝えることは難しい。広報の誤った解釈もある。さらに、当の沖縄の戦争を知らない世代も、沖縄の歴史や文化などを知らないこともあげられる。

私は茶華道の先生が戦争のことに
ついて語った後に、ふと何かを思い
出すようにもらした言葉が忘れられ
ない。「戦争のことは、話し出したら
切りがないけどね・・・。」どのよう
な想いを背負って、先生は私の前で
そのようなことを言われたのだろう
か。戦争の悲惨さを語り、平和につ
いての大切さを伝えることは、戦争

の体験者をどれほどの心にさせてしま
うのか。きっと私にははかり知れ
ない重みをもっているのだ。「戦争の
愚かさを説き、平和の大切さを後世
に伝えなければならぬ。」よく言わ
れることだが、それすらも戦争の経
験者にとっては、今尚、残酷である
のだ。私たちはあまりにもそれを知
らないのではないかと感じた。

さらに、平和を伝える場所を探す
ことにも苦労したという。今回は、関
東の大都市では行われない。何故な
ら、その場所を受け入れてくれると
ころはなかったからだ。実は、受け
入れ先はほとんど断られてしまった
いう。また、かわら美術館でも入場
者はほとんど年配の方々であり、戦
争を知らない世代はなかなか来場し
ないという。つまり、平和の大切さや
戦争の恐ろしさを伝えたい次世代の
入場者が少ないということだ。その
ためかわら美術館では、教育委員会
を動かして積極的に次世代にそれを
伝える働きかけをしている。平和を
伝えることは、その背景を整える
ことも難しいことを痛感させられた。
最後に、ひめゆり学徒隊の生き残
りの方々には子供がいると配布資料
を見て分かった。いわゆる「戦争の
落とし子」と言われる方々である。
そして、その子孫が今続いているだ
ろう。ひめゆり学徒隊はその過半数

の方々はその尊い命を奪われている。
生き残った方々も、紙一重にその中
に入っていたかもしれないのだ。生
き残った方々の命の血脈が今に息づ
いているが、もし戦争などなく、亡
くなった方々が生きていたら、どの
ような命が現在に続いていたのかを
考えずにいられない。実は、私の亡
くなった祖父も、空襲時に実家に帰
っていて、たまたま生き残れたうち
の一人であるのだ。たった一日の差
である。私は戦争で、一日の差によ
っては生まれない命であったのかも
しれないのだ。

伊澤志奈（人間文化研究科博士前期
課程）

マンデー・サロン

五月一七日（月）

テーマ：「日本のシェイクスピア上演」
講師：小林かおり教授

五月一七日、新年度第二回のマン
デー・サロンがおこなわれました。
小林かおり先生に、着任早々のお忙
しい時期にもかかわらず、約七〇分
にわたって、「日本のシェイクスピア
上演」というタイトルでお話して頂
きました。日本におけるシェイクス
ピア上演史の検討という課題は、『ハ
ムレット』の「芝居は自然を映し出
す鏡」という言葉に従いながら、シ

ェイクスピアの上演のされ方が、日
英の関係性もしくは日本社会の変化
を映し出す鏡であるという見地から
設定されました。具体的には、日本
のシェイクスピア上演の歴史が三つ
の時期にわけられ、「近代化Ⅱ西洋化
の時代」には西洋の模倣、「日本経済
の発展の時代」にはオリエンタリズ
ムの体現と解釈される日本独自の価
値観の強調、「ポスト・バブル時代」
には西洋の視線からの解放と、アジ
ア諸国との競演や多様な方向性の出
現という特徴が指摘されました。小
林先生のお話には画像や映像が多く
用いられ、特に現在進行中のシェイ
クスピアのアジアでの上演のアーカイ
ブ化プロジェクトは、十分なインパ
クトを聴衆に与えました。またお話
しの内容は、参加者のそれぞれの立
ち位置にそった多様な関心を惹起す
る刺激的なもので、質疑も文学的な
関心から経営思想との比較対照まで
多岐にわたる、予定の時間をややオ
ーバーする活発な議論となりました。
安藤 究（人間文化研究科准教授）

マンデー・サロン

六月二日（月）

テーマ：「心理学から見る「私はなぜ
私なのか」という問い」
講師：天谷祐子准教授



本年度二度目のマンデー・サロンは、四月から本研究科に着任された天谷先生を講師に「心理学から見る『私はなぜ私なのか』という問い」というテーマで開催され、二〇人弱の参加がありました。心理学をご専門とされる天谷先生ですが、心理学をほとんど知らない方や初学者にもわかりやすいように説明を加えていただきながら報告をいただきました。

天谷先生には、「私はなぜ私なのか」というある種哲学的な問いは多くの人（とくに子ども）が持ったことのあるもので、発達においてある程度一般的な現象であるという点、そしてこのような問いを持つことが発達の中でどのような意味や役割を果たすかという点に関する展望など非常にボリュームのある報告をしていただきました。このような哲学的な問いを一人の人間の問いとしてではなく、多くの人の発達における体験として心理学から分析するという報告は、心理学という学問がどのようなものであるか、その一側面が参加者に伝わる報告であったように思います。また、本報告は心理学の中でも主流となるテーマとは異なる側面を持ち合わせており、心理学をある程度学んだ参加者にとっても知的好奇心を刺激されるものであったのではないかと思います。このテーマ

は天谷先生がこれまでに、そしてこれから取り組んでいかれるもので、その「最前線」をお伝えいただきました。質疑応答もその「最前線」をめぐる活発なものとなりました。

太田昌志（人文社会学部生）

マンデー・サロン

九月二七日（月）

テーマ：「桃山文化と御殿の深い関係」

講師：岡村弘子（名古屋博物館学芸員）

市立大のマンデー・サロンに参加させていただいた。話題は「桃山文化と御殿の深い関係」という市博学芸員 岡村弘子さんのお話であった。岡村さんは二五日から市博で開催



中の企画展『桃山』を担当されてきた一人で、三年前から準備されてきたとのことであった。

桃山というと伏見桃山城をだれもが思い浮かべるに違いない。障壁画や豪華絢爛な荘厳、調度品が思い浮かぶだろう。桃山の時代の資料が展示されている由だが、今日の講演は城と御殿についてであった。（展示の目玉商品に信長画像、二条城障壁画があります。）

信長が築いた安土城から始まり、秀吉の聚楽第、大阪城、そして築城四〇〇年で喧しい名古屋城、二条城と具体的に城と御殿のスタイル、設計がどう変わってきたかを、図面や絵図を使って説明された。一般的というよりはかなりのところ専門的というか、けっしてポピュラーとは言えなかった。しかし、御殿建築の様式の変化を時間の経過を追う形で説明されたので聞いていればなるほどとは思える。それでも興味がない人には、難しい話だろう。（受け手を考えた工夫がいる。）

安土城の行幸御殿は発掘結果に照らしてみて殆どこれ以上面積をとるのが困難ではなかったかと、考古学の発掘が歴史の読み解きに大きな役割をしていることは面白い指摘だった。聚楽第の絵が瓦葺の城と松皮葺の御殿を画き分けているものなるほ



どと思った。主殿の上段の間の変化など、どういう理由か形（＝間取り）が変化するのも政治の場所としての御殿を考える意味で興味あることだった。問題が投げかけられたが答えは出ていない。

名古屋開府四〇〇年がユルキャラや武将隊やらを動員して歴史の真実とは言えない話を広げているところで博物館の記念企画が際物になるのは厭だなと思っていたのですが、さすがに担当学芸員さんたちは科学的な態度で取り組んでくださっていることがわかり、困難の中に努力されていることを感じた次第です。

西浦芳郎（市民）

年間活動

二〇一〇年

四・一八 三四回サイエンス・カフェ、田中敬子教授「アメリカ文学とボーダーランド」
 四・一九 マンデー・サロン、安藤さおりかわら美術館学芸員「ひめゆり平和への祈り」展に寄せて」

五・八 トーキング・カフェ
 五・一六 三五回サイエンス・カフェ、谷口幸代准教授「文学の中の丸善」

五・一七 マンデー・サロン、小林かおり教授「日本のシェイクスピア上演」

六・二二 トーキング・カフェ

六・二〇 三六回サイエンス・カフェ、中川敦子教授「注意の初期発達：『いたい、いたい』の飛んで行け」の真実」

六・二二 マンデー・サロン、天谷祐子准教授「心理学から見る『私はなぜ私なのか』という問い」

七・一 ニュースレター (No.19)

七・三 トーキング・カフェ

七・一八 三七回サイエンス・カフェ、伊藤恭彦教授「税制改革の政治学―公平な社会のための税を考える―」

七・一九 マンデー・サロン、川合剛名古屋博物館学芸員「特別展ボンペイ展世界遺産古代ローマ文明の奇跡」

八・二二 トーキング・カフェ

九・一一 トーキング・カフェ

八・二二 三八回サイエンス・カフェ、山田明

教授「COP10と名古屋の観光まちづくり」

九・一九 三九回サイエンス・カフェ、久保田健市准教授「青年の自立と家庭・地域の教育力」

九・二七 マンデー・サロン、岡村弘子名古屋博物館学芸員「桃山文化と御殿の深い関係」

一〇・九 トーキング・カフェ

一一・六 トーキング・カフェ

一一・二七 研究所開設六周年記念講演会・シンポジウム、「博物館と大学がつくりだす魅力あるまち―市博物館と市立大学の新しい取り組み―」

講演会 三輪嘉六九州国立博物館館長「市民共生の博物館を目指して―九州国立博物館―」

シンポジウム 「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」

一二・四 トーキング・カフェ

一二・二〇 マンデー・サロン、浜本篤史准教授および浜本研究室学生「開発事業の記憶と地域活性化―御母衣ダム質問紙調査の単純集計データ（速報値）報告」

二〇一一年

一・二二 トーキング・カフェ

二・二二 マンデー・サロン、安藤究准教授「『死の商品化』とジェンダー―『生命保険』と家族・ライフコース変動」

三・五 トーキング・カフェ

三・一四 マンデー・サロン、菅原真准教授「ジェンダーの視点から考える民法の婚姻規定―世間の『常識』と憲法理念―」

編集後記

研究所の今年度のテーマは、博物館と地域を結ぶために大学が果たす役割を実践的に探ることでした。今号の特集もその一環として組んだものです。記念講演会とシンポジウムの活字化を軸に、名古屋博物館、高浜市やきもの里からアジアまでの寄稿で構成しております。基調講演の再録をご快諾下さった三輪嘉六九州国立博物館館長をはじめ、ご協力下さった皆様に厚くお礼申し上げます。（谷口幸代）

今年度の記念講演会の準備の中で、愛知県内に非常に多くの博物館・美術館・資料館があることを知りました。愛知県博物館協会に加盟している館だけで百三十弱、加盟していない館も含めると三百以上の博物館があります。非常に大きな規模のものから個人の努力で運営されている小さなものまで、またその種類も様々です。そうした多様な博物館の存在という財産を、どのように社会に活かしていくのか。大学、とりわけ地域との関係が深い公立大学にとって、重要な課題の一つです。今年度の研究所のテーマによって、ようやくその入り口が大学が立てたわけですが、本格的な活動と貢献はこれからの課題です。（安藤 究）

人間文化研究所年報 第6号

発行日 二〇一一年三月三十一日

発行者 名古屋市立大学人間文化研究所
 （名古屋瑞穂区瑞穂町字山の畑一番地）

Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp

HP: <http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute>

編集委員 阪井芳貴 谷口幸代 安藤 究

印刷所 株式会社 正鶴堂

（名古屋市中北区志賀南通二一四）
 （電話 〇五二一九一四一八五五）



人間文化研究所年報